

の破棄を公然聲明するところあつた。之と前後して露伊を恐れる土耳其も、従前より一層強く海峽防備の自由を恢復せんとするの希望を表明し、後「ローザンヌ」條約第四條以下の海峽非武裝に關する條項の改訂を、軍擴の狀勢及ローザンヌ條約第十八條の列強共同保障の不確實を理由として要求した。越えて四月一日地地利首相は祖國強化の爲め徵兵制度を採用する趣を議會に於て公表した。右は「サンゼルマン」條約を破棄して、常備軍を十五萬人に増加するを意味し、塙國をして獨乙への併合に有効に對抗せしむるに足るであらうと傳へられた。之等の出來事は行々洪牙利や勃爾牙利を鼓舞し、尠くも改訂要求を差出さしむるに於ることを閉却し得ないであらう。

第二章 國策の具としての平和運動

茲に云ふ平和運動といふ語は、軍縮運動や一般的の平和機構の組織を意圖する規約の締結運動等を含む廣義の平和運動を意味する。唯同盟條約や之に類する特定想定敵國を持つた地方的安全保障條約の如きは、平和に向て一步すると同時に戰爭に向つて一步するものであり、軍備が國策の延長であると同一の意味に於て國策の延長となるものであるから最早本稿に於て検討を要せないものである。

茲に云ふ「國策の具」と云ふ文字は、始めて米國提唱の多邊的不戰條約中に用ゐられたのであるが、然らば戰爭の自衛行爲や聯盟の軍事的制裁等を除ける——は凡そ國策の具と看做すべきものであつて、平和運動は之に反し、一般に敬虔にして殊勝なる宗教的人道的行爲なりやと云ふに、決してさうではなく、戰爭が國策の具であると殆ど同一程度に於て平和運動も國策の具に使はれて居り、所謂、外交戰、宣傳戰、思想戰等の文字を以て該運動を表明するに相應はしい

ものの如くである、本稿に於ては聊か其の然るべき所以を述べて見度いと思ふ。

近衛公は華胄界の新人中、徳望識見手腕に於て優れたる第一人者として、目下の超非常時局拾收の最適任者として、元老から推薦せられた方である。國家活動の各般の問題に恒つて深い造詣を有せられ、當今インテリゲンチアの代名詞である自由主義者や社會主義者が、相率いて型に嵌つた淺薄な反軍思想を有するに反し、事物の一面よりも兩面を見、半分の眞理よりは全部の眞理を把握せむと努力せらるるものと覺しく、其の據て來る所深くして、亦頗る遠き軍隊精神にも理解を有せられ、軍部財界政黨等各界の信望を一身に蒐められたものの如くであるが、余輩は最近公の小著「國際平和の根本問題」を一讀して、その偶然にあらざるを知つたのである。近衛公は「英米本位の平和主義を排す」なる一文に於て實に次の如く述べられて居る。

最近我國論壇の風潮を見て吾人の遺憾に思ふは、我國民がとかく英米人の言説に吞まれる傾ありて、彼等の言ふ民主主義、人道主義の如きをも其儘割引もせず、吟味もせず、信仰謳歌する事是なり。勿論吾人は英米政治家の云爲を全部誠意なきものとなすに非ず、ウキルソンの如きロイド・ジョーヂの如きは、眞摯熱誠なる人道の愛護者なるを認むるに躊躇せずと雖、世には善良なる人にして自ら意識せずして虚偽をなす事あり、動機に於て純なるも結果より見て不純なりしを曝露する事往々にしてこれあり、況んや蠢々たる他の群小政治家、評論家、新聞記者の言動に於てをや。曾てパーナードショウは其『運命と人』の中に於てナポレオンの口を藉りて英國精神を批評せしめて曰く「英國人は自己の欲望を表すに當り道徳的、宗教的感情を以てする事に妙を得たり。而も自己の野心を神聖化して發表したる上は、何處迄も其目的を貫徹するの決斷力を有す。強盜掠奪を敢てしながら、いかなる場合にも道徳的口實を失はず、自由と獨立とを宣傳

いながら、殖民地の名の下に天下の半を割いて其利益を壟斷しつつあり」と。ショウの言ふ所や、奇矯に過ぐと雖、英國植民史を讀む者は此言の少くも半面の眞理を穿てるものなる事を首肯すべし。吾人は我國近時の論壇が英米政治家の花々しき宣言に魅了せられて、彼等の所謂民主主義、人道主義の背後に潜める多くの自覺せざる、又は自覺せる利己主義を洞察し得ず、自ら日本人たる立場を忘れて、無條件的、無批判的に英米本位の國際聯盟を謳歌し、却て之を以て正義人道に合すと考ふるが如き趣あるを見て、甚だ陋態なりと信するものなり。吾人は日本人本位に考へざる可からず。云々。

世界大戰の反動として獨逸の軍國主義に對する呪咀、世界恒久平和聯盟思想の最高潮に達し、英米等同盟聯合側の思想宣傳が百パーセント成功し、我國の西洋人の本に讀まれ、話に酔はされる人士が右宣傳に魅了されて居た時代に於て以上の如き見解を最も大膽率直に表明せられたと云ふことは、識見の高邁にして、洞觀力の凡庸ならざるを證明するものと云はなければならぬ。

公は又同文に於て「若し媾和會議にして經濟的帝國主義の跋扈を制壓し得ずとせんか、英米は一躍して經濟的世界統一者となり、國際聯盟、軍備制限と云ふ如き自己に都合なる現狀維持の旗幟を立てて世界に君臨すべく、爾餘の諸國はいかに之を凌がむとしても武器を取上げられては、其反感憤怒の情を晴らすの途無くして、恰も力の柔順なる羊群の如く喘々焉として英米の後に従ふの外なきに至らむ」と述べられてゐる。右は余輩が拙著極東外交論策に集録された論文に於て「世界大戰の最大の結果は三大帝國の覆滅にあらずして消極的意味ではあるが尙アングロサクソンの世界制覇確立である」と述べたと符節を合してゐる。

先年余輩が拙著『極東外交論策』の序文に於て「世界大戰の反動として國際聯盟生れ、平和主義軍縮思想が高調せら

れ其の波及するところ帝國に於ても亦國軍の輕視風を成した當時余輩は斯の如き飽和國英米に内在し、從て彼等が誇りを以て提唱する一種の國際主義（普遍）が實に未成年帝國主義國として必然的に軍國的傾向を帯ぶべき帝國の特殊性を克服し、滿蒙支配權拋棄を決意せざる限り、漸次帝國を驅つて顛落の深淵に急がしむべき虞れ云々」と述べて自由主義者にあらざれば、社會主義修正派に屬する友人達より、嵐の如き抗議に接したものである。併し以上の所信たるや上下五千年の人類の歴史から出て來る經驗的法則及び戰爭と平和に關する群集心理學の鐵則の共に立證する公理であつて、昨今はテンポの速き世相の變化に驚かされ、漸く先年抗議をした友人達も覺つて來た様であるが、之は餘程確に豫見の出來た成行きであつた。而て此の事實は、前記近衛公の所言と相俟つて、愈々明確に本稿標題の示す如く、「國策の具としての平和運動」なる觀念を把握せしむるに役立つ。西洋人の觀念には自國の平和愛好心、例へば他國に率先して國內的軍縮を實行するが如き——が自國の積石になつてはならないと云ふが如き思想はあるが、余輩の寡聞なる「國策の具としての平和運動」と云ふが如き觀念は未だ之を聞かない。何を根據として「國策の具としての平和運動」を云ふか。以下聊か所見を述べて見たいと思ふのである。（拙著『極東外交論策』第二編第二章「列強を動かすもの」參照）

聯盟規約の初版とも云ふべき所謂アンリー四世の大計畫は、其の宰相たりしスリーの筆に成り、或る程度に於て彼自身の創作とも認むべきも、同時にアンリー四世も亦之に類似せる思想を有して、多少之を實行にさへ移さんとしたことはフリードの語る所の如くである。此の大計畫の内容は歐洲諸國の領土現狀の變更を行ひ、之を分合して十五箇國となし、之を歐洲聯合に結成せしめ、相互の紛争を平和的に處理し、各國の負擔寄與する軍隊を以て國際軍を組織し、或は土耳其に當り、或は盟約に違反する國を制裁、強制するの手段に供せんと欲した。併し此の計畫の眞に達成せんとした

目的は、佛國に最大の面積と最強の軍備とを配付せしめ、以て奧太利の強大を制して、佛國の霸權を歐洲中原に確立するに在つた。此の事例に於て歐洲聯合は虚である佛國霸權は實である。

第一回海牙會議は露帝ニコラス二世が軍備制限問題、國際仲裁裁判の設置、戰時國際法問題を審議せしめんが爲に召集したものであつて、始めてウイリアム・ベンの所謂「諸國民の議會」たるの外觀を呈した。當時露國政府の發したる第一回回状は、感傷的の章句を連ねて武裝的平和の弊害と人民重課の疾苦とを説いたものである。勿論此の會議の先驅として萬國議院同盟、萬國平和協會等の活動を全然無視し得ないことは勿論であるが、一般の平和論者例へばフリードの如きは第一回海牙會議の召集動因を第一にニコラス二世の宗教心、第二に銀行家プロツク著『戰爭の將來』及びベルタ・フォン・スツトナー著『武器を下に』の同皇帝に及ぼしたる影響に歸する。併しながら他の解釋を下す多數の論者は歐洲最大の陸軍國にして、老獪なる露國が急に菩提心を發したことを信ぜずして、露國提案の眞の動機は第一に西比利亞鐵道建設の爲め巨費を要して爲に國庫の空乏を告ぐるに至りたること。第二に獨逸等が砲兵隊の武器を改良せんと企圖する由を聞いて露國が之に追隨するの困難なるを覺り、先手を打つて右改良を阻止せんとしたることに存すると主張する。而て此の點に關し共產革命の後根こそぎ公表せられたる露國の外交文書を検討したるチャールス・エー・ペアー博士は實に次の如き斷案を下して居る。

第一回海牙會議召集の提案は、クロバトキン大將を首班とせる露國陸軍省より發案されたものであつて、併も獨逸が巨砲の威力を以て、露國及び佛蘭西の優勢なる兵員に打勝たんと欲して、漸く完成したる善美なる獨逸の新式クルツ砲を検討したる後に於て可決せられたものである。獨逸の新發明に腰を抜かし、奧太利が間もなく獨逸の新式砲を採用

するに至らんことを恐れ、其の結果陸相クロバトキン大將は軍備の國際的縮少を招來するか、將た又獨逸の新式巨砲の威力に匹敵する程度迄自國の砲兵隊の武器を改善する爲め、巨額の軍費を支出するか、二者其の一を選ばざるを得ざるに至つた。而して當時露國の百姓が重課の爲めに、既に其の收入の半額を奪はれて氣息奄々たりしに鑑み、而して之以上納稅者の負擔を加重することは、國內に異變を醸成するの虞ありしに鑑み、佛國が露國公債に應募するの可能性ありしとは云へ、露國政府は結局陸相の發案を容れて軍縮會議召集の議を決するに至つたのである。此の論斷の正確なることは、既に第二回海牙會議には露國は全く豹變して、獨逸同様最早軍縮問題に全然無關心となりビスマークの所謂飽和國たる英が獨り軍縮を高調したのであつた。果然第一回平和會議は虚であつてクロバトキンの奧太利軍擴阻止が實であつたのである。

由來第二インターナショナルは其の國際會議に於て民兵制度の採用を主張して來たのであるが、夫々徵兵に應募する無産大衆の子弟を自宅に於て武裝せしむることに依り、軍隊の指揮權を資本主義政府の任命する士官の掌中より無産大衆の手に現實に收めんと企圖したものである。蘇聯は國際聯盟の軍縮會議準備委員會に於て軍備全廢案を提唱したのであるが、此の案が通過すれば、歐洲に於ては全般的無政府状態の下に無産大衆の專制が確立されるし、亞細亞、アフリカに於ては植民地又は半植民地の未開民族や土人が自然に其の桎梏より解放せられ、茲に勞せずして第三インターナショナルの所謂世界革命が成る筈であつたのである。老獪なる英國人が斯る陥穽を看過する筈はなくカツンエンダン卿が如上の理由から敢然反對論を唱へて該案を葬り去つたのである。

英國は千八百九十年代から軍縮特に海軍々縮に熱心であつた。第一回海牙會議はトランスヴァールに兵を動かしたば

かりの時であつたにも拘はらず、熱心に會議の主目的たる軍縮に賛成し、第二回會議には主動者の地位に立つて居つた。哲學上經驗論を奉じ、飽く迄實際家として空想を排する英國人が、單なる理想主義から之に賛成する筈はない。余輩が讀み且考ふることを重ねた結果に従へば、此の英國の平和主義は、第一に英國がビスマークの所謂飽和國であつて獨逸其の他の新興國の競争に對し、自己を保全する方法は却て軍備制限を實現するにあること、第二に英國は徵兵制度を布くこと能はざる國柄であつて現實の危險、即ち戦争に臨んで漸く徵兵制度を布いたが徵兵忌避者の多きに苦しんだこと、第三に義勇兵制度は高價にして、能率や訓練の成績が意の如くならざることから來てゐるものでなければならぬ。斯かる根本的原因あればこそ英國は第二回海牙會議にも、第三回海牙會議にも種々の提案を用意し、特に第二回海牙會議より世界大戰の前夜迄グレー、チャーチル、ハルデン、ロイドジョージ等が手を替へ品を換へ獨逸と海軍協定を結ばんと欲して努力を惜まなかつたのである。だから世界大戰後の巴里會議に於ても英國が獨逸の軍縮と同時に、佛國其他世界全般の軍縮を實現せんと欲して、米國側と共に努力し、特に徵兵制度の撤廢を最も頑強に主張したのも、決して偶然でないのである。

米國は第一回及第二回海牙會議の提唱に對し大千に雲霓を望むの姿態を以て之を歡迎したものである。而て學者は此の事實を次の二つの原因に歸するのが常である。第一は軍縮に依り歐洲列強の手が兩米大陸に伸びる可能性の減少すること、第二は軍縮に依り南米諸國の軍備競争を阻止し得ることである。一九一六年の米國海軍擴張案は世界に於て第二位と下らざる海軍方の建設を目的としたものであるから、對世界關係に於て英國の二國標準政策には反するけれども、英國海軍を凌駕しようと云ふ野心は、米國側になかつたと云ひ得る。併し追加擴張案を併せた米國の造艦案が進展する

につれ、舊艦多き英國海軍力を凌駕するに至ることも明瞭であつて、爲に英國もロドネーやネルソンを建造した。ワイリアムスの語る所に依れば、當時紐育の金融資本家は思へらく、英國は今や爾餘の歐洲諸國と共に米國の債務者となり、米國の爲に金の卵子を産む家鴨となつた。賢明なる債權者として此の家鴨を效果的に搾取せんには、英米關係を造艦競争、武装の平和、及び其の往々の歸結たる戦争を以て脅威してはならないことは云ふ迄もないことである。此處に華盛頓會議生れ、倫敦會議生れ、之と前後して米國側海洋自由の要求は、一轉して唯の食料船除外の要求となり、再轉して完全に高關に束ねられるに至つたのである。

米國の伸縮自在なモンロー主義や極東政策の眞意は、國際金融資本主義を離れては了解出来ないことであつて、其の門戸開放主義は、將來の偉大なる顧客として優遇するの價ある支那國民を、自家藥籠中のものとして保留しようと云ふ利己主義を離れては理解出来ない。トアネと云ふ著者は「米國政治家に反映する一般米國民の輿論が平和主義的であることには間違ひない。無数の平和協會が米國に湧出しカーネギーの如き人士の平和に對する誠意は毫末も疑ふ餘地がないと云ふことも米國の特産物である。併しながら自己の理想に合致する許りでなく、自分の利益にも亦合致するものを善美なりと考へるのは、人情として自然の傾向であつて、私利の念が理念に融合し、吾人の無意識の間に其の理念の内に解消し去ること往々である。……情誼は利益と一致し得ることありて、如何なる炯眼の士も情誼の衣を纏ふ私利の存在に氣附かざることがある。軍縮運動に於ても亦斯如くである」と述べて居る。

以上吾人が縷述し來つた事實は「國策の具としての平和運動」の存在を認定するに既に充分であると信ずる。クラウゼウィツは曰はく、「列強が自國の軍備は専ら自衛の爲めなりと主張するのは、彼等が既に侵略に依り其の必要とする

一切のものを獲得したるが故にして、之等諸國が侵略戦争及び軍備の撤廢を主張し、一層活力ある國民との競争を避ける手段として仲裁裁判其の他の平和案を提言する所以も亦茲に在る」と。ベルンハルチーは曰はく、「平和主義的理想が列國行動の眞實の動機たることは儘に稀である。列強は概して自己の政治的野望を達成せんとする所爲を外套もて蔽はんが爲に、平和の必要を高調する」と。ロバーツ卿は曰はく、「英國は必要とする其の一切の領土を領有して居る。従て英國の國際政治上に於ける明確なる目標は平和に在る。蓋し大英帝國の各部分をして平和の雰圍氣中に於て其の既に領有せる廣大無邊の領土の富源を開發するの餘暇を享有せしめんが爲である」と。觀じ來れば一國の外交が成功して凱歌を揚げ得るのは一國の内在的需要を國際主義の假面の下に包みおぼせた時である。従つて漫然時代精神とか、世界の大勢とか云ふ平和軍縮風が吹いて來たなら、吾人は注意しなければならぬ。何國が何の爲に其の様な風を吹かすのであるかを。

各國の政治家が平和運動を國策の具に使つたことは、前述の通りであつて、之れが爲には往々念入りにも民間の私的國際團體を使喚して準備工作を行はしめることさへある。例へば最近私的巴爾幹會議の運動から、巴爾幹協商規約が生れ來つた如きは其の一例である。

尙以上の外に自國以外より起つてくる或種の國際平和運動の動向を素早く看取して、夫を自國の要望達成に利用した例も亦枚舉に遑なき程である。例へば嘗て露帝アレキサンダー一世が神聖同盟を結成し、列強に向て軍縮を提議した當時、佛帝ルイフィリップは好機逸すべからずとなしてナポレオン戦争以來佛國に占據せる軍隊の一部を撤退せしむるに成功した。佛國は本來聯盟規約には餘り乘氣せず、英、米に追隨したのであるが、尙ほ國際參謀本部及び國際軍の設置

を要求し、これは不成功に終つたが、英佛保障條約を得、セシル卿の相互援助條約案にも協力し、一轉してマクドナルド氏の平和主義に乗つて壽府議定書を得、其れが成らずと見るや次いでロカルノ條約を得るに至つた。最近ヴェルサイユ條約第五編軍事條項及びロカルノ條約——ライランド非武装を含むのは獨逸に依つて破棄され、歐洲平和機構は同盟條約を剩すのみとなつたが、之は策の施す術なき不可抗力であつて、佛國もよく戰つて來たものと云はねばならぬ。英國は潜水艦誕生の時から其の存立に反對して居つたのであるから、潜水艦の商船攻撃に業を煮やし來つた米國の招請した華府會議に於て、折こそよけれと潜水艦の全廢を主張して、今日迄も夫を持續して居る。獨逸のストレーゼマンが聯盟の安全保障運動に乗り、急進的社會主義者たるブリアンの平和的イデオロギーに迎合して、かのロカルノ條約を結び、聯盟に加入し、尙ほライランドの占領軍撤退を、皮切りに獨逸解放の礎石を置いたことは實に最近の出來事である。伊エ紛争からハウス大佐の International newdeal で急に植民地再分割論が擡頭し來つたが、之は英國としては實に好ましくない問題である。だが彼國の政治家は正面から之に抗せずして、巧みに之を資源分配の問題、即ち濠洲の羊毛や印度の棉花や加奈陀の小麥の市場獲得問題に轉換して仕舞つた。我國に於て今より植民地再分割論や資源問題——唯で寄贈される筈はない、平時は獨占品ですら市價を拂へば自由に取得出来る——やの調査研究に着手せんとする者のあるのは、お目出度き限と云ふべきではあるまいか。

聯盟規約、不戰條約以下、各般の相對的安全保障條約、及び海軍軍縮條約等を成立せしめたる究極要素は、決して超越的の純正國際主義にあらずして、智略と活動力とに富める民族國家の内在的需要の國際主義的反映、換言すれば國際主義的民族主義なりと、余輩は斷言して憚らぬ。諸々の人道主義者や平和論者が個我を裏返して、全人類我に歸一した

基礎の上に考案した普遍的妥當性に富んだ國際平和案を、如何なる國が本腰を入れて昇ぐかと云ふに、夫は今迄縝述した客觀的事實が立證する通り、該案が當該國の需要に妥當する時に該國に限られるのである。

斯く觀じ來るとき一面吾人は巴里平和會議に於て人種平等案を提起して否決せられた以外、帝國が智略を充分に働かして帝國の地位確立の爲に一切の機會を捉ふるに敏でなく、爲に追隨外交と云ふが如き、一般論策家の批評を容れる餘地あるに至り、又他面滿洲事變以來は自主外交の聲徒らに高くして、一切の國際協力の機會を極東安定力を以て任ずる我方の利益に轉用するに機敏を缺くものなきやを憂ふるものである。君子は人を致して人に致されずと云ふ、其の實踐は先づ「國策の具としての平和運動」なる觀念の把握より開始せられねばならぬ。

第三章 領土再分割とや

一、序 説

曩日の小著『國際軍備縮少問題』に於いて、筆者は、純正國際主義と功利的國際主義的民族（國家）主義とを對立させ、前者は宗教的人道的立場から平和運動を擔當する平和主義者、平和協會、將た又宗教家等に依りて抱懐せらるることがあるけれども、夫れが實際政治家に依つて取上げられ、現實問題の料理に適用されるに當つては、實際の必要と云ふことに依り根本的に中和變容されて、後者の主義に推移するものである。軍縮問題にまれ、其他の平和問題にまれ、

實際政治家が之れを處理する指導精神は、常に殆んど例外なく功利的國際主義的國家主義、換言すれば開明的利己主義であると云ふことを結論したのである。

巴里平和會議に於いて何等充足せられざりし慾望を持つ伊太利、同會議に於いて一切の植民地を失ひたる獨逸より來る生命の壓迫が、歐洲に於ける現状維持派と其の打破派との對立關係を著しく尖鋭化せしめ、其の安全瓣として植民地問題の擡頭すべきことは、既に久しき以前より火を賭るよりも明らかであつたのである。特に筆者の如きは拙著『國際軍備縮少問題』第二編、原論、第五章、絶對的安全保障（理想的解決）に於いて、充分徹底的に此の問題を検討し、次の如く述べて置いたのである。

要するに之等論者の所説は、皆國家の生存權と認め、紛争の平和的處理よりも、寧ろ紛争の豫防、即ち其の禍因を剪除するの必要を説くものにあらざるはなし。國民經濟及び世界經濟の發達が經濟問題を併せて、國の死活問題たらしめ、生物學上及び史的唯物論の見地よりすれば、戰爭が一面窃取又は強制分配干渉に外ならざるの事實に鑑み、第五回聯盟總會に於いて、佛國勞動代表ヂュウオー氏が國際政治問題を處理すべき聯盟理事會と對立し、國際經濟問題を審査すべき經濟理事會の設置を提唱し、神川教授が最高經濟理事會の必要を承認したる、又此の精神に出づ。眞正の平和は正義の世界に君臨する平和たらざるべからず。斯くの如き平和を地上に齎らさんには姑息の現状維持に満足せず、積極的に正義を樹立し人類全般の福祉を増進し、國際紛争の政治的及び經濟的原因を、除去せんが爲め、現状打破をも辭せざるの覺悟なかるべからず。而して如上の高遠なる理想的平和を國際組織に依り維持せんが爲には現状を固定することに依り平和を確立せむとしたる平和議定書（草案中には條約の改訂又は國境の變更を要

求する訴は理事會に於いて之れを受理すべきものにあらざる旨の條項ありき)に含まれたる紛争の平和的處理、狹義の安全保障(相互援助)及び軍備縮少の三原則に配するに、國際政治及び經濟關係の整調即ち擴充強化せられたる規約第十九條の精神を以てせざる可らず。蓋し軍備を稱して國防と云ふも、陽に外寇に備ふる兵備は、陰に如實に外交の後援となり、帝國主義的野望達成の手段となり國際關係に於ける現狀打破の手段となるが故に、國家の消極的安全又は現狀維持のみを保障することに依つて、列國に其の生きんとする力の標徴とも云ふべき軍備の強度の縮少又は撤廢を強要し能はざるは論理上當然なればなり。然るに現狀維持を目的とする法的平和組織と、現狀變更を追及する平和運動とは互に倒行逆施せんとするものにして、「現狀の神聖化」と「國家の將來に於ける發達シテフスケーチン」を同時に調和的に存在せしめて、間然する所なき國際平和組織案を作成し、以て有意義なる軍縮の前提とすることは近世國家に於ける法治主義と革命的勢力とを調和すると等しく全然不可能なり。觀よ最少限度に於いて現狀變更の要を認めたる聯盟規約は既に合法の戰爭を容認し平和議定書の立案を至難ならしめ眞に軍備縮少の前提たるべき安全保障を供するに足らざりしにあらずや。果然吾人の抱懷する(一)國際政治及び經濟關係の整調(二)紛争の平和的處理、(三)狹義の安全保障、(四)軍備縮少の四原則を経緯とする理想的平和組織は哲人の夢想する超國家が實現せず、現在の國家が國家として存続する限り成立の望みなく、確固不動の平和を招來するに庶幾きも現狀維持に墮する平和議定書は活力ある國家に依つて否認すべき運命を有す。……以上の要件を具備する國際的法的組織は必ずや中央集權的單一國家たる世界國家又は國家聯合として發現すべく、其の活動を保障する機關として、立法、行政司法の各機關完備するに至るときは、今日に於ける領土の變更は行政區劃の變更となり、現行一

般條約の改廢問題は立法問題となり、國際紛争は行政訴訟となり、物理的戰爭は精神的戰爭(競争)となり、移民問題は國內的移住問題に等しきものとなり、原料配給市場確保の問題は國內産業合理化問題に等しきものとなり、自治團體に近似するに至れる諸國家に取り、孤立政策も、同盟政策も、モンロー主義も、汎米主義も、汎獨主義も、民族主義も、帝國主義も擧げて必要なに至り、從つて國策の具としての軍備は毫も其の必要なに至り、現時の有限的實際的國際軍備制限協定は世界法たる軍備制限令に依つて置き換へられ、爾來各國は軍備を維持するの自由を權利と看做さずして、兵役の義務を以て目するに至り、軍備の國際化に依り、軍備の徹廢的縮少又は撤廢は一片の廢刀令の如きものを以て容易に其の實現を期し得べし。之れ吾人が軍縮問題の理想的解決は絕對的安全保障を確保する國際的法的組織の完成に之れを發見せざるべからずと爲す所以なり。

佛國高名の平和運動家フレデリック・パツシー曰く「吾人は決して無しとの言を發すべからず」と。然れども吾人は悠久の將來はいざ知らず「國家が國家として、人類が人類として殘存する限り」國際聯盟が純正國際主義を體現する國家聯合又は聯盟國家に進展し、仍つて絕對的又は準絕對的安全保障即ち法的保護の賦與に依り間接軍備制限即ち軍縮問題の理想的解決が實現せらるるの期なかるべきを斷言せんと欲す(三枝茂智著『國際軍備縮少問題』第八三—八三二頁)

果せる哉、伊・エ紛争——夫れは滿洲事變に依り鼓舞せられてゐる方面もあらう——を契機として一般的に領土及び植民地の再分割が論議せらるるに至つた。特にハウス大佐の國際社會に於ける有產者たる英・米・佛・露は無產者たる日・獨・伊の爲めに其の過剩なる植民地を割愛し、嘗て英獨海軍交渉の際英が獨に葡萄牙の植民地獲得(名義上有償)を示

峻した様に、白耳義のコンゴ等は獨逸其の他何れかの國に賣却せられねばならぬと揚言するを聞いて、我國の論策家等は夫れが自然である様に一齊に欣躍起つて之れに呼應したものである。既に多量のインキが紙上に流れ、依て以て何等かの利益に浴せんが爲めに之れより眞面目に調査研究を開始せんとする協會學會等もある様である。右ハウス大佐の提言や濠洲の一部は、尠くも之れを日本及び伊太利移民に開放し、ボルネオ及びニューギニーを日本に移譲して、委任統治地域となし、以て其の開發に委すべしとのクロツカー教授の提言やが實際上に結實するに於いては、筆者の純正國際主と功利的國際主義的國家主義とに關する前述のテーゼは茲に破綻を生ずることとなるのであつて、筆者は帝國が植民地の一小片と雖も、尙ほ之れに有附くことに大賛成であるから、右の破綻を歓迎せんと欲するものであるが、果してそう問屋が卸すかどうか、以下聊か検討を加へて見たいと思ふのである。

二、歐洲領土の再分割

植民地に對する意味に於いて民族に固有の相續財産たる領土の再分割又は再分配を云ふならば結局當面の問題としては夫れはヴェルサイユ條約以後の歐洲政治條項を變更することとなり、所謂現狀打破派たる獨逸、奧地利、洪牙利、勃爾牙利伊太利の利益に於いて歐洲國境線に何等かの變更を加ふることを意味するであらう。蓋し小協商バルカン協商の成立以來吾人の見解に従へば、昔時の歐洲の火藥庫は巴爾幹より漸次西漸して、獨逸の東方及び東南國境邊に推移して居つて、此の方面に於いて獨逸の民族主義的要望を、充足することは是非必要であるからである。尙ほ又マイン・カンブに於いて、ヒットラーが獨逸の發展は東方に於いて是を庶幾することが出來ると云ふたのは、和・白・佛英を連ぬる

西方特に海洋への發展が、軍備及び外交國防の金城湯池に依り阻碍されて居つて、是を犯すことが海上と陸上とよりの包圍將た又内戰作戦に獨逸を曝し、一九一四年の覆轍を踏むことを繰り返さしむる結果となり、従つて安全なる將來の發展は、東方國境一方に於いてのみ、是を庶幾し得ると云ふ人類社會に於ける物理學の原則に従つてゐるからである。夫れにも拘はらず、ナチス政權はマイン・カンブが指導者の無責任の地位に在る當時書かれたものであることを理由として、一應は之れを否定し、蓋然的想定敵國を可能的想定敵國に還元又はカモフラージュし、假想敵國を調整せんとし、ザール河流域奪還、ヴェルサイユ條約の全部の軍事條項及びロカルノ條約破棄後の獨逸の甦生を現在の本國領土の極度の集約的利用及び舊植民地の奪還に求めんとするもの如くである。此の政策は眞に陸海空軍の充實に至る迄は、將た又委任統治地域の運命の最終的に決する迄は賢明なる政策であるが、右のカモフラージュは決して充分には成功しないものである。兵學上進展する國民特に其の表現たる軍部には尠くも一つの生動する獵物を標的として與ふことが必要である。唯だ二つ以上與へることや、一つも與へぬことが、往々有害であり得るに過ぎない。夫れは戰前及戰後の獨伊國軍と今日の英米佛軍とを見れば分明である。

斯かるが故に既に今日に於いても歐洲領土の再分割は尠くも政治家の心意に於いて一應日程に上つて居る問題であるとして差支へない。例へば現狀打破思想の論策家フランク・エツチ・サイモンズは云つて居る。「平和條約の發表と共に、戰敗國特に獨逸の鬱憤が爆發して二つの意味深長な事實を表面に露呈した。其の第一は、將來に調整を約する解決が容れられなかつたこと、其の第二は、獨逸人及び洪牙利人に取つては永久に平和條約に服従するよりも戰爭する方が悲惨でないと思へざるを得ない様になつて居たことである。斯くて、平和は自國に満足なる現狀を永久化せむと企圖する

國々に取り政策の具とせらるるに至り、之れに反し戦争は平和條約の犠牲となつた國々が、不公平且つ屈辱的な状態を脱し得る唯一の方便となつた。……國際聯盟は正に此の意味に於いて、英語國が自國の登り來つた梯子を切り落さんが爲めに作れる機構である。……戰敗國は聯盟を平和條約改訂の具となさんとしたが、聯盟は寧ろ改訂實現の障礙であることを發見するに及んで、之れを見放して仕舞つた云々」と。獨逸の聯盟脱退及び再軍備は現状打破、失地恢復への烽火であつて、歐洲が流轉に向つて動きかけて居ることは、最早や何人の目にも明瞭である。而して獨逸の運動は爾餘の戰敗國をも鼓舞して止まざるべきが故に、全歐洲に於いて國境調整の目的物はオイベン・マルメルデイ（アルサス・ローレーンは一應之れを措き）獨逸のイレデンチズムたる波蘭廻廊、上部シレチア、チエツコスロヴァキーに於ける三百萬獨逸民居住地域、洪牙利のイレデンチズムたるトランスシルバニア（羅馬尼領）その他廣大肥沃なるユーゴスラヴィー及びチエツコスロヴァキー歸屬地方、物爾牙利のイレデンチズムたるトリス、ダブルヂヤ、マセドニア等であり、其の外リチニア、波蘭、ユーゴスラヴィア、アルバニア、希臘なども失地を持つてゐるのであるが、是等地域の受授が果して圓卓會議に於いて可能であるであらうか。

併し吾人が歴史上に徴して知る限りに於いては彼の波蘭の分割の如き伯林會議が巴爾幹問題を一應調整したるが如き強國と弱國、即ち「ノス國」と「ノサレル國」とが有つて、前者が後者を分割し、又は歩として之れを擁護する如き場合に、稀に領土の分合が過去及び將來の國際會議の問題となり得ても、然らざる場合即ち直接強國間の場合に於いては斯くの如きことはどうも不可能と思はれる。一八一五年の維納會議以降佛蘭西が現状打破派となつたことは不思議はない。従つてナポレオン三世は其の踐祚後、歐洲列強會議を開催して、維納會議所定の平和條件を緩和させようと試みた。

其の議題には軍縮問題も同時に含まれて居たのであるが、英國が率先反對し、爾餘の國も之れに倣ひ、遂に沙汰止みとなつたのである。

歴史の示す所に據れば先づ武裝的平和があり、次に戦争があり、講和に際し平和條約に於て戰績に照して領土の分合が行はれる。其の反對に戦争以前に於て、即ち武裝的平和の中途に於て領土の分合を行ふ事は未だ勝たざるに勝てりとなし、未だ破れざるに既に破れたりとなす事であつて、如何にも不合理であり不可能の如き様に見える。若し反對に斯様なことが可能であるならば、上下五千年の過去の歴史に戦争はあり得ない筈である。現に歐洲の現状維持派は波蘭を含めて十重二十重に現状打破派を取り圍んで、之れを壓へ附けることに國防外交の主力を置いて居るのである。斯かる故に領土特に歐洲領土の再分割又はヴェルサイユ條約に定むる國境の改訂は、ハウス大佐の示唆にも拘はらず問題ならぬものとして之れを不問に附して差支へないもの如くである。伊・エ紛争を始め委任統治地域の獨逸復歸問題等も、實は歐洲國境の現状を變更しない爲の安全瓣、又は代用品として歐洲政治家——イデン英外相等を除ける——の意中に上程せられて居るものの如く余輩には觀察されるのである。最近の佛國政府の對獨提案中二十五箇年間は領土改訂の要求は之れをなさざることの一項がある。之れは決して領土再分割が今問題となつて居らぬことを意味する次第もなく、二十六年目に此の問題が上程せられる事を意味するものでないものであつて、本則としては歐洲その他民族國家間の國境一般は、戦後の一平和條約より次の戦争後の平和條約まで存続するに過ぎないものと看做さるべきである。

三、全部的又は一部の植民地再分配

白色人種は目下歐洲、南北アメリカ、濠洲、阿弗利加各大陸の九割七分及び亞細亞に於ける廣大な地方を領有して居る。而して英國民は全世界に亘り千三百二十萬平方哩を越ゆる地域を領有し、佛蘭西人は阿弗利加大陸の大半、亞細亞大陸に於いて合計五百四十萬方哩、露國は六百六十萬方哩、和蘭は八百萬の人口を以て七十九萬平方哩、葡萄牙は未開發の九十四萬平方哩、白耳義は未開發の九十一萬平方哩、米國は七十萬平方哩、伊太利は荒地六十萬平方哩を有するに反し、獨逸は戰前百十二萬平方哩を有して今や全部之れを失つて居る。而して日本は滿洲が獨立國である關係上十一萬平方哩を有するに過ぎない。是を要するに植民地と保護領とは地球面積の半分で其の人口は世界全人口の三分の一に及んでゐる。而して夫れが英・佛・和・露・日・米・葡・伊・西の十ヶ國に分配され、其の内でも和蘭の如きは本國八百萬の人口で六千三百萬人の人口を擲取して居るのであつて、巨富國と少産國との差も亦甚大であり、領土分配の不公平は論義の餘地なき事實である。併も多くは十九世紀中の全く「偶然の機會」に依つて斯くの通りになつたのである。

緒てハウス大佐は最近有名となつた、併し實は嶄新でも奇技でもない國際的 *New Deal* に關する論文に於いて満足して居る獨逸と伊太利とは、如何なる秘密協定にも公的條約にも優つた世界平和の保障であると説き、世界大戰前英獨海軍交渉の當時、英外相が獨逸に葡萄牙領植民地買收權を賦與するの協定に假署名を爲せるの事實を指摘して、白耳義領コンゴも亦問題となり得べきことを示唆し、結論に於いて「宛も社會的平和が資本主義組織の何等かの調整なくしては保たれないと同様、國際政治上の平和も思ひ切つた領土的調節を加へなければ保ち得なからう。英・佛・露・米は世界の現狀に適應した條件で伊・獨・日に接し、且つ是等三國が世界の植民地の資源に付妥當なる配分を受けむことを主張するのを認めなければいけない。持分多き大國がより不遇な諸國と何とか其の持分を分け合ふにあらんば今

日吾人が直面して居るより遙に甚しい混亂と慘事とが吾人を見舞ふであらう」と述べて居る。彼は斯くて植民地の分配と資源の分配と云ふ文字双方を交互に用ひて居る。而して余の了解する所では、資源なる文字は原始産業の對象たるべき天然力の意に用ひられるときは結局土地と同一意義となり、之れに人力の加はる結果として採取供給せられる物を意味するときは原料となるのであつて、ハウス大佐の意圖する所では、兩者共に同意語で植民地なる土地分配の意味に解すべきであらう。

尙ほ植民地分配問題に左袒して居りながら、エチオピアをして伊太利に若干の土地を割讓せしめ、其の代はりエチオピアに一つの港と英領の一部を與ふべしと説くラムゼー・ミア氏の如きあり。獨逸に舊植民地を返還すること、伊・エ紛争を解決することに限り、植民地再分割を議すべしと説くスノーデン氏がある。ダブリュー・エス・トムソン氏は戰爭の危險が西太平洋、印度洋、伊太利を含む中歐地方に於いて最も切迫せることを指摘し、南太平洋に散在する土地再分配の爲に國際會議を開催すべきことを提唱して居る。其の外尙ほ米國には日本の進路を北や西特にニューギニア、ポルネオ、フィリピン、シベリヤ、滿洲に向けさせようと云ふ論策家が多くある。

清澤列氏の「世界再分割時代」に紹介して居るレッド・メインは空腹國・獨・伊・日の植民し得る土地として西部オーストラリア、クインズランド、アンゴラ、加奈陀のビース河流域、又は加奈陀北部一帯、アルゼンチン、パタゴニア、西比利亞及び露領平原を擧示して居るが、再分割に指針を供する意味で云つて居るのではないやうである。清澤氏自身も露國が帝國主義時代の遺産全部を吐き出さぬ不都合を語り、ヨッフエに對して北樺太の問題を提起し、尙ほアラスカ、ニューギニア、ポルネオの問題を提起して居るから、吾人が當面せる問題の我國に於ける先覺者と云ふべきである。

獨逸のウルリツヒ・ノック氏は現歐洲は獨逸の植民地分配に均霑せざる結果として四本目の脚が切斷され三本目の脚が短小に過ぐる卓子に似て居るが故に、其の安定の爲には獨逸をして充分植民地の分配に與らしめ且つ聯盟の委任統治は廢止されねばならぬと前提したる後、偶然が産んば現在の植民地分配を全般的に調整せんとして、伊太利がエチオピア南部の三分の一、英領ソマリランド、佛領トリポリの内チャード湖に至る迄の奥地、佛領マダガスカル、白耳義領コンゴ中コンゴ河以北の地域を、獨逸が英佛領カメルン、佛領コンゴ、西班牙領ギニアを、佛國が葡領西アフリカ、英領西南アフリカを、英國が佛・蘭・米領西印度諸島、佛領ギアナ、太平洋に於ける佛領諸島、シリア、委任統治地域、葡領東アフリカ、蘭領ギアナ、ニューギアナ西半、諸小島、香港に代はるべき暹羅領クラを、南阿聯邦がデラゴア灣アングラ南半を、濠洲が英佛及び新西蘭領たる南洋諸島を、新西蘭が近海の佛領諸島を、加奈陀が英佛領アンチールス、ベルマダを、印度が南部アラビア、マレー半島、シンガポール、ネパールを、和蘭が英領北ボルネオ、葡領チモルを、集團になつた黒人がニューギニアを、エチオピアが伊領エリトリアを、西班牙がタンチールを、白耳義がアングラの北三分の二を、希臘が英伊領たる諸島嶼を、ユーゴスラヴィアがザラを、米國が下部カリホルニアを、墨西哥が英領ホンチユラスを、而して葡萄牙が英・佛・獨逸の四ヶ國より財政的補償を受くべきことを提言してゐる。

偕て持てる國と持たざる國、有産國と無産國、飽和國と餓渴國、滿腹國と空腹國、満足國と不満足國、現状維持國と現状打破國、地主國と浮浪國とが對立關係に立ち、後者が植民地を前者又は半植民地國の負擔に於いて獲得せむとする理由として諸學者は等しく(一)國籍變更を要しない様な過剰人口の移住地、(二)原料品食料品の供給地、(三)母國製造品の自由なる又は閉鎖されたる新市場、(四)諸企業投資地、(五)雄邦の威信問題としての植民地獲得の必要の五者を擧

示するが常である。

然るにルガード氏は云ふ。「阿弗利加は今迄も今後も移住に適せず、南北米、シベリア、太平洋方面の溫帯地のみが之に適する。原料品食料品は其の供給過剩で買手なきに苦しみ、其の価格は正常價格の二分の一乃至三分の一に下落して居る。原料品輸出の阻止は行はれて居ない。市場獲得難は種々の原因より來てをり、差別的、關稅や割當制度が行はれぬ限り、必ずしも植民地再分配を必要としない。威信問題に就いては伊太利は、本國の七倍の領土を持つて居り、問題となるは獨逸丈だけ」と。ノルマン・エンゼル氏やラムゼー・ミア氏等も移民が植民地行きを欲せず、往々にして移民が歸國し來ることや、原料は山程あつて時として價格維持の爲め廢棄處分を餘儀なくせられて居る始末で、必要なることは經濟的領國主義を拋棄し、經濟的國際主義を採用すること丈だと説く。

以上は満足國が「欲しがらな、お前達の欲しがらなものは、斯様につまらない無意義のものだ」と云ふ説明としては相當力のある説明である。併し若し夫れが全體の眞理であるならば、余輩は是等の満足國に向つて質問したい。「お前達の云ふ様に左様に植民地が無價値無意義のものであるならば、其の持てるものに執着する必要は尠くもないではないか、欲しがらな満足國、獨・伊・日等に呉れてやつたらよいではないか」と。所が彼等満足國が植民地の一片と雖も之れを失ふことを欲せず、英國人が不毛の帶幅程の出口をエチオピアに割くことに反對したのは、以上五つの理由が全部の眞理でないことを立派に證明してゐる。

由來活力の強い人間が往々政治家になりたがり、ピストル彈の飛來するに當つても泰然として男兒の本懐だなどと云つて悔いざる所以は何處にあるか、稍々説明に窮するのであるが、史的唯物論の傾向を持つ學者は政治家を推進せしむ

る所以の物質的の「豊饒なる生活」に歸して居るやうに見える。勿論一層高尚な眞正の *Statesman* も稀にはあるから右の解釋は一面之れを精神的道德的の豊饒なる生活への欲求にも歸すべきであらう。自分には此の説明は直ちに移して之れを先進國の植民地所有慾の説明に使用したいと思ふ。英國民が全體として銀行屋國民となり、極めて多數の者が知識階級として高等の生活をなし、本土の多くに雉子兎等を養つて之れを狩獵地となし、英國民の一人當財產及び所得が世界に冠たり、不熟練労働者すらも、支那印度の苦力なんかと國際社會主義の旗幟の下に握手する地位に居らないのは、實に英國國が千三百萬平方哩の植民地の上に立つて、四億二千萬の人口を擯取してゐるからである。此の意義を覺るにはウイムブルドンの大英帝國博覽會の印象を想起すれば充分である。英國人の婦人迄實に其の植民地の價値を知り、植民地産品を禮讃し之れを愛好して居る多くの實證を筆者は海外生活の内に経験して居る。植民地を欲するのは不在地主や莊園所有者の心理と餘り遠くない。若し大英帝國が植民地を失ふたならば、英本國人は其の擯取すべき土地と土人の労働とを失ふの結果、彼等の資産収入は恐らく十分の一に減するのみならず、其の大海軍力も之れを維持し得ずして、彼等は其の瞬間から西班牙、瑞典の如き第二流國となり、場合に依つては佛獨や印度やの植民地となることは、火を賭るよりも明である。植民地は實に其の資源人口を擧げて母國の富及び物質力の構成要素となつて居るものである。故にビー・ダブリュー・ウイリソン氏が植民地の獲得は經濟上利益ありや疑はしく、大戰後英國は勢力圍百萬哩を加へたが通商は衰へ、失業者は二百萬に達して居ると述べて居るのは、一面觀から來た無限大の虚言である。反問す、英國に植民地なかりせば果して如何と。我が清澤冽君も亦獨伊の植民地膨脹政策は經濟的取引として意味をなさぬと云はれて居るのは、現状固定的平和の受益者たる英、米、佛人の利己的意見に多少とも影響された結果でないかを慮れる。氏は既に

セシル・ローズが南阿のダイヤモンドや金を收得し、白耳義國王レオポルドが年收三百萬圓を收得し、植民地企業が一割乃至二割又は夫れ以上の利益を伴ふことを舉示して居るのである。植民地は大國に取り實に美女の魅力を持つホルモソである。之れあるが故に活力ある民族は豊饒なる生活の内容を充實することが出來、之れに依つて又既得の植民地を外部の強窃盜に對して確保するの實力を養ひ得るのである。植民地は實に短見者流の算盤には到底乘らない政治的價値、國防的價値等を有するものである。米國がフィリッピンを抛棄したのは、フィリッピン人に母國の富源を取られること等全く彼國獨得の事由に原因して居ると見るのは僻見であらうか。此の意味に於いてノルマン・エンゼルが原料を政治的支配下に置かうとする衝動は、經濟的ではなくして政治的軍事的であると述べてゐるのは、筆者の見解と全く一致する。而して此の見地に立つときチャールズ・ベックストン氏が「茲に注意すべきは不満足國に經濟上の法則に従ひ、嚴格に生存上必需品のみを以て満足せよと告げるのみでは不十分である。満足國の享有する所は、單に生命を維持する所以のもの以上と見られてゐる。彼等は戦時にも他國より大なる安全保障を持ち、威信及び勢力を有し、自國の文化を國境外に擴大するの機會に恵まれ、其の子弟に取つては職業選擇の範圍も廣くなり、過剰資本の投資も出來、國籍を變更せずして移民出來る。約言すれば吾人は「日向の地」なる概念が含む有らゆる要素を考慮に入れねばならぬ。不満足國に對して是等の要求を總べて抛棄せよと云ふのは、富者が貧者に對し極端な節約を勧め、零細な金で充分生活し得ると告げるにも等しい」と述べて居るのは眞理の六割を始めて把握したものと云ふべきである。多分植民地は朝鮮滿洲の如く筋肉労働者よりも智的的青年労働者の就職地として必要である。凡そ社會の最大の爆發的要素は、搖ぐ中産階級より出でたる智的失業者である。植民地獲得か内地革命かと云ふ設問は、時折國家を見舞ふものであるかも知れぬ。何

の道植民地は夫れが民族の無窮の生命の政治、軍事、經濟上將た又革命の保險料就職口創設等として如何なる價值——不可量定的な——を持つかと云ふ廣大なる觀點から判斷せらるべきである。

植民地が特に必要とされるのは特に戦争及び戦争前の武裝的平和即ち慢性的戦争を前にして、成る可く自給自足したといふ慾望に燃ゆるときである。自給自足出来ない國、オーストリアの無い國は、早くも他國の經濟上の壓迫に堪へ兼ねて外交上讓歩せねばならない。斯くては戦争どころの騒ぎではない。米國のワグナー中佐は戦争必需品二十四種に付各本國に於いて、米國は二二・三四種（クロミウムとマンガネーズとを缺くのみ）獨は六・二〇種、佛は五・三七種、露は四・九五種、英本國は四・五〇種、伊は一・九二種、日本は一・七七種を自給し得るに過ぎない。故に米國は經濟上の安全を持ち、英國は比較的脆弱な報告として居る。尙ほ又植民地を含めた計算に於いて、サー・トーマス・ホーランドの計算に従へば、近代國家の必需品二十五種の内、英帝國は十八種に付充分の、二種に付多少の供給を有し、五種に付全く之れを缺如し、獨逸は四種に付充分の、二種に付多少の供給を有し、十九種に付全く之れを缺如し、日本は三種に付充分の、五種に付多少の供給を有し、十七種に付全く之れを缺如して居る。ルガード氏が「植民地の排他的統制が死活的な重要性を持つのは、唯だ戰時に於いてのみであり、併も此の統制は植民地の領有と云ふことに基かずして、専ら海軍力に依存するのである」と云つて居るのは正しいが、余は之れに附加して海軍力の必要も維持手段も共に植民地の存在に依存すると云ひ度い。

之れを要するに英國の政治家や論策家が植民地は無價値なり、之れを所有せむと欲する目的は植民地獲得に依りて充されずと説いた所で、彼等が其の植民地を現に無用の長物として拋棄せない限り吾人は彼等の議論に誤魔化されるもの

でない。英國人が植民地要國が人口増加策を採用して居るのは怪しからんと云ひ、英政府は植民地投資家に植民地不拋棄を約束してゐるが故に、住民と領土とを動産の様に他國に讓渡出来ないと云ひ、原住民や移民民全部が讓渡に賛成するか、又は無關心であるならば讓渡も可ならんも、英國は善政を布き居る故斯かる場合は絶対に無しと云ひ、英國政府が一滴の水も一人の住民なき沙漠の一小片を、エチオピアの海洋への出口として、之れを同國に與へんと欲したるに英國國民は強硬に反對した。佛國民は決して斯くの如き舉措に出でないと云ひ、植民地問題は政治的よりも經濟的問題なりと云つたのは問ふに落ちず語るに落ちるものであつて、彼等が植民地を無限に貴重なるものとして之れを手放し得ないことを語るものである。然らば不満足國が植民地を愈々欲しがるのは誠に當然でなければならぬ。ハウス大佐等によつて提案された問題は、本質的に經濟的よりは政治的問題である。原料の問題にあらすして實に土地の問題である。

とは云へ吾人は斯かる問題が國際圓卓會議の問題にならぬことを知つてゐる。過去に於いて未だ占據されない「日向の地」があつた時代に於いて、米國がアラスカ、ルイジアナ、フロリダ、ヴァージン島を露・佛・西・丁より買受け、英國がヘリゴランドを獨に讓渡したるが如き例はあつたとしても、今日の列強の責任ある政治家は蘇聯の夫れを含め一人として一片の土地と雖も讓渡さうとせず、反つて之れを確保する事に汲み消さんとしてゐるのである。故に植民地策家の原稿料稼ぎに過ぎないので、責任の地位にある者は沈黙するか是を揉み消さんとしてゐるのである。故に植民地は軍擴競争と戦争即ち國際生存競争の對象として殘存する。若し獨逸と伊太利とが舊獨領植民地とエチオピア領土の一部につき何等かの満足を得るとすれば、夫れは既に戦争の結果を豫想して其の代用品の授受を爲すに過ぎないのである。日本が此の問題の——開かれる見込みもない——圓卓會議で利する見込みは先づ無いと斷定して間違ひあるまい。

我々は人種的偏見が如何なるものであるかを充分に體驗した。アングロ・サクソンの領土を始め有色人種には移民の自由はない。戦後労働供給の困難と相待つて移民は白人種の間に行いてさへも頗る困難となつて來てゐる。移民に對する門戸閉鎖主義は一般の風であるが過剰人口を移民として、天然的生産力に接觸せしめることは最早や土地の獲得なくでは希望し得ないことで、土地の再分割が日程に上らなければ移民問題は解決の見込はない。見よ移民問題は嘗て國際會議の議題とならなかつたではないか。米國の日本移民締出しは、滿洲國誕生に翻譯されたのである。移民問題も土地問題も大體戦争以外の方法では調整出來ぬもの如くである。植民地再分割論の起る所以も亦之れが圓卓會議とならぬ所以も共に退引ならぬ人間と其の生活資料との交渉に本質的に胚胎して居ると見るのは果して僻目であらうか。戦争は植民地を含む領土の奪取又は強制的再分配を意味する。其の代用品として想定し得る任意的植民地再分割は人間界を支配する法則の内に宿つて居るかどうが最大の疑問である。

四、植民地の國際化と聯盟等に依る國際監視

(イ)非自治植民地の全部 ラムゼー・ミアは自治政府を有する迄に發達して居ない總ての地域は、聯盟の委任に基き全體として文明諸國の爲に統御せられる仕組となし、通商上平等の取扱を確保することと爲すときは委任統治の責任は顯著なる利益を伴はないこととなり、委任統治の配分も國境の變更も容易となるであらうと説いて居る。クロツカイ教授は日本の過剰人口の對策として列國宜しくボルネオか、ニューギニアか、太平洋上の島嶼を委任統治の形式に於いて日本に讓渡すべしと提唱して居る。ソルター氏は或は持たざる國に植民地を分讓し、或は國際機關に移民地を移讓する

ことに反對し、非自治領植民地に委任統治の主義を擴張し、平時戦時を問はずあらゆる購買者に對し、平等の條件を以て原料の供給を保障する底の一般條約を締結せしめ、商的企业に關し公開制度を採用せしめ、關稅に關し平等待遇主義に據らしめるを充分なりと主張して居る。英國労働黨首領ランズベリーは英國管理下の廣大なる植民地も聯盟に引渡されねばならぬと説いたが、後英國労働黨は本年二月下院に原料供給の源泉を國際的に管理し、且つ委任統治制度を英國の植民地にも擴張適用する目的を以て、世界經濟會議を開催すべしとの決議を提出せしも政府の反對に依り否決せられ、唯だ與黨側の「英國政府が國際繁榮並に國民間の一層の諒解増進の爲め總らゆる實際的手段を執るを信す」なる修正案が可決せられるに止まつた。デーリー・ヘラルドは其の際各委任國は、聯盟に委任統治地域を返還し、以て一切の植民地に委任統治地域の形態を與へ、或る國際機關に委ねて一切人の利益を圖るべしと提唱した。

以上は要するに植民地は一般に本則として聯盟の委任統治地域たらしむべしと云ふのであつて、植民地の一種の國際化を意味するものである。巴里平和會議中に新興國波蘭等に合併される人種、言語、宗教上の少數民族に其の政治的自由平等を保障する條約が締結せられた。斯くの如き條約は其の内に含まれてゐる人權宣言的條項の餘波として、其の一般的適用が望ましいとされ、波蘭は右少數民族の一般的受諾を提唱した。併し日本の人種平等案を否決して人種不平等の原則を確立し、移民問題を國內問題となした英米兩國其他に、斯くの如き條約が受諾される筈はなく、數年間聯盟の各種機關に於いて押し問答の末、波蘭が少數民族保護條約を破棄することに依つて其の局を結んだのである。恰も一般軍縮會議が獨逸領地利、土耳其等の軍縮秩序否定に其の局を結んだと同様に、國際法人としては唯一のダニューブ河監視委員會を擧示し得るに留まり、國際聯盟は法人ではなく組合の如きものと解される。法律上の性質論は暫く措き、其の活

動の實蹟から見て國際聯盟は主權國の選擇意思より發する假の協力 Association に過ぎない。聯盟國の集合は存するも聯盟と云ふ名に相應しい實體は存在しない。聯盟事務局すら之れを透視して見ればモザイク的混和物であつて化合物ではない上下五千年の歴史の示す所、聯邦と云ふものは封建制度から統一的民族國家に推移する過渡期に於いて一民族の各部分が集まつて、結成するものたるに過ぎぬ。獨逸、北米合衆國、スイス、ブラチル等の事例が之れを立證して居る。本質意思、共同生存意思に依りて結成された最大の群團は民族である。而して民族は夫れ以上の群團に歸一融合することを拒否する本性を持つて居る。死活的共同目的の爲めにする同盟の本質は、休戦の日に曝露されるが常である。超國家は實現不可能のものと斷定せざるを得ない。眞に同情に値ひするエチオピアは其の泣く程必要とする瞬間に聯盟を見失ひ、序で實は始めから純正國際主義も其の機關と稱するに相應はしい聯盟も共に不存在であることを發見した。蠟山教授も國際化さるべき植民地一般の行政の擔任者としての聯盟の獨立性完全性に關し多大の疑惑を投掛けて居るもの如くである。國際政治が結局百パーセント強國の恣意と腕力との反映であるときに委任統治委員會の超越性は到底之れを確保することが出来ない。植民地再分配と云ふものは——中央集權的の國家社會主義が資本主義に修正を加ふるにも似て——超國家又は國家聯合の世界的社會政策としてののみ之れを想定することが出来るのであつて植民地再分配は國境の抹殺、國家が自他の差別觀より解脱すること即ち超國家建設を前提とするが、左様なものは人間には不可能である。加之今迄の事例が示す様に一旦委任統治に附すれば最早それは委任統治國の權成部分とならうがなるまいが、委任國の藥籠中のものだ。勿論B式には貿易上の機會均等主義が適用されることとなつて居るが格別效果的な國際化の保障とは云ひ得ない。委任國總督の手心で何とでもなる問題である。委任統治は非併合非賠償の主義を貫く爲めのカモ

フライチであつて、結局委任國への併合と實質上差異はない。植民地が聯盟の管理に移されても委任國にならねば獨。伊・日等の不満は永續する。是等の國が委任國になれば、其の結果は一層知るべきのみ。故に聯盟の管理に移すと云ふ様なことは一部分の問題の轉位とはなるも問題の解決とはならぬものである。

植民地國際化の一態様として委任國を任命せず、聯盟自身を委任國とする共同委任統治の制度を布くべしとの論がある。但し既に述べたるが如く眞に之れが可能である爲めには聯盟が國家聯合即ち超國家とならなければならぬが、反對に聯盟は實に脆弱なる假の協力であつて、斯くの如き各國の實質的利益に重大の影響を及ぼす重大問題を擔任するに堪へない。聯盟は小國間の紛議を時として抑へる外、阿片取引とか、婦人兒童賣買とか、人道的第二義的の事務を扱ひ得るに過ぎない。なる程ダンチツヒや從前ザール河地方には聯盟が高級委員を任命して所謂國際行政に従事せしめたのであるが、是等は過渡的にあらざれば、即ち形式的の事務を扱つて來て居るに過ぎないのであつて、例へば不満足國獨伊人の内から聯盟が委任統治地域の總督を任命すれば、結局獨伊に併合せられたと大差なくなり、若し反對に大差がある様なれば國際紛議が頻發して其の煩に堪へないであらう。筆者の見解では偉大なる思想の幽靈たる聯盟の本質を前にして共同的直接委任統治は全く空想の域を脱しないのである。

清澤列氏は日本としては人口制限も移民流出も共に困難であるが、尙ほ年々五十萬人に職業を與ふる必要ある關係上植民地再分配が望ましと前提し、アフリカの一部、ニュウギニア、ボルネオ、南洋諸島、シベリア、アラスカ、加奈陀北部を解放し得べき地方と看做し、強國及び之等の拋棄すべき領土の現所有國の代表者を以て國際領土委員會を組織し、各植民地に行政長官を任命し、國際主義的に監理せしむべしとの興味ある案を提示して居る。之れは植民地國際化

の第三の形態であるが、併し其の實現性に乏しきことは既に述べた所を以て充分之れを理解することが出来る。植民地再分割時代は若しありとすれば夫れは、國際戰時代ではあるまいか。

(ロ) 舊獨領の再検討　ロイド・チヨーチ氏は嘗て全世界に千三百五十萬平方哩の領土と其の生産原料とを支配する大英帝國は、世界平和の爲には領土上の犠牲を拂ふべきであると論じたこともあるが、後には余は英國の一片の領土たりとも之れを外國に割譲するに賛成せず、唯だ委任統治地域は國際聯盟に與へられたるものなるが故に、委任統治の問題を再検討するは、世界平和の爲め當然の措置と信ずると述べて居る。尙ほ前掲の労働黨の決議案の否決された後、英國の新聞紙は一齊に此の重大問題に付見解を披瀝したが、其の際自由黨及び労働黨系新聞紙は、委任統治地域の國際化を唱道し、内マンチエスター・ガーヂアンは結局非自治未開發地域及び人民に對する國際的委任統治案を攻究すべきものと考へるが、差當り受任國が委任統治地域は早晩一の國際的機關に引渡さるべしと宣言すべきであると論じて居る。

以上の如く舊獨植民地即ち現在のB式C式委任統治地域に關し特に再審査を加ふべしと主張される所以は如何にも現在の獨逸が一等國として原料も足らずあれでは到底やつて行けず、結局獨逸は爆發するから歐洲平和の安全鑿として舊獨領の返還を考慮し、少くも獨逸を受任國に指名すべしと主張せられるもの如くである。獨逸は久しき以前より國家の名譽に掛けて植民地の奪還に志し、ヴェルサイユ條約の軍事條項、ロカルノ條約を破棄して軍事上の制限を一擲した後に於いては、専ら植民地問題に主力を注がんとするもの如く、最近の人民投票には植民地奪還要求の一項が加へられてゐた。獨逸が聯盟に復歸すると假定して、其の目的が平等の立場より軍縮や歐洲平和機構を論ぜむとするよりは、寧ろ植民地問題の爲めであると見るのは僻目であらうか。

獨逸人特にナチスは委任統治に付き同盟及び聯合國側とは全く異つた見解を把持するもの如くである。彼等は舊植民地に對する主權を喪失したと解せずして、唯だ行政權を一時的に委任したと見て居るのである。非併合主義を貫けば彼等がさう主張するのも無理はない。法理上彼等の主張は支持し難いが凡そ所謂態度決定(Stellungnahme)が決定すれば、理屈は何とでもつくものである。舊獨領に關するヴェルサイユ條約の規定も曖昧で五大國が、主權を譲り受けたとの解釋は一つの解釋であつて、聯盟主權説も聯盟の名に於いて受任國として等の用語に鑑み成立し得ないわけではない。斯様な次第で、獨逸の舊獨領奪還の一態様として、獨逸自身受任國ならむとの要求は一層強烈となり、英國輿論の一部には之れに共鳴するものがあるから、此の問題は必ず聯盟に上程される。併し受任國の責任政府が之れを拋棄する意思を毫末も表明して居ないのみならず、寧ろ反對して居るから歸趨は不明である。獨逸が満足を得れば夫れがアペリチフとなつて領土的食慾を喰ふから、植民地問題も歐洲の平和問題も常に久しく列強政治家の頭上に、デモクリタスの劍の様懸垂するであらう。

五、平時に於ける原料の自由分配

米國國務長官ハル氏は、平和確保の爲めには國際貿易の再建、通貨安定の恢復を實現し、且つ合理的條件に基き重要原料品を各國に配分するを要すと説き、英國外相ホア氏は、一九三五年九月聯盟總會に於いて後進國は其の資源の開發、國家生活の確立に付き先進國の助力を期待するの權利あるものと確信すと説き、原料を必要とする工業國間に原料自由分配の必要を強調提唱するものである」と述べ、また植民地問題は政治的よりは經濟的であると述べてゐる。英首相ボ

ールドウイン氏は此の英外相の言を裏書して、より容易なる原料の獲得及び後進國の經濟的發展を可能ならしめることの重要意義あることを指摘してゐる。見るべし、政府の責任ある大官の説く所は原料の分配であつて、植民地と云ふ土地の隨意的再分割ではないことを。

民間に於いてロイド・デューチ氏も「植民地の原料品は何人にも之れを使用せしむべきもので、之れが不足を訴ふるものに對しては、植民地市場の門戸開放、移民法の修正、或は植民地の調整により之れを補はしめることを要す」と説き、原料品分配を主として論じて居る。佛首相サロー氏も同種の問題に付き、原料品及び市場の分配の不公平の矯正及び人口問題の解決こそ世界を救ふ所以なりと説き、植民地の體よりも用を説いて居るから、寧ろ移民問題、市場問題を合はせた原料分配論に屬すべきものである。

ラムゼー・ミューアは從來筆者の好んで引證する論策家であるが、彼は「伊太利・獨逸・日本」と題する一文に於いて領土特に植民地の再分配は原住民族を暴君の手に委し、併も暴君等に過剩人口の移住地すらも供給し得ざる愚策であつて、濠洲を日本に、加奈陀を獨逸に、伯刺西爾を伊太利に與ふべしと提案する氣紛れ者もあるまいとなし、寧ろ文化的國際政策として貿易の自由、移民の自由を恢復し、且つ國際間の緊張除去の爲め、自治を行ふ迄に成熟して居らないあらゆる熱帯地方の植民地を委任統治下に移し、平等に全世界の通商に向つて開放すべきであると論じて居る。従つて彼の論旨の主要部分には依然植民地開放論、即ち市場及び原料の自由を主張するものである。ロシヤン氏も人口問題、失業問題等の解決策としては、實行困難なる領域の變更よりも寧ろ通商障礙の撤廢に依り、各國産業の振興を計るべきであると説き、原料購入の自由と市場の自由とを提唱して居る。

米國務次官フランシス・セーヤーは經濟的軍縮を提唱し、植民地その他の非主權領土に於いては、世界一切の市民に對し、當該市場に近づく完全に平等な權利を確認し、當該領域に居住し、商取引に従事することを希望する一切の國民に對し、全く均等な取扱ひを賦與せねばならない。……植民地資源を充分利用出来れば特に移民政策に依らずとも何等生活標準を引下げずに全國民を扶養出来よう。植民地の資源につき各國民に均等な機會を保障することは國際平和確保の要諦であると述べてゐる。

佛蘭西が獨逸のロカルノ條約破棄後、歐洲一般平和機構再建方に關する提案中には、領土改訂の要求は尠くも二十五年間之れを行はざること、植民地問題に關しては、凡ゆる國家に對して原料を均潤せしむる爲め、植民地資源の再分割方法を講ずることの二項があつた。

即ち知る、列國の責任政治家が賛成して居るのは、唯だ原料品分配自由丈けの問題である。同時に一般に通商平衡對遇問題、特に原料品と交換的に製造品の輸入も或は附隨的に問題となる可能性のある事柄で、斯くの如き日程を以てする國際會議の開催は目下に於いても可能性あるものの如くである。併も夫れは平時丈けの事で戰時のことは同盟、中立政策等に吸収されて仕舞ふ。ルガード氏が英國として爲し得ることは相互主義の下に阿弗利加に門戸開放主義を適用することであると述べて居るのは、此の意味に解すべきであらう。

所が過去に於いて國際聯盟の専門機關は伊太利委員の努力で原料品問題を調査し、原料の自由なる獲得、加之、瑞西等よりする動力の分配の問題を調査したのであるが、唯だ多少の資料を蒐積し得た迄で、何等の國際協定にも何等の具體的結果にも到達し得なかつたのである。

借て本来原料品なるものは實は金を出せば幾程でもあるもので、生産費を償うて多少でも餘りある値段で賣行くなら其の供給は幾程でも増加の可能性がある。我國が絹絲の處分に困つて居る様に印度は棉花、希臘は煙草、羅暹は米、加奈陀は小麥、米國は棉花、ブラジルはコーヒー、濠洲は羊毛、南洋はゴムの處分に苦しんで居るのであつて、時としては新收穫の出廻期には其の價格を維持する爲め、又は或る產品の限界效用を高めることに依り其の價格を吊上げ、價額を大にする爲め過剰生産品の一部的破棄を實行することさへあるのである。夫れ故に正常價格さへ拂へば原料品は幾程でもあり、時としては生産費の二分の一又は三分の一の價格でさへ賣却されて居るのである。故に此の際必要なのは實は原料の存在ではなくして爲替資金の存在である。此の問題は市場問題とも關聯して來るが、一國の富強と云ふことも關係を有し、其の解決の爲めには總て植民地夫れ自身が必要になつて來ると云ふ次第である。

佛國は從來より植民地に排他主義を適用し、英國も亦一九三二年以來之れに追隨し、蘇聯、獨逸、伊太利の國家社會主義は經濟的國際主義を衰退せしむることとなり、一部は其の結果として經濟的國家主義即ち經濟的軍擴が國防的軍擴を煽つてヴェルサイユ條約を廢棄に歸せしめんとして居る。處で此の勢を既倒に挽回せむとした倫敦通貨及び經濟會議は經濟的軍縮の第一歩たる爲替の安定に關し議合はすして何等の成果を齎らすことなく解散した。多くの場合存在するものは合理的である。英帝國の特惠制度、經濟ブロック形成の傾向、經濟的國家主義オーケルキーへの傾向が強いと云ふことは國際會議を開いても決して所期の目的を達成せしめないことを語るものであつて、一般的經濟恢復に依り一般的多邊的相殺が行はれ、世界貿易額が最隆盛時の數字に戻る以前に於いては原料市場問題に關する國際會議は何等の結果に到達せず、吾人は夫れが現在の傾向である様に日印、日濠等互惠制度を布き、是を擴充して行く方を寧ろ實際的と考ふるものである。

斯様な國際會議が開催されたとして、之れに参加することは恐らく無駄であらう。何か有意義な仕事が出来るとすれば、大英ブロック間特惠制度の破綻から今や破れかけて居る英帝國の利己的ブロック計畫經濟の人為的支柱として參加國に植民地產品の豫約註文でもさせられるのが落ちではなからうか。さすれば我國などが斯かる原料品の平時に於ける自由確保の會議に参加して損をすることがあらうとは思はれぬけれども、大なる代表團を遣々と本國から英京等へ差遣することはお人の好過ぎる話かも知れない。人を悪く考へれば原料の自由問題は植民地再分配と云ふ飽和國に取り苦しい問題の擡頭——夫れは飽和國が氣力を失ひ徵兵忌避者となり最早や大帝國を生んだところの軍國主義を維持し得ないことから必然的に結果する——から逃避し、提起された問題の眞の内容、眞の論點 (Jangle) と云ふものを眩ます爲めの詐術かも知れない。觀し來ればかの、ハウス大佐の提案も、岩石の上に落ちたる辛子種子の様に考へられる。

六、結 論

以上述べ來つた所は、眞正の生成發展する平和を維持する爲め、政治上經濟上の變革、即ち現狀打破が必要とせられるに當り、換言すれば領土の強制再分配を意味する戰爭の代用品として領土の任意的再分配が必要とせられるに當り、右變革右任意的再分配は協調的共同措置に依るよりも、矢張り從來遺憾ながら夫れが通則であつた様に、多くの場合戰爭に依りてのみ到達せられると云ふことを物語るものであつて、此の事實は軍縮秩序が解消して軍擴競争が既に酣に進んで居るとき、ハウス大佐の提案が各國爲政者の聳耳の上に落ち、何等の意義ある反響を呼ばず、愈々軍擴が強化され

て行き、エチオピアは今や伊太利に吸収されんとし、獨逸が尠くも舊植民地を力づくでも再併合せんとして居ると云ふ事實と吻合するもの如くである。

楮て筆者は本稿の序説に於いて純正國際主義と功利的國際主義とを對立させ、前者は人道家、宗教家、平和協會、自由なる立場に在る四海同胞主義者の論策家に依つて抱懷され、提唱せられるけれども夫れが實際政治家に依つて取り上げられ、實際問題の料理に適用せられるに當つては、中和變容されて後者の主義に推移すると云ふ原理を假定して置いたのであるが、ハウス大佐の提案より英國政治家の實際的意圖に到着する過程、即ち領土再分割より原料の平時に於ける自由分配に墮する過程に於いて右假定は決して否定されなかつたのみならず、反つて一の確證を得たと信ずるものである。蓋し大英帝國の如き老大なる經濟ブロックに在りては、最も單純なる利己主義も、例へば彼國が熱心に聯盟を擁護してゐることが示す通りに多少の經濟的國際主義の假面を被つた行動に出得るからである。英國政治家の寛大さうな言説は結局に於いて開明的利己主義の範圍を一步も出でて居らないのである。

筆者は前掲拙著の八三一頁に於いて「前述の H. G. Wells の主權合併 (Pooling sovereignty) の觀念が平和問題の核心に觸れること毫も疑ひなく、飽和國たる英米等が政治的經濟的優越權を全世界の民族の康寧の祭壇に捧ぐるが如きは純正國際主義の指示する所に従ふものにして、或は列國の追隨する所となるべきも、英米が此の問題に關し基督の前より逃避したる「當める青年」の如く行動すべきことは一點の疑ひなく、安全保障を要望する佛國を動かすものも亦純正國際主義にあらずして、英・米・獨の軌道内に陥らざらんとする願望の現はれたり得べく、また聯盟の如きものが大國の制強有力政策に利用せられざるの保障なし。觀じ來れば聯盟規約及び壽府議定書の瑕疵を除き、其の精神を擴充して

國際聯盟に、簡明直截に最高政治主義を賦與し、之を超國家と爲し、「萬國は一國の爲めに一國は萬國の爲めに」存在するが如き制度を布かむことは、泰山を抉みて北海を越え、針の目度を通して駱駝を驅るよりも更に困難なり」と記述して置いたのであるが、此の一節は尙ほ植民地再分割問題に關する總括的批評として、充分妥當性を主張し得るのではなからうか。(昭和十一年四月十日)

第四章 内政と外政との關係時局認識の鍵鑰

先年佛蘇同盟條約が調印せられました際、獨逸の指導者ヒットラーは此の同盟條約はロカルノ條約の違反ではないか、併し他の締盟國がロカルノ條約を守る限り獨逸も之を守るものであると宣言致しました。所が此の宣言は其の表よりも裏に意味があつたのでありまして、最近本年の三月、佛蘇同盟條約が佛國議會に於て批准せらるるや否や、獨逸は敢然ロカルノ條約を破棄し、ライラントに大兵を進駐させた次第でありました。凡そ孰れの國でも責任の地位に在る當局は、必ずや國家百年の大計を想ふものでもありませんが、同時に又當面の議會、又は内閣の壽命をも考へて聲明や答辯するのでありますから、我々は日常の出來事を注視すると同時に、右聲明や答辯を宇宙特に人間界の理法や、民族的歴史の必然性やに照して判讀して行かなければなりません。

私は十年以來、一つの研究題目を持つて居たのであります。夫は「内政と外交との交渉又は關係」と云ふ問題であります。嘗て永井柳太郎氏が其の講演中に於て外政は内政の延長なり、と云はれたのを私は記憶致して居ります。外交史

上、内政の行詰りを外交に求むといふ例は尠くありません。

ナポレオン三世がメキシコ遠征を企てたのは外交上の成功により彼の獨裁政治の不評を轉換せむとした一例であります。蘇聯の指導者達は對外戦争の行詰りを國內革命に誘導して行くと云ふ戰略を考へて居たのであります。ムツソリニのエチオピア遠征も類似の見地から觀察することが出来、多分ヒットラーもナチスの政策に於て行詰りを生ずれば生ずる程今迄の對外硬を續け、舊獨領植民地其の他の失地に對する回復熱を高めて行く事と想はれます。

明治維新前、尊王攘夷と開國佐幕とが對立し、大體尊王開國に歸一した事は御承知の通りであります。之等は皆内政と外交との機微なる交流交錯を明徴にするものであつて、私には畢竟内政も外交も民族國家の生活運営と云ふ一個の單一現象の両面に過ぎぬものと觀察されるのであります。所が今迄私は此の重要問題に就て世界中に一冊も纏つた著述を發見出来ませんでした。根氣よく搜したならば五頁、十頁の小論文位はありますが、其の程度のものなら私共にも書ける準備があります。斯様な次第で全體として系統的には把握されて居らない「内政と外交との關係」と云ふ重要問題に付、歐洲列強や本邦やの内外の情勢と云ふものを顧念しながら、一應不完全ながらも解説を試みて見たいと存じます。此の際、群集心理學や、生物學や、經濟學や、軍事學の知識を借りて來ることが是非必要になるのであります。

動物は植物に依存し、植物は太陽に依存し、肉食動物は他種の動物、竝に植物に依存するのが生物界の理法である。人間と雖も尼僧や平和主義者迄含めて此の理法の勢力圈内に在るものの如くであります。生物の存続成長は悉く生活資料の吸收合併に據るのであつて、ファシスト伊太利民族活力の內的に氾濫した伊太利のエチオピア併合の如きは其の著例であります。再軍備に依り今や謂はば、筈やフォークやの準備が出来たヒットラーが、之を何處に突立てるかには實に

今日の興味ある問題であります。偕て人間の一群が吸收合併することを原則として一應許されて居る範圍の限界を示すものが即ち國境でありまして、往々自由主義者や國際主義者の忘れ勝ちな國境は實に重大なる意味を持つものであります。米國人が其の國境を閉鎖して狐狸を棲息させ、百年後の子孫に未開發の富源を保留しようと努めますことは、一面絶對の正義觀からすれば如何かと思はれますが、他面至極自然な成行とも考へられます。其の反動として日本の大陸發展、即ち滿洲事變が起つたので、此の事變の原著者は米國人であると云ふ見方も強ち荒唐無稽を以て目することは出来ません。

偕て猛獸特に肉食獸は獨棲する傾向が強く、群居しないのであります。草食動物即ち社會的生活を爲す動物は之に反して多數群居するのを常と致します。斯様な群團を爲す動物の示す第一の特色は、鋭き生物武器や猛猛性やの無い代りに、仲間より來る暗示に對する暗示感暗示感性が著しく強いのであります。第二に斯様な群團は本質的に指導者指導者を要求し、例へば秋の空を翔る雁の先頭に立つものは常に翼力の最強者なのであります。人間社會であれば、即ち英雄が待望され、而して環境が不安であればある程、即ち非常時が深刻であればある程、強き指導者が要望されます。弱體内閣と云ふが如き言葉を嘗て聞きましたのは、即ち待望された強き指導者が現はれて居らず、當該群團の期待が裏切られて居ると云ふ失望を表徴するものであります。獨逸のナチスが大統領とか總理大臣とか云ふ様な官僚的な稱呼を棄てて嚮導者(Führer)と云ふ文字を使用して居る深い意味もこれで御了解がなせうと思ひます。偕て本論に戻り第三に群團を爲す動物は孤立を恐れて之を脱するが爲には死をも恐れないと云ふ性質を持つて居ります。此の性質を學者は群團本能と申して居ります。例へば、我々が夜會に出席して、全體の者が黒のスモーキングで居ります時に、自分一人縞の仕事着

で居りましたならば、非常な不安を感じるのでありますが、之は集團本能の要求が充されて居らない爲めなのであります。昔希臘に行はれたオストラシズム、我國の流刑、俊寛僧正の嘗めた苦杯と云ふものは集團本能に加へられた攻苦であるのであります。特別に注意しなければならぬことは、此の集團本能が攻撃防禦と云ふ際に當つて獨り著しく亢奮することであり、皇軍が死闘敵陣に突貫するに當りまして、「天皇陛下萬歲」或は又「日本帝國萬歲」と云ふ様な皇國組織の根本事實を國民精神の顯現である最高の字句を絶叫致しますのは、集團本能の最高調に達した證據でありまして、斯くの如き心理状態に於てのみ我々は祖先より傳へられた殉國の美風を發揮出来るのであります。孰れの國を問はず非常時や戦時に反軍思想を抱懐する者は勿論徴兵忌避者が極刑、私刑に遭ふのも亦此の集團本能から来る反動であります。此の事實は數日前貴族院に於て議員の辭職問題を起した経緯に徴しても明瞭に看取されるのであります。第四に集團は常に監視者又は見張番と云ふものを持つて居りますが、更に蟻の社會になりますと、同種間相戦ふ所謂戦争なる現象が現はれ、従つて此の社會は職業的軍人を持つて居ります。つまり職能に従つて専門が分れ、分業が行はれて居るのであります。此種の武蟻は食物も給仕人、否給仕蟻が手傳はなければ喰べないと云ふ風でありますので、所謂軍國主義——此の文字は反軍主義者やマルクス主義者が好んで使用するのですが——は人間に限られず或る程度迄社會的動物に本質的な現象であるとも觀察せられるのであります。第五に最後に集團は共同生存意思を有するものと云はれて居ります。つまり個體の屬する種の存続を保障する爲に、自分丈けよければよいと云うて済まきず、仲間が自分の周圍に澤山居ることを愉快とする性質を持つて居るのであります。共存共榮は時と處に依り強弱の差こそあれ、一集團に屬する各個體の本然の要求であるのであります。

人間は實に斯の如き社會的動物の最高等なるものでありまして、人類の歴史や吾々の經驗の示す限り、血族關係を中心とする家族と民族國家とが、人間に本質的な團結である様に思はれます。特に政治上重要な民族國家と云ふものは人種言語、宗教、風俗、習慣、傳統、皇室、地理、經濟運営の單一又は共通性を特色とするものでありますが、勿論先刻述べました社會的動物に共通な五種の性質を、高度に持つて居るのであります。而て特に人間には鋭利なる角も牙も無い代はりに頗る發達せる言語があるのであります。之は人間の暗示感性が優れて鋭敏である事を立證するものであります。交通發達せる今日に於きましては、外國語なども多く寧ろ不必要に多く混入しますが、之に對し國語の統一整理が行はれ國定教科書の採用を見、國語の國防と云ふ様な現象を見ますのは、人間仲間の間に於ての推感會通を適確且容易ならしめんが爲めの必要に基くのであります。此の要求から國體明徴問題までの距離は僅に紙一重の差であります。私は大學時代新歸朝者上杉教授の憲法講義を聞き美濃部博士の講義との差異を大體了解して居たのでありますが、外遊中自己意識の高まつた我國に、國體明徴問題の起るを聞き、之を民族的、文化的、吐瀉作用と名附けたのであります。餘談は暫く措き、集團本能は人間に於て特に強烈でありまして、吾々が忠君愛國の國家的示威運動に臨んで全く特殊にして名状し難き武者振を感じますのは、實に集團本能の亢奮を語るものであります。滿洲事變が起る以前の十餘年間は、大體政黨及び政黨内閣が日本民族の嚮導者となつて居り、内政の指導精神は即ち自由主義であつて、外政の指導精神は即ち巴里平和會議、華盛頓會議、倫敦會議に臨める協調外交所謂追隨外交であつたのであります。滿洲事變を一轉機として嚮導者權は尠くも一部は軍部にも歸した様に觀察せられ、内政上は國家主義が高調され、外政上は自主積極外交が強調せられるに至りました。あの際我國の各界の者が競うて軍部特に青年將校達に接近して其の考を聞かんと欲する強い傾向

を認め得たのは、之れ又孤立せざらむと欲する群團本能の興起を明示するものであります。滿洲事變後國際關係緊張し軍擴行はれ潜在的戦争顯著となり、人之を呼んで非常時と申すことになりましたが、非常時と云ふことは心理學的に云へば、群團本能の興奮を意味するものでありまして、マルキスト等の反軍思想も迅速に是正されて行き、曩日の露骨なる反軍思想の表白の爲に立場の困難を感じた學者もあつたものの如くであります。此の頃「言論の不自由」の聲を聞くこと屢々であります。夫は勿論年六十回とか七十回とか云ふ記事差留命令に關係するではありません。併しながら夫以外にも彼の「御時だから」と云ふ割切れない言葉が示す通り眞に非常時に生きる關係上、内心の群團本能から来る禁止命令——勿論、本邦の知識階級に抱かれた自由主義や、マルクス主義やに對する——に依り今迄の様な勝手な發言が抑壓されて居ることを示すものかとも存じます。近時は恐らく所謂、スパイ戦が行はれ、本邦に於ても間諜の取締に關する法律が採擇されんとして居る次第は御承知の如くありますが、スパイ戦が特に暗號電報を廻つて行はれること、ブラツク・チエムバー記述の如くであるのは實に暗號電報が一國の神經中樞の各部を連ねる暗示手段であります關係上然るのであります。在東京露國大使館員たる邦人に付き問題が起つて來たのであります。實に之等の人々は故意過失がない場合でも、既に相當苦しい立場に置かれることを覺悟してかかるべきであります。

共同生存意思も亦人類の場合に於ては強烈であるのであります。種の存続の必要から來て居るのであります。從て各個體は社會的、ダーウイン主義の指摘する如く生存競争に従事して居りながらも、同情救済が同時に併行すること熊谷敦盛の軍記に見る通りでありまして、共同生存意思の最後の客觀的保障は犯罪人に對する制度であります。現代國家の刑罰は復讐よりも豫防矯正に重點を置き外國人たる乞食や犯罪人は之を放逐致しましても同國人であれば懲治しながら

らも、國家の負擔に於て之を養つて行くのであります。此の連帶關係は社會層の各方面に於て、民族國家の各員に宿命的なものであります。水草を追ふ遊牧民には生活資料は或は共有であります。大化の新政で土地國有を改めて布告し班田制度が行はれましたことは決して偶然とは申し上げられません。之と同様の環境に置かれました上でスカンヂナヴィアの栗鼠は附近の草木を喰竭せば、死力を出して大舉全體移民を執行致します。古代より戦争の原因は生活資料——希臘波斯の戦争に於ける無花果——又は性的財産の争奪に關係する場合があります。從つて活力のある民族の生活現象は必ず二つの方面に其の生活運営を示すのであります。其の第一は其の群團の内部で全部の者が兎に角生きて行かれる様に譲り合ひ、有無相通じ、其の才能に應じて自己を實現し、其の自己を轉じて全體に回向して奉仕するといふことであります。其の第二は内部に於て如何に有無相通しても全體に行渡らない、又強ひて行渡らせる爲に一切人が營養不良に陥ると云ふことであれば、其の際に致し方なく、本來生活資料を自由に採取してよい區域たる國境を打破つて外に氾濫し、一層廣大なる基礎の上に群團の生活運営を再建して行くこと云ふ作用であります。マルクス主義は全部清算され得るし、又清算されねばなりません。併し群團本能、民族共同生存意思を具備した民族國家、特に我が國の如き家族國家に於きましては、萬人が所を得る様に、一切人が譲り合ひ、有無相通じて、生活が安定する様に國家が攝理して行き、綜合國力を高めて行くと同時に海外發展大陸政策を遂行して、我々が生活資料を吸收合併し得る地盤を廣めて行く事は、民族生得の理法でありまして我は此の理法からは逃避出來ないのであります。宇宙の理法に基礎を置いた國家の法制の保護下に於て、然らざる場合には到底實現し得ない富貴を克ち得た自由主義者達が犠牲の方は全然知らん顔で済ませるものでありませうか。私には妙

くも疑問になるのであります。共產主義は清算し得ても群團本能、共同生存意思は清算出来ません。茲に赤と右と紙一重だと叫ばれた事實の根本原因があるのであります。此の兩者を截然と區別し得る標準も實に茲に存するのであります。茲に又眞正の合理的社會主義の基礎が発見され、獨逸語を用ひて申しますれば、國家社會主義は統一鞏固なる民族國家に必然的でありまして、私は此の立場から同胞の指導原理として日本中道全體國家主義を提唱致すのであります。

群團本能は團結を擴大させるものでありますが、然らば、國際聯盟の理想たる世界聯合とか世界國家とか云ふものが人間に妥當するかと云ふに、群團本能には矛盾性がありまして、民族を超えて他の群團に擴張歸一することを拒否するのではありません。民族國家は我々の經驗上最大の群團で超國家は我々の空想であります。各個人の擴張的利己主義の極限は民族國家であります。其處から各個人の昂揚、慨世の志、政治家氣質と犠牲と云ふ事が生れて參るのであります。

偕て人類社會に秘密結社と公開結社とを區別することが出來ます。秘密結社は、フリーメイソン其の他五、六の場合に見るが如く、其團員たるものが、團員に丈けしか知れてをりません。團員であると云ふ形式的の制約は絶對的價値を持つのであります。團員たるの本分に反けば苛酷なる私刑が來るのであります。從て集團的生活の内容と云ふものは重要でなくなり、フリーメイソンに關する限り眞理、博愛、道德把住、協力と云ふが如き他愛もない事項を除き、秘密的目的の如き部外者には到底窺知し得ません。或は秘密結社の階級的組織が嚴格である關係上、團員でも末輩には前述の秘密的目的は到底知れないこととありませう。之に反し、公開社會に於ては即ち國家等に於ては團員たることを示す國籍と云ふものが重要ではありませうが、之が絶對的價値を有するに至りません。同時に集團生活の内容と云ふものが等しく重要性を帯びて來るのであります。即ち、縣人會とか、文化協會とか、同職組合とか、其の團員の間に發言權の大

小利益享受の厚薄等に依て、親粗の段階が生ずる傾向を認め得るのであります。斯様にして公開社會たる集團の内部に兎角に求心力と遠心力との交流作用が起つて來るのを避け得ないであります。先般衆議員に於ける齋藤隆夫氏の演説中に生存競争の落伍者、政界の失意者、一知半解の學者と云ふが如き文字がありました。之等は一樣に遠心力の温床と看做さねばなりません。皇國組織の根本精神に同胞中一人でも其の所を得ない者あれば、之は陛下の赤子として我が政府の關心事でなければならぬ。我國が一君萬民の家族國家でなければならぬと云ふのは此の遠心力を抑へて求心力のみを發動させて行く必要を説いて居るのであります。群團本能は強くありまして、攻撃防禦の必要が之を興奮に導くことなく、久敷自由主義のみが高調され來つた社會に於ては何時とはなしに社會の綱紀が弛緩して、社會が解體に瀕するに至ります。之が實に文明強國の頹廢に入る時でありまして、嘗てラチフンチアとか羅馬と其の屬領とを壊滅に導き、今、シーグフリードが英國の危機を叫ぶのは根本に於て斯の如き事態に接近したからではあるまいかと考へるのであります。されば、前述の群團本能の明滅と求心力遠心力の交流作用に依り、各種の國內的及國際的現象を惹起致すのであります。内政と外政との興味ある交錯も此の間に潜在するのであります。

偕て危険信號を受けた千匹の羊は一匹の如く行動するのであります。警戒を解いて草を喰ふ羊群は千匹は千匹の如く行動致すものであります。所で今日は技術的進歩の結果文化的交通が頻繁でありまして一國の學者、醫者、農學者、國際法學者等は他國の夫と、一國の藝術家は他國の夫と、宗教家や平和主義者や他國の夫と提携し、茲に各種の職能的國際主義が現はれて參ります。中でも吾々は外國貿易に従事する者資本家特に金融業者の國際主義が、顯著に現はれて參るのを認めます。此の最後の國際主義に重きを置き過ぎた結果、若し英獨戰つて伯林を陥落するも其處で掠奪すべき

ものとしては、英國資本あるのみだと云ふ様な考へ方からノルマン・エンゼルは大戦前戦争不可能論を唱へた次第であつた。兎に角平時に於て民族國家の團員が他國家の團員と交渉することは深く且多岐に亘るのが常であります。茲に一人の有閑夫人を想像して彼女が外交團へでも出入して居ると假定致しますれば彼女は九州の炭鑛夫や北海道の工場労働者にと何の係はりもないと考へる様になるのが必然であります。併し之にも反動が起り反省を促す機會は來るのであります。亂暴な次第ではありませんが、例へば帝國ホテルの舞踏會に右傾團が劍舞をしつつ躍込んだと云ふ様なことも人間に多少其の素質のあるところから起るのであります。日本財閥金融業者の圓流出に對して現はれた反動なども亦其の一例であります。夫は兎も角平時自團體と他團體との交渉は必然に起るものであります。外交機關や國民外交の叫や輸出業者の要求や謂はば感觸肢を外に伸ばす國內要素の希望は之を助長しなければ止まないであります。

斯様な次第でありますから強力な外國の時代精神や社會思想は容易に我國に浸潤して參ります。左様な思想の内に先づ自由主義を擧げることが出來ます。之には種々の意味もありませんが、第一には佛蘭西革命に現はれた自由、平等、博愛の精神を擧げ得ますので、夫は國際的に反映して人間宣言となり、十九世紀の前半社會主義擡頭の直前に各國に於て自由主義運動の高潮するのを見たとあります。斯様な運動が次第に地歩を得て保守專制主義が倒れて行きましたのは夫が人類一般に妥當する方面もあり、今日でも極く一部だけは妥當する爲めでありませうが、同時に斯の如き運動の脊後に自身民族國家をなさず、併も選民意識を以て世界に君臨せむとする猶太人の秘密結社フリー・メイソン（フラン・マソン、又はフライ・マウエライ）の魔手の動いてをるのを全く看過するわけには參りません。實に佛蘭西革命の首領は、殆んど全部フラン・マソンであつたのであります。佛國の此の傳統は今日に及んで同國に禍して居ります。

佛蘭西が露國と同盟する所以もヒットラーが佛國を無きものの如くに奮進する所以も共に茲にあるのではありますまいか。スタヴィスキ疑獄事件から昨年二月の市街戦となり、其の結果舉國一致のズーメルグ内閣が生まれましたが、一片の革新すら爲さずして葬られました。佛國人を引緊めることは殆んど不可能であります。

第二に自由主義は正統派經濟學の始祖アダムスミスに源を發し、マンチエスター學派として結成された外國貿易に於ける自由主義、從て又國內經濟政策としても個人の發案に任せての絶對放任主義を意味します。此の主義と云ふものは一面より見れば何の道個人の集合から成立つて居る社會に於て其の各個人の自由競争場裡に於ける有效なる發明努力を利用し得る點に於て棄て難き長所を有します。第十九世紀中ヴィクトリア王朝治下に於て廣袤千三百萬方哩、人口四億を擁して、而も資本主義（余はマルクスの階級闘争説を受容しないのであるから此の文字を唯集積された資本の持つ特殊の傾向の意に用ゐるのである）が矛盾撞着を示さずして、殷富雙び無く、單純なる庶民も比較にならぬ程高き生活水準を享樂し得た國と時代には自由主義が全く妥當したに相違ない。爾餘の諸國と雖も英國と事情を同一にする程度に於て此の主義を受容して差支なく、日露戦争後の我國が此の主義に弟子入りしたことに敢て不思議はないのであるが、唯爲政者も國民も勝つて胃の緒を緊むるを忘れ、政黨政治の高潮に伴ひ、無反省に過度に此の主義の論理の末梢迄を追及して行かなかつたかどうかが研究問題として我々に殘されるのである。此の意味の自由主義が既に一度言及した猶太人の立場に妥當することも申す迄ありません。

第三に思想上の自由主義がプロテスタントと靈犀相通じ、個人主義から無宗教主義、通俗主義に墮し、果ては個人の自由を尊重するの餘り、政府は有るか無いか解らない位がよいとするの餘り、超ゆべからざる國家社會の綱紀を乗越え

て、平和論から、軍縮論ならまたよいが、一轉して軍民離間の反軍思想、徴兵忌避思想に發展し、此の點では獨逸のナチスが指摘する如く國家を解體させる思想的病菌として社會主義と餘り選ぶ所なき迄に至つて居つたのであります。私の記憶する限り、若い學士などには、不戰條約に絡んで "In the names of their respective people" との一句が議會で問題となつた時に、其の理由意義を殆んど解し得なかつたのであります。ユダヤ人や、英、米人やの、一見普遍的な原理に魅了されて思想的被搾取者となり、自己意識日本の特異性を忘れて居つた故然るのであります。デルヒなるアボロの神殿に刻まれた、希臘哲學の最高綜合原理は「汝自身を知れ」と云ふのであります。認識の主體が確立せず何が認識され得ますか、自分の何者たるかを、日本の何たるかを知る事は認識の少くとも五十パーセントであります。ムツソリーニ、ヒットラーが歐洲を、否自國を混亂より救ひ出さうとしてゐる、其の無限大の思想的混亂は自己を忘れて猶太人式に考へる當然の歸結であります。希臘哲學の第二綜合原理は「何事も過すな」"Rien de trop" でありました。確かに或る期間我が同胞は自己を忘れ、過度に自由主義に走つて居りました。反動は全く約束せられたのであります。

私は佛蘭西革命は法律上の平等、政治上の自由を追及し、社會主義一般は經濟的自由を追及するものとして後者を前者の延長と考へる習慣であります。されば佛蘭西革命の背後に在つて其の立役者達を摸擬した猶太人が又、マルキシズムの擡頭に重要な役目を勤めたとしても何等の不思議はありません。千八百三十年代に於て猶太人とフリー・メイソンとは自由主義資本主義の高潮に依り、世界の富が著しく増加すると共に、三百人の猶太人と其の黄金とが或る見地よりすれば、世界を支配して居ると認識し、同時に之に對し無産階級の革命的逆襲戰の潮の萌しつつかあるのを見て、早くも之に備へる必要に氣付き、茲に獨逸系猶太人、カルルマルクスの登場を見たのであります。マルクス主義は資本集中

説、階級闘争説、唯物史觀を經緯とし、民族國家の本質的存在と其の對立關係とを否認し、勞働階級——資本家階級に對する——の國際主義を特色とするものであります。勿論大天才の捏造にかかる机上の論理體系でありまして、全部が全部虚構ではない迄も、大部分を眞理を以て許すことは出来ません。併しながら兎に角彼は此處で人類に永久の問題である貧困問題を取上げ彼の想定した無産階級の戰闘的、革命的理論を編上げたのでありまして、其の貧困者に對する獨特の魅力に民族國家に及ぼす絶大の危険性が宿るのであります。而して斯かる主義の普及が一部は國際的、無國籍、無産知識階級である猶太人に有利なる環境を提供するものであることは、各國社會民主黨共產黨特に蘇聯の實情等に徴して明瞭であるのであります。生産とは環境を自己に有利に變化する事であり、自由主義や共產主義が猶太人にとり生産であり得ても、一體としての日本人には消費にしかありません。

歐洲に於て、ユダヤ禍の問題を研究して居る學者、特に加持力教徒などは世界の思想的動向の九割五分迄は、自己の環境を有利化せんとする猶太人に操られて然るのであると論斷極言するのであります。私共は此の判斷を其の儘受容するには相當躊躇するのでありますけれども、歐洲諸國は多少の差こそあれ孰れも三百五十萬を算する猶太人問題の悩みを持ち、猶太人に有利な環境が用意されて行くに伴うて歐洲社會の綱紀に弛廢し、人々は全く思想的混亂、道義的無政府状態に陥つて仕舞うたのであります。各民族が自己意識を失つて結局猶太人の陥穽である思想的支配の世界へ迷入つたのでありますから、之は極めて當然の結果と申さねばなりません。斯て世界は一樣に混亂ユダヤ禍の潮に押流されたのでありまして、之に對し群團本能と共生意思とに制約された民族社會から反動が起り来るのは必然であります。其の反動は反自由主義、反サンチカリズムを必要とした伊太利にてはファシズムとなり、反ユダヤ主義、社會民主

黨、共産黨の排撃を必要とした獨逸に於ては國家社會主義となりましたが、孰れも根本に於ては即ち國家主義であり、此の反動は一般に之を取取る事が出来ましたが、環境の至難にして活力ある國民程此の反動も強かつたのであります。私共は蘇聯の、一國社會主義すら此の反動の例に漏れて居らぬと觀察して居るのであります。

偕て前述の反動は極度に無氣力なる自由主義の政府を持ち、サンチカリズムに荒されて同盟罷工に目も足らなかつた伊太利に於て最初に最も強く現はれました。人間の本性に宿る宇宙の理法の動くところ社會主義者の陣營より出でたるムツソリニに依り市街戦に墮した階級闘争は内亂は民族、即ち全體に依り超刺されました。フアンズムと云ふ名稱からして既に群團本能、共同生存意思に根を卸す人類に本質的な民族國家主義の高潮に相應しいのであります。ムツソリニの組合國家に於て、労働者と資本家とは生産者として平等の立場に立ち、不勞所得者は貶せられました。今や雄邦伊太利の歐洲政局に對する發言權は急に増大し、佛國をして意義ある讓歩をなさしめたる後、國內財政經濟の逼迫する所、爆発か膨脹かと揚言して、ムツソリニは斷乎エチオピア征服の師を起し、死線を突破して今日は之を併合するに垂んとして居るのであります。

大戰の失敗に依り十月革命を経て獨逸共和國は失意のどん底に突落され、國民は極度は自暴自棄となり、共産黨の脅威は常に頭上に懸垂して居たのであります。ナチスの主張する所に依れば、十月革命後獨逸を支配したる者は勞兵ではなくて、社會民主黨及共産黨を操る獨逸系フリー・メイソン、即ちブネ・ペリト會であり、猶太人は實に要路者の八割を占めて居たのであります。此のユダヤ禍の支配が十三年間續きたる後、排ユダヤ主義、而して全體主義——ゲルマン主義、アリア主義——は國家社會主義の旗幟鮮明なヒットラーのナチスとして登場したのであります。

ます。夫はやがて民族に本質的な群團本能と共同生存意思との歸結であるのであります。

露西亞に於ては世界大戰の末期に於て共産革命が成就致しました。夫は政治的、社會的機構と社會的生產力の矛盾と云はんよりも、ツアールを取巻いた支配階級の腐敗無能力と、外戦の行詰りを巧に内戦に利用した、過激派作戦の成功とに歸すべきであります。人々は共産露西亞が獨裁主義と國家資本主義とに惠まれて二回の五ヶ年計畫で産業革命を成就し、雄大なる軍國主義國として甦生し來ることを殆んど夢想しなかつたのであります。これは實にユダヤ思想の混迷中に座して覺らず、民族國家の活力の源泉と、其處に宿る理法とを把握しなかつた過に歸せねばなりません。マルクスは、彼の所謂無産階級の革命後國家が、如何なる役割を演すべきかを明確に想定して居らず、バクーニンや、クロボトキンは、將來の理想共産社會が徹底平等なるべきの見地より、無政府共産主義即ち國家否認に傾いたのであります。が、事實上、プロレタリアートの獨裁國家は、中央集權的國家資本主義國として、發現致したのであります。民族主義の優位性は一國社會主義、又は國家資本主義、軍國主義、中央集權主義、結局全體主義を約束するものであります。此の理を悟る者にとりては、露國の雄邦としての國際政治舞臺への登場は、當然の成行であるのであります。其の際スターリン等がマルキシズムに背馳する様な諸政策への轉換を、外政上の必要に藉口して正當化して居ることも注意すべき點であります。

既に我國に於きましても一般の風潮は漂はされて自由主義が羽翼を伸べ中途より政黨政治の華かなりし時代に於て生産者の一半である資本家の經濟至上主義、將又資本家的國際主義が優位を占め、平和主義が高潮に達し、海外、大陸に發展するのを阻止されて覺らず、巴里平和會議、華府會議、倫敦會議に於て、我が政府は米國の極東政策支那の不可侵

門戸開放に追隨し、軍縮運動に協力を惜まなかつたのでありまして、マルクス主義の高潮、帝國主義及軍國主義排撃思想にも影響されて、反軍思想の露骨に表白されたことさへ目撃されたのであります。斯る風潮でありましたから我國の知識階級一般と云ふものは、往々無自覺な安價な自由主義でなければ、マルクス主義に安住して居りまして、私共の経験した限りに於ては學生は殆ど擧げて桃色化し、教授の内之に迎合する輩さへ現はれたのであります。されば支配階級、否な左様な閉鎖されたものはあるべきではありませんから、爲政者と申しませうか、此の爲政者の殆んど全部が皇國の本壘を明け放し抛棄して顧みなかつた様に私の目には映るのであります。何を皇國の本壘と云ふか。最も強烈なる群團本能と共同生存意思に培はれ、長い歴史の傳統に純化されて國民の最高道德意識にまで高められて來た一君萬民の國體精神であります。此の道義的日本國粹主義は、マルクス主義とは絶対に相容れないばかりでなく、自由主義とは極く一部兩立し得ても凡そ最も縁遠いものであります。一時我國の戰闘的マルキストは六萬と籌せられ、之に同情する位の事は所謂、インテリに必要な一資格位に考へられて居たのであります。桃色化した智識階級の下に於て、リーブクネヒトの排軍國主義に鑑み、平和思想、軍縮運動が反軍思想に迄發展し、國軍は必要なる悪であると言切る學者をさへ生じたのであります。かくて大戰後に先づ五個師團に相當する人馬と次に四個師團とを廢止し、軍容刷新費五億六千萬圓は、十年間に唯三割丈の支出を見た始末であります。斯くて軍人の全部は世の落伍者に追込まれます。若し我國が英・米・佛の如き飽和國であつたなら軍國主義を否定して差支なく、或は社會解體作用の進行する所、反動を惹起しなかつたかも知れませんが、我國及其の環境は私の信念に従へば實に之とは全く正反對の立場に在つたのであります。既に世界一般に瀰漫しかけて居た經濟的軍擴を含む國家主義全體主義の反動は我國に於て頗る強烈ならざるを得な

かつたのであります。滿洲事變が此の轉機になつて居ることに、内外政治の交流上大なる歴史的必然性を認め得るのであります。

斯様にして、先づ第一に平和主義國際主義に基礎を置いた協調外交將又所謂追隨他主外交が清算されねばならなくなりました。元來私は國際聯盟を其の法理及び實際の兩方面より研究する機會を持つたのでありましたが、我國の滿洲に於ける既得權と聯盟規約第十條以下の規定との矛盾に喫驚を禁じ得なかつたのであります。想ふに我國の滿洲に於ける既得權は實に滑り臺の中腹に置かれた毯であつたのでありまして、動き出す事に決つて居り、引上げなければ滑り落ちるに決つて居たのであります。而て華盛頓會議の本問題取扱方と云ふものは例の九國條約等に依り之が引上を禁止したのでありますから、最早落下することに運命づけられて居たのであります。而て之に最初の衝擊を與へたのは中國國民黨の革命外交不平等條約撤廢運動を滿洲にも瀰漫せしめた張學良輩であつたのであります。此の時大和民族に課せられた問題は殆んど之を意識する者がなかつたのでありますが、要するに我國は經濟力物質力に於ては或は英・米の十分の一、二十分の一に過ぎずして辛うじて八大工業國の末席を穢す次第であるから、我國を五大國或は三大國に引上げて居る不權衡に過大な軍國主義精神力主義を切棄して、當然滿洲は之を抛棄し、情勢の赴く所朝鮮臺灣をも抛棄して世界歴史の舞臺より引退した瑞典、土耳其、西班牙等の列に伍するか、夫れとも亦青天白日旗を掲げた張家の政權に反撃を加へて規約第十條及び九國條約の桎梏を打破して、滿洲國に於ける權益を確保擴充し、滿洲國を誕生せしめ東亞安定主義を標榜して世界に於て第二位と降らざる三大雄邦の一つに躍進するの大犠牲を甘受するか、二者其の一つであつたのであります。而て既に國內經濟生活の逼迫、知識階級の失業、一般生活水準の低下、滿洲が我が國民經濟に織込まれて

ること等の國內情勢と相待つて、期せずして内政外政を通ずる最高國策の決定に際し帝國の選擇は積極主義の勝利に歸したのであります。軍國主義の助長、廣義國防缺陷巨綜合國力向上の要求は其の結果でありました。精神力至上主義と經濟至上主義、國家主義と自由主義、三、大雄邦の一つたんとする雄邦主義と敗戰主義、十割主義と六割主義、東亞安定力主義と米國極東平和機構奉獻主義、英雄主義と頹廢主義、自主積極外交と他主追隨外交、皇道主義と白人優越主義、現状打破主義と現状維持主義の間に立つて我國は果然最終的に此の前者の方を選んだのであります。聯盟の平和機構も米國の極東平和機構も粉砕され、苟安の平和主義、國際主義は影を潜めざるを得なかつたのであります。

次に自由主義に對する反動は久敷以前より世界的でありました。既に獨逸の *Friedrich List*、*das nationale System der politischen Oekonomie* は經濟上の自由主義が個人主義、原子主義、從つて四海同胞主義に墮し先進飽和國には妥當しても、一般には決して妥當するものでないことを喝破して居るのであります。余輩は日本のそれこそ一知半解の知識階級一般がよく此の本を熟讀せんことを希望致します。が此自由主義夫自身に於ても、ヒルグリーンは自由主義を再検討して、個人人格の完成を重しとし自由主義の内經濟理論の方面だけは之を修正し、政府の干渉を認め、一部の社會主義に接近し行詰つた英國自由黨を更生せしめたのであります。之等は要するに皆群團本能共同生存意思の目に見えざる支配性を語るものであります。夫に拘はらず我國の今迄の爲政者達は知識階級一般と共に自由主義に陶醉し、平和思想、國際主義より出發して反軍思想に到達し、經濟至上主義に合致する様軍國主義を剪除せんと敢てし、全く皇國の本壘を置去りにしたかの觀がなきにしもあらずであります。而て他面取殘されたる軍部特に其の一隊は中央政府一般と絶縁状態に於て單獨に滿洲に關する國策を復興し、精神力至上主義、雄邦主義、十割主義に合致する様軍擴に乘出す

と同時に、缺陷ある廣義國防、即ち産業國として我國の腕力に比例しない程低位にある經濟に關心を持ち、其の見地から壯丁を出す、農漁山村及び中小商工業者の救済を叫び、統制經濟をすら主張するに至つたかに觀察されます。前述の逼迫せる國際状態は又國內的に反映して、國家主義の勃興を不可避的ならしめました。諸々の國士的先覺者達は前述の爲政者達が一部大學教授達が無意識に拋棄した皇國の本壘に代つて占據したのであつて、其の先覺者達は軍部全體特に青年將校、又は之に近接せる人々であつたと見るのは僻見でありませうか。

第三に國軍編成の基礎は、誰が何と云ふとも全體主義であります。マルキシズムの分裂主義は國軍の基礎を根本的に動搖せしむるものであります。蘇聯邦が今日、彼の大軍國主義を築き上げたのは、マルクス主義が行はれて居らず、實は蘇聯邦と雖も、民族國家の本質に制約されて然るのであると私は觀察するものであります。大正の初年頃より、マルクスの研究が自由放膽的となり、實行運動に移る者をも生じ、入營者にも稀に赤の分子が現はれ、軍部が之を研究し始めたのも無理は有りません。軍人と雖も日本人たる基礎の上に軍人となつてゐるのであつて、自分や周囲の生活問題等にも國政一般にも關心するであらうし、廣義國防の領域に於て廣汎な政務を共同領域として持つことにならざるべからず。唯軍人の政治不關與の御聖昌を奉じて軍部の要求は寺内陸相の述べたる如く國務大臣を通じて閣内に反映せしむべきでありませう。正しく思惟した將校達は一君萬民の家族國家の精神に導かれて邪説をだん／＼克服して行つたでありませう。併し其の過程に於て群團本能と共同生存意思には勿論制約されますから、獨逸の用語を用ふれば國家社會主義我國の用語を以てすれば日本國家主義から到底逃避することは出來ず、從て彼等は此の主義を把握して彼の今迄の爲政者たる自由主義者達が拋棄した皇國右翼の本壘に確かに據つたものであります。此の把握が正しいかも知れないことは

今迄の國內情勢の経過が之を證明して居ると思ひますが、今後一層其の事が明徴になるであります。兎に角マルクス主義と日本國家主義、即ち赤と右との差は絶対であります。前者は民族否定、階級闘争、所有を否定しながらも掠奪後の共有又は分配を敢てせんとする貪慾なる貧困克服策であります。後者は之に反し、群團本能、共同生存意思に導かれ綜合國力向上の要求に應ずる全體家族國家主義、奉仕主義であります。此の區別は心眼の明なるものには誠に明瞭であります。軍部に示唆を與へた雑多な志士達の内には此の區別の出来ない者もあり、稀には殆んど片足又は兩足マルキシズムの中に突込んで居た者もあつたのであります。實に此の時であります、行政官司法官の内に赤と右と紙一重だとの嘆聲を漏す者があつたのは、而て現に此の赤と右との區別を克明にし得る指導者も或は缺如して居たかも知れません。而て或は赤の分子の内にかのニダヤ禍の例に見るが如く、右翼を思想混亂に陥れて之を利用して、例へば、クーデターを行はしめて、之を赤の革命に誘導しようとする者が或はないではなかつたかも知れません。ヒットラーは赤が思想混亂の方法により右翼を傀儡として使ふ戦法に出づる傾向なきや否やを調査報告する様外交機關に命令したと云ふ事があります。若し皇國に於ても、多少右申す如き傾向があつたとすれば、自由主義者に依りて棄てられた皇國の本體が同時に一少部分でも赤の分子に依りても占據せられはしなかつたか疑問になつて來るのであります。多分茲に最近の思想混亂や、痛恨事たる不祥事件の一部の原因があるものと私は觀察するのであります。依て赤と右と紙一枚だと云ふて放任して置かないことが、赤と右とを截然區別することが皇國の全愛國者の重責であるのであります。

最近の議會に於ける齋藤隆夫氏の有名な演説は一面、實に檢事の論告として正しくもあり、又最上の出來榮であつたのであります。併し此の議論は其の基調を自由主義に置いてをりますから、内政と外政と共に逼迫して交流作用を起し

て居る今日に於ては、他面足りて居ない點があります。其の事は他の兩三名の議員からも指摘せられて居る通りであります。此の議論の雰囲気から殆んど反軍思想とも云ひ得べき言説を爲す議員が續いて現はれて來たと見るは僻目でありませうか。私は小乗的肅軍即ち嚴罰と軍人の政治不關與元より必要でありませうが、眞正の拔本塞源の大乗的肅軍は同胞が皇國の使命に生きたる我國の内外の時局を洞觀して、萬人が「國防を國防する」精神になつた時に、全國が一刀一心流の劍聖の立會の姿勢を取つた時に、始めてよく達成せられる事と信するものであります。私は後に述ぶる如く、雄邦日本を目指して飛騰せんとする我國の非常時は、眞に空前絶後であつて、之から先多年に亘り多大の犠牲を要求するものであると存じます。若しそれが軍人に向つて生還を期せざるの覺悟を要求するものであるならば、軍人は一般同胞に向つて奢侈的消費に向けられる金銭は勿論、萬止むを得ざれば有益生活費の一部すら、之を削いて國家に向つてせよと要求する権利がないでありませうか。時局認識の鍵鑰は正に茲に在るのであります。

今迄内的苦闘を續けて來た大和民族は自由主義、社會主義の上に超刻して漸く心眼を開いて前途を眺むる様になりました。其處に認識されるものは廣田内閣の聲明にも明なる如く外政上東亞安定力主義、即ち私の所謂皇道宣布の雄邦主義であります。之に應じて内政上は肅軍、道義國家、軍擴、高橋財政の修正、之を要するに庶政一新であります。昂揚せる新日本の巨艦は帆を解いて出港したのであります。非常時の洶湧する波濤を蹶つて奮進する艦は方向轉換を許さない様であります。内部の一切の機關は全速に適合する様に廻轉せねばなりません。腐蝕せる心棒やゼンマイや壊れ落ちる外政方はありません。外政と内政の交錯は誠に機微な關係にあることが、これで首肯せられるのであります。

私は滿洲事變前の我國の地位を滑り臺の中腹に置かれた筈に比したのであります。今日の日本は之で靜止して居る

でありませうか。自由主義者は云ふに及ばず兎角靜的にもを見様とする現状維持論者は非常時は存在しない、日本は安定して居ると見たがるものでありますが、私は之に大なる疑問を抱くものであります。

なぜならば第一に廣田ハル交換公文の内には、我國の滿洲、北支、北樺太に於ける鑛山利權、西伯利亞沿海の漁業權等をも掩する大陸發展策と米國の不承認主義との間の矛盾、十割主義と六割主義との對立から來る海軍軍縮秩序の解消及び軍擴競争は織込まれて居るとは一寸思はれないからであります。經濟的要素や心理的要素やの作用で、日米戦争は決して孤立して生起はしないと私は見るものでありますが、さうであればある程、此の際安易な氣休めを云つて、國民の群團本能を引緊めずに置くことが、高等のステーツマンシップであるかどうか、私は聊か疑ふのであります。英國すらも支那援助の法衣に、抗日の甲冑を包み兼ねて居るのであります。

次に滿洲國は之を防守せずしてよいではありませんか。第三インターナショナルの普遍的革命戦はレニンの世界革命は東方に於て決すとの言葉にもある通り東洋に於ては民族主義戦争の形式を採るのでありますが、其の達成手段として蘇聯は更生せる軍國主義と思想戦術とを有して居ります。本來思想戦術に於ける彼等の狡智は猶太人の傳統を繼いで變化の限りを竭し、我がインテリの一部などは彼等の指頭に嘗て踊らされ、今日でも群團本能に弛みを生ずる様な際さへあれば、踊りたいと待ち設けて居るのであります。昨秋第三インターナショナルは自由主義、社會民主主義、第二インターナショナル、國際聯盟と和して、銳意ナチス、ファッショ其の他國粹主義の牙城にのみ迫らんと決心致して居るのであります。其の際滿洲國境に尙多數の匪賊等を算しますのは何と云つても深憂であります。加之蘇聯の第一次第二次五ヶ年計畫を経て更生した軍國主義は總兵力六十萬、飛行機四千臺、戦車四千臺を有し、其の内今日極東に於て二十

五萬の兵力とゲベウ數萬とを維持し、超軍爆機百臺、其の他の飛行機八百臺、戦車八百臺、以上を保有し。蘇滿國境の三地帯即ち後加爾地帯、中部黑龍江地帯、沿海州地帯にトチカ陣地を築き、浦斯德に潜水艦一説に三十隻、一説に五十隻を浮べ、外蒙の守り、即ち西伯利亞の守りと考へ、外蒙と同盟條約を結び、七萬と籌せられる蒙古兵を指導強化して、之を自家藥籠中に收め、之を攻勢據點として北支に殺到せんとし、更に新疆より陝西に亘る紅軍と連繫して居ります。獨逸等の専門家は彼我の武裝に於て先方が優るものあるを認めて居ると聞いて居ります。而て不幸にして斯る情勢は永遠の眞理である支那政府の歐米依存主義、遠交近攻主義を煽る虞れがないでもなく、支那側スポークスマンの語る所に依れば支那紅軍と中央政府とは抗日の統一戦線に一致し、中央政府は北支地方の南端一線に兵備を配置し、中支南支の海岸一帯、中央奥地、其の背後地に三段の戦線を擴げ、トチカ陣地を設け、國際戦争近きにありと待ち設けてゐることとであります。然らば我が政府當局が此の情勢に關して重大關心を有すると聲明して居るのは偶然ではありません。如何なる視角よりするも、滿洲事變後の日本は未だ靜止せりと評し得ないのであります。

左様な次第で滿洲國は防守されねばなりません。露國側の兵備強化に伴ひて我國の兵備強化も行はれて居りますのは必然の結果であります。我が北支駐屯軍も同時に幾分強化されました。蓋し外蒙に於ける露國の地位の強化と夫との合作により紅軍の北支殺到が支那軍の待機姿勢と相俟つて實に一大脅威を構成するものなるが故であります。斯様な事態は忘れてならぬ豫防戦争の勝れるにあらざるやを思はしむるものであります。最早左様な時期は一應夙に通り過ぎたのであります。然らば私共は戸水バイカルと云ふて空想家の如く扱はれた一學者が、實は最も覺醒せる人でなかつたかどうかを夙に過去に於て再検討すべきであつたではありません。自由主義は經濟至上主義となり、延いて敗戦主義に墮す

るものでありますから、とても肇國の理想に胚胎する天命を覺ることは出来ません。桂、小村公侯以降、多少でも我國の宿命や歴史的動向やを把握して之に寄與したと目すべき輝く政治家を擧示し得ないのは遺憾の事であります。田中首相は濟南出兵、西伯利亞出兵等に大なる役割を演じて居りますが、其の抱懷した大陸政策は知るに由なき次第であります。但し雄圖の片鱗は之を認むるに私共吝かであり得ません。若し世の中に長期死闘戦を豫防戦争となし孤立戦を狩獵戦となす政治家あらば彼こそ其の指導する國民の感謝を値ひするでありませうが、自由主義や議會政治が斯の様な俊傑をして事を爲さしむるに適するかどうかは餘程研究の餘地もありません。政治の要道は豫見して準備し、又は解決することあります。本邦が滿洲事變直前の姿勢で安易な敗戦主義の道を歩んだならば其の落行く先は知れて居ります。天命を覺つた今日の危険な道を進んで、若し莫須有の蹉躓に遭つても、我々は我々の歴史を刻印する計りでなく、我々の志を國民的理想を生かす事となり、ケマルパシヤの如き者の蹶起を促すこととなり、其の結果は決してより悪くはありますまい。斯るが故に當局は自由主義者の議員から外交工作を強化し、國防に關する政策を轉換せよとの要望を受けまして、目下の場合夫が不可能であり、武装的平和こそ今日平和を贖ふ唯一の方途であると云ふ風に答へて居るのであります。此の武装的平和、特に夫が軍備競争を伴ふ場合に私は之を潜在的戦争と呼ぶのであります。此の意味に於ては遺憾ながら日露戦争は來て居るとも云ひ得るのであります。願くは夫にも拘はらず日蘇國境劃定委員會や紛争調停委員會が其の效を奏して我が在滿軍備に數倍する過大なる露軍の撤退を克ち得て此の壞亂を未到に拂拭して貰ひたいものであります。夫が東洋平和安定力たる我國として試むべき第一の工作であります。併し此の工作の爲めにも軍備の補強は不可缺であります。其の際南進論はあり得ても夫は大きな聯合戦線に打當る惧もありません。南進は精々

經濟的であり得るに過ぎないのであります。

繰返して申しますならば東亞安定力政策と云ふ退引ならぬ我が抱負に支障をなす事態は二つあるのであります。夫は支那論策家の所謂西方の侵入 (Intrusion of the west) があり、三國干渉後利權獲得競争時代に入りて、支那が邊疆闘争地域の形相を著しくし、今日でも支那側の歐米依存主義は之を清算し去ることが出来ず、華府會議の支那觀が擬制に過ぎなかつたと云ふ事でもあります。次に日本海は名のみであつて露領の武装特に潜水艦空軍根據地が我方の脅威となる點でありまして、之等は何れも第一義の政治的軍事問題でありまして、其の望ましき解決に伴ふ成功の經濟的意義は左迄大きくは估價され得ないのでありますから、露國國力の見損じや孤立下の持久戦などは避くべきであります。又一部の突貫論者即ちダイハードは皇軍はなんでも正々堂々と進むべきだと申されるさうであります。我皇軍は古來智術を尊重し、戦の始めにも中頃にも終りにも之を併用することになつてゐると考へます。尙外交と國防の一元化と云ふことを公理の様に世間では申しますが、私は國の存立を期する所以の方途を國策と云つて、國防や外交は右の方途を助成する手段であると考へるのであります。故に體である所の國策は二つあつてはなりません。其の用である外交と國防とは虚々實々時に矛盾する様相を呈しながらも國運の達成に競合すべきものと考へます。此の意味に於て國防と外交とは二元で宜敷く、何の道百尺竿頭一步を進めて露國の不可侵條約の提議などは受容して置いた方が安全感を確保するに適したと今も考へて居るのであります。

斯様に慢性化した超非常時、武装的平和即ち潜在的戦争の雰圍氣中に在りては先づ群團本能が生起し軍備が肯定され擴大され、世界に於て第二位と下らざる雄邦に相應はしき大陸海軍、即ち十割主義が容認されねばなりません。然るに

勿論國力資源特に産業經濟力に於て英・米の或は十分の一、或は二十分の一にしかず、辛うじて八大産業國の末席を穢して居る我國は前記の十割主義との矛盾に苦しまざるを得ません。此の矛盾が目下六億八千萬圓の赤字公債となり、近く三億五千萬圓以下の増税及び八億乃至十億位の赤字公債として表現されんとして居ります。大衆課税を避けて右様の増收を圖り低金利政策を行つて公債消化力を増し、財政を聊か非常時態勢となすと同時に米穀自治管理法蠶繭處理法、肥料統制法案で農漁山村を更生させ、退職金積立法案で聊か労働者の地位を安固にし、中小商工業者の爲に金融保證會社を設立することが要求せられるのは皆な共同生存意思の要求する所なのであります。經濟は重要なも經濟至上主義をとれば世界第八位の國として満足し東亞の一小邦とならなければなりません。夫が許されんから何人も夫を肯定しないから雄邦主義を採用した。經濟單位の過小なることより來る矛盾逼迫は覺悟の前と云はねばなりません。富有階級に屬する者も必しも尠くはありますまいが、我國の大衆は最低生活水準の一線を出没して居ります。此の状態に於て有無相通ぜしめんとする各般の補助政策統制手段は錯綜混亂時々矛盾をさへ曝露するでありませうが、之は外部への氾濫を要求する内部の生命躍進の證據であります。豚の様な太い腹を持たないからとて鋭き爪牙を廢してはなりません。猛獸は實に飢を細りたる腹を持つて居るのであります。恐らく帝國が世界特に東亞に行使せんとする發言權ほど大きいものはありません。各人の生活水準の最低限度に近く行詰つての生命破壊の記事が我國ほど豊富な國はありますまい。此の驚くべき矛盾から、我が政治家は一つの精神力學を編出すことを要求せられて居るのであります。

峯國の理想に燃えて皇道を世界に宣布せんとし、尠くも東亞安定力に相應しき雄邦たらんとする日本は西班牙や瑞典等歴史の舞臺を退いた諸國の列へ下り行く途を拒否致しました。此の若き血に燃ゆる雄邦日本は漸く十八歳に達したの

であります。併し私の目に映する彼は八寸齒の下駄を穿き、つま先に立つて最後の高き一階段を跳越へんとして居るのであります。唯今の體勢は其の仕事に到底適應致しません。雄邦日本としての自己確立の爲には彼は遠くより走り來つて跳躍の絶對緊張の寸分隙のない體勢を取らなければなりません。卑見に依れば之が今日要求せられる庶政一新綜合國力最大限發揮の根本理由であります。而てヴィクトリア女王朝下の英國なればいざ知らず、今日我國の萬人に妥當し何人も逃避することの出来ない指導原理は前述の理由に依り日本中道全體國家主義—汝自身を知れ、何事も度を過すなどの綜合原理を織込んだ—でありまして各人は先づ第一着歩として其の奢侈的消費を持つて全體に朝宗することを、國家に同向することを要求せられて居るのであります。

(昭和十一年五月二十二日於霞山會館)

第五章 外交戰略論と外交大學

本稿は決して戲筆ではないが、元旦試筆の如きものの心算である。切つて干した定説の敷衍でも既に下された判斷の演繹でもなければ、國際情勢の再把握でもない。唯だ既知の世界と未知の世界との水天鬚髯の境に立つて前者の端から後者の内を聊かでも覗いて見ることを意圖したに過ぎない。外交戰略論と云ふ文字には勿論異論があるに相違ない。外交戰略論でもしつくり來ない。但し信夫淳平博士は其の著「外政監督と外交機關」に於て外交上の戰術又は戰略及び戰果に就て語られ、生活戰線とか就職戰線とも云ふから外交戰略論と云つても左程可笑しくはないかも知れぬ。應用政治

學なる文字に倣つて應用國際政治學と云ふのも或は穩當であらう。尙ほ外交と云へば狹義では外交交渉の技術の方面を指す様であるが、廣義では高等政策とか世界政策とか云はれる立國策の涉外面をも含むものの如くである。滿洲事變後に於いては論策家は不知不識の間に多く後者の意味に外交と云ふ文字を用ひて居る様である。多交と國防との一元化と云ふ様な場合には、民族國家存立の方策の涉外方面を直ちに指稱して居るものではあるまいか。

クラウゼウィツは戦争の實行と政治とは一致し、將師は同時に政治家となると云ひ、孫子は百戰百勝は善の善なるものでなく戰はずして勝つことを禮讚し、上兵は謀を伐つ、其の次は交を伐つ、其の次は兵を伐つ、勝兵は先づ勝ちて然る後戰ふと云へるが故に、余の設問は決して奇異でない。

狹義又は卑近の意味の外交なれば、今迄の外交官採用試験科目に見ゆる如き國際法、外交史、外國語の一部の知識に加ふるに英佛文の公文例、楮てはサトウの外交慣例論を以てすれば足り、カムボンの外交官論、チユセランの大使オットー・フォン・モリスの如きは既に問題の官階に分け入れるかの如き感がある。

恐らく今迄大體採用試験であつた外交官試験は、教育梯子の最高のもものと見て大過なかるべく、此の梯子を上り切る青年は天下の俊秀と客觀的に認定された者共で、良い素材に違ひなく、官界の門戸閉鎖が或る程度迄維持は認められてゐる事實の合理的基礎となつて居る。是等素材の採用試験と云へば前述の如く語學、國際法、外交史等五、六の科目のほんの一部であるとすれば、是等の者が眞に國家有用の材となる迄には餘程の鍛冶研磨を必要とし、其の結果は彼等の視野や智能の内容を根本的に一變する程度に達せなければならぬと思ふ。

實際に於いて帝國政府は官補達外交官の卵子の養成には意を用ひ、見學や留學やの機會を與へ、且つ國際聯盟の成

立、會議外交の發展に連れ、特に會議外交に適する者を陶冶する爲めに賞讃すべき、然しながら平實な努力を續けたが、斯かる人物が輩出する頃になつては日本が撞いた新國際政治動向の曉鐘で左様な人々よりも異つた人物が任用になり、外交機關の機能に付き批評を聞くことも多くなつた。國際聯盟は全く無力となり、大陸別の國際結合が視野に入り、ムツソリニの四國協定は云はずと知れた歐洲重役會議ヴェルサイユ會議の登場を意味し、其の後の發展は人の知る處の如くである。以上の事實は何を語るかと云ふに、著しく形式化されてゐる人間の學問特に人文科學の尋常又は高等の常識の範圍内で因循姑息のことをして居る間に、人間の個別的又は集合的な生命の躍進が右の常識の埒外に飛び去つて仕舞ふことを物語つてゐる。

狹義外交の定義を採用するならば、各般の政務や事務の實質を掌握する機關が決定的發言權を持つのは當然であつて、通商問題通商條約には商工省が指導權を持ち、軍縮問題軍縮條約には軍部が決定的發言權を持ち、文化問題なれば文部省、文通通信の問題なれば鐵道省や逓信省、内務行政の問題なれば内務省が決定的發言權を有するに至るに相違なく、外交機關には唯だ旅券の發給等僅少の事務が残されるに至るに相違ない。其の際尙ほ漫然と形式的意味しかない平和機構や、不戰條約の仲裁裁判の問題だけが外交機關に保留されるとすれば、夫れは夫れ自身よいことではあるが、技術的の限られた視野から此の問題に對する爲め其處に危險も伏在するのではあるまいか。筆者は嘗て「國策の具としての平和運動」を説いて見たのであるが、斯かる考へ方は西洋思想の一步上に出ない俚耳には入り難いので、過去に於いて追隨没我の外交が行はれたか否かの問題は暫く措き、兎に角外交行衛不明を嘆する聲が聞かれたのも、其の因つて來る所があると云はねばならぬ。建部博士は、廣義國防を肯定され世の部分觀一面觀を笑はれ、廣義の教政民政財政を唱導さ

れてゐる。廣義國防を云ふならば何故に廣義外交を唱導し得ないか。國策の具としての戰爭を云ふならば、何故に國策の具としての外交工作平和軍縮運動を云ひ得ないのか。

他國の外交機關はいざ知らず、我國の外務省は滿洲事變後何等か覺る所ありたるにや調査部を設くるに至つた。夫れは元來考査部と云ふ一層大なる野心を包藏した案の變形で、實質は外交參謀本部と云はるべきものであつたと仄聞する。今行政機構の全般的改革が俎上に乘せられ、國策統合機關や經濟參謀本部等の考案せられるに當り、我が重要な外交機關の陣容が伸びず、反て通商機關に於いて退嬰せんとするが如きは外交に興味を持ち、外務省の友人である者に取り誠に遺憾の極みである。事の茲に至りたるは狹義外交の殘孽に立籠る結果として外交戰略論と外交大學との理論が把握されて居らない爲めではあるまいか。筆者は嘗に外交參謀本部や外交大學は附設されるれば夫れでよいと云ふのではなく外交戰略論と云ふ此の古今東西の經驗から歸納された民族の生命を支配する歴史的根本法則の一束を以て、外交機關全部が鼓舞されねばならぬと主張するものである。

最近十五年間の伊太利の時代を劃し、其の個人名を以て其の期間の歴史をまとめて居るムツソリニは、最近「吾人は世界全部を敵として其の面前に於いて日常りのよい土地を克服した」と豪語した。世界十八億の人間は勿論多分相當多數の伊太利人迄が不正でもあり不可能でもありと考へて居たことが、短時日の間に一應成就されたと云ふことは何事を語るものであるか。世界十八億の人間は確かに紙上の公式を掴んでゐた。併しムツソリニは天・地・人三才、特に自然の一部であつて道德訓を奉じたり、敬神の念に燃えたり、「胃の理想」を有したり、胃の現實に動かされたりする人間界の理法の全部の總決算を把握して居たのではあるまいか。木は實に依りて知らると云ふから、斯く判定する事もあながち

無理ではない。太平洋の水は幾程あつても其の内に動的の力はない。華嚴の瀑には夫れがある。世界史や政治外交史は著しく此の動的の力の所産である。價值判斷の問題は暫く措き、現状維持國は概して其の成功した場合にも歴史を空白にするに過ずして、彼等は實に頽廢するより外に歴史に寄與する積極的方法を持たない存在であるとも云へる。或は今後の歴史は雄邦日本や、伊太利や獨逸の書くものであるかも知れぬ。今日茲に外交戰略論の稿ある所以である。

翻つて我國に就いて考へるのに、吾人は目今非常時の可成の重壓下に生活して居る。滿洲事件以來同事件費及び軍備擴張費は海陸共併進的に巨額に上り、赤字公債は殆んど金融市場の許す最高限まで發行されんとし、公債は百億を超え我が財政は増税と同時に有限な形式的な健全財政を乖離せんとして居る。此の際非常時克服に要する經費の全額は幾千であるかを見定めて財政計畫を樹てて貰ひたいとの黨人の要望は當然であるけれども、大藏當局に依りて充足されさうもない。明治大帝は日露戰爭直後戊辰の詔書を發し給ふたが人々は多少の繁榮に酔うて勝つて甲冑を呪詛し始めた。嘗て世界大戰中及び其の直後の好景氣時代に於いて帝國の倉庫が溢れて居た時代に於いて此の四、五年間に又は今後は是非必要とされる如き諸工作を完了し得なかつたものであらうか。我國は東部西伯利亞出兵に依り、唯だ該地方の地理風俗を學んだだけであるが、若し國際間に例の多い無防備中立地帯と云ふが如きものを設定するとか、或は夫れよりも一層適切な各般の措置を講じて東亞の安定に資して置いたならば、新誕生の滿洲國の東西に於いて思想戰と軍擴戰との脅威を受けずに済んだのではあるまいか。人生は一面確かに流轉する。恒常の法則は流轉すると云ふことと云ふことと極言する者さへもある。然らば五年か十年間か半世紀間の事を人間が科學的な遠見先見の明を以て略ぼ豫見しないのが反つて不思議である。日本の大陸政策と米國の盲目的なる勢力範圍否定、支那の獨立主權保障と云ふ非現實的なる感情的

理想主義の假面を着た利己政策とが不兩立であると假定し、否假定ではないベツプア一等に從ひ絶対に不兩立だと認定し、滿洲事變の翌日に自主積極外交に轉じ、「米國！貴様勝手にせよ」と啖呵を切るべきであるならば、日露戦争前は兎に角五年前とか、十年前とか、二十年前とかに構へて左様な啖呵を初り得べく、又切つてよかつたではあるまいか。茲に外交戰略論（應用國際政治學）の存在理由がある。若し一般外交戰略論と其の基礎の上に日本應用外交戰略論とを編出することが出来るならば無窮に續く日東帝國の將來に向つては今迄の様な違算——若しありたりとせば——を免かれることが出来る。幸に外交官試験に依りて英才を抜き得ても、彼等の貧弱な形式一遍の知識に語學位を注ぎ込んで能事終れりとするならば、彼等と雖も氣飢る無内容な社交の内に、萬一にノーチー・ポイと化し終る虞なしとしない。斯様な場合には嫌でも開戸開放人才自由登用の叫びが自然高くなるなさを保せないであらう。尙ほ日本でも外國でも偉大なる外交政治家は往々職業交際官以外の出である。

筆者等が大學の政治學科に學んで居た頃には、學生等は大體實體法の主要なるものと經濟財政の學とを併せて修得した。其の中には尙ほ政治學や、政治學史や、行政學や政治史や憲法學序論等、時として中途半端の似通つた重複する科目があつた。夫れにも拘はらず自分には政治學と云ふ學問のデシデラタは、其の研究の對象範圍と云ふが如き問題は之れを把握することが不可能であつた。併し今迄自分が讀み、經驗し、且つ考へた所に依れば、政治學と云ふものは社會的動物の上級將た又下級の群團生活に於ける淘汰作用の内容及び形式の双方に關する原理の探究を對象とすべきものはあるまいかと一應思はれる。従つて我々が大學の政治學科で學んだ君主制と民主制、立憲制と獨裁制の利害、三權分立主義と云ふが如き問題即ち憲法學の序論等で扱はれる問題は前述の形式政治學の一端に觸れて居るに過ぎないのであ

つて、今まで實質政治學は全然把握されて居らない。ヒットラーは最近のナチス黨大會に於いて「所謂デモクラシーに依りて眞正の國家が成立したことがあつたらうか、一切の偉大な帝國はデモクラシーの爲に分裂崩壊し去つたではないか、デモクラシーこそは國家没落に至る確實な道程である」と述べて居るが、此の文句は明瞭に形式政治學上の觀念に向けられたものであつて、實質如何を問はず世人は獨伊等の現勢を呼んで民主制に對立する獨裁制となして居る。所が焉ぞ知らん、實質政治學から見れば超大衆的獨裁制、九十八パーセント大衆的の獨裁制が世の中にある。過半数の原則さへも實質的には全會一致を見出す爲め的手段である。見よ在野反對黨に投票した人々も制定法に依り等しく拘束されるではないか。十五、六年前ムツソリニは自由主義者の政府が即ちファクタの政府が國家的に見て國家が國家として存在する以上是非共爲さねばならぬことを爲し得ないのを見て取つた後、國家に對する謀叛者資本主義とサンヂカリズムとを組合國內に收容せんとし超大衆の力で之れを實行したのである。ヒットラー一派は關つて來たには違ひないが過半数から前例なき多數最後には準全會一致に進んで居る。指導者原理と云ふものは天然の貌の人間群團に本質的な民主主義であるとも云ひ得るので、其處に強力國家誕生の素因がある。勿論カーライルが經濟學を「陰氣な科學」と呼んだ様に、實質政治學は一層 dismal science であるに相違ないことは之れを認めるが、皇道國家と雖も國際實質政治學ならば構へて其の研究を促さねばならぬと思ふ。其處で筆者が試みに此の余輩の實質國際政治學に定義を下すならば、夫れは合成人に合理的に可能なる最善の目的を賦與し、其の遂行上の捷徑を發見し、時と處とに於いて該合成人をして其の精神力及び物質力の最も效果的活用を爲さしむる所以の理法を究明するの學である。此の實質政治學が所謂生物學的^{生物学}政治學と會通する多くの點を有することは云ふ迄もない。

佛教も現世を直ちに涅槃とは見ず、セネカは人生は即ち戦ひそのものと云ふ様な事を云つて居り、村上中佐は平和は戦争の有力なる一原因なりとか、戦争は平和の一原因にして平和は戦争の一原因なりとか記述して居る。戦争と平和とは外観を異にするも實質は鶏と卵との關係の如く、戦争の時と雖も人は必ずや或る平和的安定民族的安樂を意圖して戦つて居り、平和の時と雖も或は蓋然的或は具體的衝突を考へて所謂武裝的平和即ち潜在的戦争を戦つて居るのであつて戦争と平和とは本來一體にして區別がない。従つて戦争は他の手段を以てする今迄の政策の繼續となるので、斯くて主として所謂平時及び平時より戦時に移行する時期にも云ふ外交は平時戰略であることの本質となすべきで、従つて外交史特に近世外交史は民族國家の智的生存競争——力學的生存競争と表裏を爲す所の——の年代的記述に外ならない。此の外交史の記述を若し學問的に觀察して見るならば、或は拙劣或は巧智な應用平時外交戰略即ち英國外交戰略論、佛國外交戰略論、日本外交戰略論、米國外交戰略論等の交錯實施せられた其の綜合的結果であると認識し得るに相違ない。萬國應用外交戰略論なる觀念が成立し得るならば、更に其の基本として將た又一般原理としての一〇般外交戰略論が成立し得べきである。

獨逸の外交史に於いてビスマークは普魯西を小獨逸帝國——ナチスの所謂大獨逸國に對す——に高め、序で此の獨逸を中欧の植民的大帝國として世界に雄飛せしむる迄には成功した。其の後に於いて一九一四年夏迄に、獨逸政府が壤地利政府を違算なく指導しさへすればあの時戦争にならずに済んだであらうが、兎に角ウイヘルム第二世の治世は戦はずして負ける外交に焦慮したから、ビスマークの功業の一半を泥土に委した。ビスマークの成功せる外交戰略論、カイゼルの味附を附けた外交戰略論以上に恒久の超越的價値を持つ獨逸外交戰略論と云ふ完全な一體系が編出されて居たな

らば、獨逸はあの様な浮沈を経験せずにあの様な暗礁に乘り上げずに向上發展の一路をのみ辿り得たであらう。近時獨逸指導者の爲す所は活殺自在或は放膽或は戒慎慥に外交戰略論の眞諦の一部を悟得して居る様に見える。但し艱苦に遭逢して練れて來た結果であるが果して眞正の恒久常勝を保障する一大體系をなしたものであるかどうかは之れを今後に徴せねばならぬ。

筆者は滿洲事變を以て本邦が瑞典西班牙等の二等國に退却するか、名實共に世界の一大強國として如何なる強隣の前にも膝を屈せず、世界で決して第二位と下らない東亞と西大洋とに跨る雄邦として永續するかの問題に於いて日本民族が最終的に後者を選び、而して一見一應は之れに成功した事件の發端をなすものであると觀察するのである。然るに此の事件の勃發する以前に於いて我國の外交工作は全く瞻略を缺き、前者即ち二等國に退却するかの様な準備に傾いて九國條約に縛られて居た爲めに滿洲事變の勃發と同時に聯盟脱退、スチムソン主義の抗議の不迴轉の確立——米人をして云はしむれば——招致するに立ち到つて居るのである。余の昔日よりの信念に従へば自由主義外交は社會主義外交と等しく對米對支外交に於て敗戦主義に墮するに決つて居り、併も日本が全然無産國ではなく朝鮮や臺灣を保有して居る爲めに、我國は滿洲より退いた後に必ずや臺灣や朝鮮に於て戦ふ事を餘儀なくされ、結局絶望的戦争を強いられるに相違ないのである。若し完全なる睿智を以て一貫して我國の宿命に眞正に妥當なる理想的外交戰略論が的確に把握され應用されて居たならば、斯くの如きことは避け得たであらうのみならず、外交不安も非常時も視野に入らず、我國は希望に輝く努力に向上發展の一路をのみ辿り得たであらう。實際今日の日本は外交措置が聊かも講ぜられなかつた場合に比して幾分なりとも地位が改善されて居るかどうか非常の研究問題であり、外交不安非常時の叫びも高いのであるが、之れ

は右の理想的外交戦略論より乖離し來つた程度に正比例して然るのである。我々は國防外交一元化の聲を聞かされて深憂を抱くこと既に久敷い。邦人の一部は大陸發展の主たる妨害者さへも今以て認識し得ず、時節柄當然ではあるが、國民的自己中心主義の強き餘り徒に四方八方に當り散してゐる。併し蒸氣が仕事をするのにワットが之れを捕へた様に能ふ限り之れを狭い一點から噴出させる時ではないのか。我國の多少の孤立は從來大勢順應に墮して聊も自主的世界政策の背景なきに、突如として餘程特色ある自主東亞政策を採用した點に存する。所詮東亞も亦世界の一部ではある。滿洲事變を歴史的開展の一環として豫見した程の人は誰でも、風に舞ふ羽毛の様に時流に沿うて徒らに狂奔した時に「吾等の後に洪水到らむ」と匙を投げ、場合に依つては彼の二十一ヶ條後の帝國のカノサであつた華盛頓あたりに又赴き兼ねない連中と斷然異りたる道途を選定して居らねばならぬ筈であつたし、また斯様な道途を不完全ながら想定した者は居た筈である。其の指標指針の完全なるものが日は下りかけたが即ち外交戦略論に外ならぬ。外交戦略論は國防外交の一元化と云ふ様な問題の提起されることを拒否する。國策は日星の如く國防と外交とは散開して虚實を竭して合作せねばならぬ。愛國者の長大息を禁じ得ないことは今に至るも尙ほ日本應用平時外交戦略論が把握されて居らないことである。併し其の前に豫め一般外交戦略原論、應用實質國際政治學が把握されねばならぬ。所謂平和論者の目から見るならば、外交戦略論などの成立する餘地はない。彼等の立場——一面的には勿論正しい——より見れば國際關係は國際法及び國際條約の律する所に係り一國は之れに證據して行動すればよく軍備が必要なる惡の存在である如く外交戦略論と云ふが如きことは邪道の學問である。けれども斯様な認識の不充分にして忽ちに破綻を來すことは平和組織を設定すると云ふことが戰爭組織を設定することであり、武裝的平和が慢性的戰爭と一致し、軍縮運動なぞが時として眞正の恒久

平和運動としてよりは關係の優勢獲得の外交戦略に過ぎざるの事實に依つて充分に明瞭である。

古今戰史の研究から戰術戰略論が誘導される様に、外交史の深い横の研究から外交戦略論が今迄に誘導されて居らないのは何故であるか。實際自分の調べた限りに於いては世界中に無用の書は山積して居ても外交戦略論なる名稱の著述は一つも見當らない。想ふに夫れは本問題に對する回答が外交史の内に一應は伏在して居るとは云へ、夫れが同時に外交、内政、國防、戰略、經濟等の諸問題の中間領域にも跨り其の研究が頗る困難なるに職由するであらう。併しクラウゼウイツは既にナポレオン戰爭の研究から彼の餘りにも有名な戰爭論を編出した。戰史戰術の研究は陸海軍大學の主たる存在理由で、日本の參謀本部や軍令部は既存の戰略論を發展せしめて日本戰略論の研究に餘念ないものと想像する。實際世人がフアツショとかワツショとか狂噪曲を奏する非常時、即ち平戰時移行期に於いて實行されまた實行されんとする事柄は、藤井藏相の軍需工業利得税より所謂馬場財政將た又庶政一新の行政機構改革に至る迄數十年一日の如く陸海軍大學や參謀本部や陸海軍省で研究に研究を重ねて大體定説に到達して居る退引ならぬ事項の綱目の一部であるらしく、咄嗟に五、六の人を集めて組織する政府が萬一の場合には軍部案實行の技手になるのは自然の傾向ではないか。知識階級の任務は主義に立籠つて解り切つて批評をするよりも無限大の眞實の中心を掴んで建設案を出すことにあるのであるまいか戰略論と云へば國際生活に處しての集合人に生活力を賦與するもので、個人道徳とは或は不兩立のことがあり得るかも知れぬが、人生の現實の全體を正しく把握せしめるに役立つものである。されば帝國主義の六韜三略であるクラウゼウイツの戰爭論をレニン等が詳密に研究したと云ふことは嘘の様な眞實であり、多分日本に於いても此の書の内容を不完全ながらも大衆雜誌に紹介したのは日本共產黨の比較的先覺者福本氏であつたことは注目に値ひする。勞

働者無産者を動員する爲めにと云ふ目的觀を離れてはマルキシズムは無意味である。夫れ以外に於いて内國戰爭の戰術は赤の分子と雖も人類自然の法則を捕へた戰略論に従はねばならない。村上啓作中佐は戰爭要論中に社會主義に就いて「茲に注意すべきは社會主義は國家の強制力を最大限に行使せんとするものにして、此の點に於いて社會主義國家は英・米・佛國人等の理想よりも寧ろ戰前獨逸人の主義に近似せることはなり」と述べて居るが、如何に此の立言が第二インターナショナルに屬する社會民主黨の人々の考へ方と異なりて現在の露・獨・伊の現實に即ち適用を終りたる後の社會主義に吻合せることか。戰略論は決して軍人のみの研究事項であつてはならない。

東洋には孫子を始め兵學七書と云ふ様なものがあり、正史と如何に關連するかの問題は暫く措き、春秋戰國策、漢楚軍談、三國誌、水滸傳等の面白い著述がある。是等と西洋の戰略論、今日でも有效なマキアヴェリズム等とを集大成するならば、既に相當洗練された東洋戰略論が産るべき筈であり、或るは夫等のものは吾人が知らない丈で日露戰爭等の經驗も織り込まれて完全なものが出来上つて居るかも知れぬ。兎に角一應戰略論を會得した見地から詳細な外交史を縦に横に讀み下して見るならば其處に何等かの新發見がなされるべきではあるまいか、孫子も百戰百勝は最善のものでない、戰はずして勝つのが最善であると認めて居るのであるから、多分平時戰略論即ち外交戰略論を容認して居たのではあるまいか。

從來の外交史は多くの場合は史眼なき事實の記述を以て終始して居る。之れも歴史の面白い研究の一方面であらうが斯くては體を得ても用を爲さず、我等の國際生活と風馬牛相關せざること桃太郎の鬼ヶ島退治談と等しくなるであらう尙又外交史は兎角事件の表面に浮び出でた事實丈を見る傾向がないでもない。併しピスマークの三國同盟でも二重保障政策でも、小村外交の日英同盟でも、モンローのモンロー主義宣言でも國際情勢一般と云ふ背景と當時の國內事情と云ふものを除外しては到底正しく把握され得る筈がない。民族の國際生活が激烈な生存競争を意味し、普通に所謂戰略論が戰時戰略論なら外交戰略論は既に述べた如く平時戰略論である。之れを理想的に編出すことは困難であつても一應の事は必ずや可能である。顧みれば曩日の筆者の小著『國際軍備縮小問題』や『極東外交論策』や其他の小篇は皆な平時外交戰略論の見地から立論されて居つて、一部の素材資料を提供して居るやに考へられる。

外交戰略論は廣義外交の視野に立つが故に、文化外交、經濟外交、政治外交が三位一體として浮び上る。世界大戰の終局に於いて獨逸民が飢餓に瀕して居た際、ウイルソンの爲した平和の提議、飛行機上から爲された大衆に對する非併合非賠償の宣傳は獨逸帝國の瓦解を早めた。蘇聯の出現以來誰も思想戰の重要さを無視する者はない。我國と雖も國內を全部開放して戦線に出動するを今は許さぬ。クラウゼウイツは貿易も戰爭であると云ふ。極端ではあるが米國人の一部には日本商品を買ふと其の金が鐵砲玉に替つて飛來すると宣傳する者もあると云ふ。極大豫算實施に必要な日本の貿易發展を阻止せんとする列國は此の頃は、日本の輸出増加は其の政治的野心と關聯があるから不可であると爲すもの如くであると云ふ。重要問題は常に政治經濟的である。政治外交に至つては合縱連衡今日の如く隆んるはない。蓋し精神分析學から云へば人間の心理作用には愛と憎との外はなく、之れを超越する心理は宗教團體の如きものとか皇道國家にしか屬せず、聯盟の如き政治團體に此の解說的心理を應用しても動的の力とは決してならない。自己に順なるものと逆なるものとを見分けて各民族が同盟し對峙するのは頗る自然の傾向である。我國の如き現状打破國は孤立の傾向を露呈するのも餘儀ないが、かくまで孤立したのは一見しての不可能事を可能事となすの努力が缺けて居るにも因るので

ある。帝國の政治外交の一大課題としての支那問題に就いて、最近人々は始めに吠へて中途から尾を後足の間に挟む犬の方策を適用したが、未だ成功を必せなかつたかに傳へられる。反對に吾人はブルドックの方策を採用することも出来る。或人は日本の道德を歩一步向上させることが根本解決の要諦であると説くのであるが、或は情勢を好轉せしめずして反つて紛糾を増すかも知れぬ。筆者は合成人のことでもある故假説として本問題に常態及び變態應用心理学を適用して見たら如何かと考へる。

斯の如く外交戦略論の視野は廣いが、其の主要な問題として國際生活に於ける國家を支配する基本原則、内政と外政との關係を律する基本原則（前章「内政と外政との關係」、又は霞山會館講演第三十七輯参照）倫理的又は生物學的國家觀の當否、外交戦に於けるマキアヴェリズム、議會に於ける所謂民主主義的統制を如何にして必要なるマキアヴェリズムと合作せしむべきかの原則、外交目的の統一貫の原則、同盟關係を支配する原則、假想敵國を支配する原則、外交戦に於ける時間と空間との利用、如何にして國家の摩擦面を最小限ならしめ民族精力の氾濫を恒久的有意義の仕事に適用すべきかの課題等を擧示することが出来る。以上の問題は決して軍人丈けの問題でなく、軍人は是等の問題を戰爭論の立場から研究し竭して居るが、余の聊かながら知れる外交畑等では孰れも未だ一應の研究さへ出来て居らぬ様である。

外交戦略論の原理を把握すれば外交大學の存置は當然の歸結であらねばならぬ。陸軍大學、海軍大學があるならば外交大學は當然ではないか。先人は儀禮、社交、語學等の爲めの大使學校又は外交官學校位しか考へて居らぬ。蓋し狹義外交の立場に立つが故である。今日日本は此の新機軸を出すべき必要に逼られてゐる。雄邦日本の黎明の鐘は先年鳴り響いたのみである。永劫の生命を持つ國家から考へれば決して遅くはないかも知れぬが、本邦は今や超非常時にあつて

滑る坂を登りながら併も蹉跌を許さないのであるから、今は豫算に外交大學設置費を計上すべき時期かも知れぬ。外交大學の理論が理解されるれば外交參謀本部は必然の論理である。外務省が之れに當ればよい。外交大學では一般外交戦略論を、外交參謀本部に於いては應用日本外交戦略論を究はめて其の運用の妙を極むるに於いては國家の外交不安を徹底的に解消するばかりでなく、最初から起り得ないと自分は覺信する。

過去及び現在の内に胎動しない未來と云ふものは絶対にあり得ない。夫れは如何なる未來のゼネレーションも現代人の不滅の生殖細胞の内に悉皆宿つてゐると一般である。故に人間の悟性の不完全さは暫く措き外交戦略論は未來を不確定にして窺知し得ざる範圍として容認するを肯ぜない。加之外交戦略論は未來を現在の企畫の内に捕捉することさへ空望とは考へない。即ち外交戦略論は企畫國際政治學でもあるのである。外交大學は是非當面の行政機構改革問題の中核たる一部を爲さねばならぬ。

萬人が其の土地資本勤勞を擧げて民族協同體に朝宗しつつある全體國家又は準全體國家の飛躍的増進が夫を取捨く隣國に影響せず済むと夢想し得るであらうか。全體が超越的目的に向つて協力する國と然らざるパラノアの國とは國際生存競争特に國力戰場裡に於て到底角力にならない。計劃經濟、統制經濟は其の緩なるものと雖も尙計劃外交——大勢順應外交に對立する——を隨伴せねばならぬ。

過去に於いて相當の功績を擧げた政黨の凋落は清廉堪能の政治家も多數あること故遺憾至極のことであるが、其の原因はコラプションの問題ばかりでなく、政黨が選舉戦を中心として内政上の政權争奪に没頭し、外交國防を雲烟過眼視し、民族活力の氾濫の手綱を逸して仕舞つたことに職由するのではあるまいか。若し然らんに政黨の誕生の第一歩は

政務調査會を變じて外交大學となし、一般竝に應用外交戰略論を講ずることから踏み出されねばならぬ。

クラウゼヴィツがナポレオン戦争史より戦争論を編出した様に、他日古今東西の外交史特に日本近世外交史から誤りなき一般及び日本應用外交戰略論を編出す眞正の學者を生じ、聖者ヨハネの心境を以て此の後より來る者の靴の紐を解くことが出来るならば、夫れは筆者一人のみの幸福に止まらない。

(昭和一一・一一・二二)

第六章 支那事變を繞る列強

一、米 國

滿洲事變及其の後の動向に現はれたる日本大陸政策の米國に及ぼすべき不利益に關し、スチムソン氏は「極東の危機」中に於て次の三點即ち(イ)、通商上の物質的損害、米國民及米國領土に及ぼすべき脅威、(ロ)、戦後の平和維持條約に違反せる日本を非議せざる時は戦争豫防及平和維持の運動に大打撃を及ぼすこと、(ハ)、米國が支那を近世基督教國文明の水準に上げんと努力し來りたる後支那を見殺にするときは米國の威信及其の物質的利益に大打撃を及ぼすことを舉示して居るのである。此の思想の結晶たる而て九國條約の變形たる不承認主義一名スチムソン主義はルーズヴェルト政權成立以後に於ても公式に繼承され、維持されて居る。されば米國の輿論は滿洲事變の時に比して決してより親日的でなくニューヨークタイムスの如き前回に對日理解を示したる新聞も亦日本非難に傾いて居る。

夫にも拘はらず米國政府の態度は尠くも十月五日迄は靜觀的であつた。其の理由はウイルソンの流を汲み國際聯盟に傾く國際協力派、中立權保持海洋自由の主張に傾く傳統的中立派に對し戦争回避を第一義とする孤立派が勝利を占め、交戦國に平等に武器彈藥及軍用器材の輸出を禁止する中立法が制定されたこと、ルーズヴェルト政權が、所謂 *new deal* で國內政策に没頭したこと、武器製造業者が外戦招致を策すとの世評を耳にして國民の反對強かりしこと、滿洲事變、エチオピア事變等に對する米國の介入の無効なりしこと、西班牙戦争に絡む國民戦線、人民戦線の相剋に介入を欲せざること、聯盟は無効となり、歐洲の物情騒然として漸く顯者となれる軍擴競争の傾向に捲込まれざらんとすること等に因るのである。

以上の方針から米政府は中道を歩み、七月十六日の米國務卿の列國通牒は、克己に依る平和、内政不干渉、紛争平和的處理、條約の尊重等を提唱し、其の八月二十三日の聲明は右通牒を太平洋にも適用し、米國は極度の孤立も同盟も考へずと聲明した。中立法發動の見合はせ、軍需品の政府所有船に依る輸送禁止、民間船は自己危険に於て輸送をなすこと、居留民生命財産の保護専念、居留民引揚勸告、自由行動を保留しつつ列強との協議、日支間に戦争中止の懸念等同一の精神から出てる。

けれども米國の對支同情は傳統的に強く、外には國際聯盟の支那事變討議、南京空爆、英國輿論の反響等から來る刺激あり、追々労働團體等の日貨不買も現はれ、經濟制裁は有效可能なりとの國際協力派の聲も高まり、政府も之に引摺られて時間的空間的に戦局を局限せんとし、東洋では幾分の *entanglement* を許す例あるに鑑み、國際協力回避戦争回避を續けつつも不承認主義を繼承したルーズヴェルト政權に相應しい様に、十月五日突如米大統領は國際無政府状態の

東洋に於ける露皇傳播に對し防壁を設け隔離すべしと説き、其の翌日ハル國務長官は日本の不戰條約及九國條約違反を聲明するに至つた。此の十月五日以後の政策と云ふものは決して根本的の方向轉換を以て目すべきものでない。今でもニューヨーク、ヘラルド、トリビュンの如きは滿洲事變 時よりも日本に對し理解を示しハースト系新聞等は防共の點から日本に同情的でさへあるのである。

滿洲事變當時、米國の幣原外交に顯はれた日本の自由主義を有力視し、其の困難を増さざらんが爲に問題を日本對聯盟又は日本對世界の問題となし、唯立會人を出すに止め、聯盟の調査委員派遣にも初めは反對し、民政黨内閣が之に賛成するに及びてリットン委員會の組織に賛同した。後此の政策の不可なるを覺り、公然日本を非議し、不承認主義を掲げ制裁力の發動さへ促し之に参加せんとして、英の反對に遭ひ挫折した。第一の上海事變後には英、米一所となれるも對日共同反對の聲明は之をなさず、英は在支居留民に引摺られて聯盟に不承認主義を導入し米國はリットン報告を是認するに止まつた。今次は英國が聯盟の會議、九國會議を上場し、之を領導した。米は「デヴィス」や「ホーンベック」の如き國際協力派親支論者を参加せしめて見たが、自國が右會議を領導するの立場に立つ事は之を拒否せんとし、二度の招請に對する日本の拒否に遭つて九國條約會議は全く無爲に散會した。日本が短期間に勝ち抜けば世界輿論の鎮靜は明白である南京攻略の際に起つた不測のバレー號事件は此の形勢を一變せしむるの虞ありしが、我方の著しく迅速に且卒直無條件に陳謝、充分の賠償、將來の保障を約束し、故意に基因せざるを釋明するありて、米輿論一應の鎮靜を見て今日に及んでゐる。併し米輿論の支那に同情的なることには變化なく、米國は歐洲を信頼せず、行衛不明の動向を示しつつあるが唯最近製鐵競争に銳意し、海軍力を條約量よりも二割増強し、四萬噸十八吋砲の巨艦さへ現れんと傳へられつつある

ことは米海軍が太平洋作戦を放棄せず、シンガポール軍港完成を紀念する英國極東艦隊の大演習に米艦三隻の参加を見んとしつつあることと相待つて頗る警戒を要する點である。吾人は米國の極東不干涉が海軍政策に明確に織込まれる迄は安心を尙早と觀する者であつて吾人は西太平洋への干渉を排撃するの斷乎たる決意なくして大陸政策を貫き得ざるべきである。

二、英 國

英國の支那事變に際しての動向に關しては吾人は「英國の極東經略史」(ダイヤモンド社發行、英國反省せよ参照)に聊か詳述して置いたから其の結論だけを茲に記述することとする。

英國は嘗て長城線以北の權益を清算し、之を露國に譲りて引退つたことがある。併し天津條約以來天津居留地、北京等に於て爲したる投資、京奉、津浦、京漢、京綏線等に爲したる借款、鑛山の經營、税關の管理權等に鑑み、餘り簡單に北支一帶の全部的拋棄を庶幾するわけには行かぬ。されど北支に於て干戈に訴へる程の死活的利益は先づないと云ふてよからう。之が中支となると多年其の勢力範圍として銳意繩張りを施し、經營し來つた所で、前述の投資、經濟的利益が多く茲に集中されて居る關係上同一には論斷出來ぬ。そこで北支事變の支那事變と擴大し、國軍の上海南京攻略となるや、其處に英支攻守同盟でも存在するか如く英國は極力支那に援助を貸し、或は上海の中立を提議し、或は日本の不法を責め、英首相は米國務卿が日本の軍事行動は九國條約不戰條約に違反すと云ふを聞きて欣躍之を支持し、聯盟を領導して日本非議に赴かしめ、蘇聯まで加へたる九國條約會議を操縦して日本牽制に利用せんとし、英輿論は豈々と

して日本を攻撃し、労働黨は反日決議を採擇し、經濟封鎖を提唱し、カンタリバー大僧正は反日民衆大會を司會した。是より曩き廣田外相は吉田駐英大使をして支那に關する日英了解を策せしめたものの如くであるが、夫は恰も支那問題の解決を英國に依頼するの貌となり、南京政府は英を牽制し、輿論の一部は支那の犠牲に於て日英提携の成るを許さずとなし、英の斡旋は我國の譲歩を支那の爲に強要する外意味なきこととなり、支那を硬化せしむる外何等の結果を産まず、北支事變の勃發と同時に英外相は日英交渉の打切を聲明するに至つた。

上海、南京攻略戦に際し、英の對支援助は露骨を極め、英海軍は我が海軍を牽制し、英國其他よりの武器彈藥は上海東島より陸揚せられ、上海の英軍は意地悪く皇軍の行動を妨害し、支那軍に各船の便宜を供し、其の過程に於てヒューゲツセン大使の我が飛行機の掃射に依る負傷、英水兵の死傷等の事件が持上つた。併し英國は我國に於ける排英運動の擡頭を氣に病み、多少日軍牽制に手加減を加ふるを装ひつつ依然對支援助を續行して居る。

嘗ての南京、上海事變、濟南事變が證明する如く日英は支那に於て一部共通利益を米蘇の使嫉に基く支那の民族運動に對して守護せなければならぬ立場に在りながら、兩國共、日英提携を時期を異にして相互に拒否し合ひ、今や百パーセント異なる道を歩むに至り、日英抗争の可能性を孕むに至つて居る。本年三月六日の紐育タイムスが、和蘭が日獨協定に依り既に神経過敏となり居れることを指摘し、日本の蘭領印度への發展に由り和蘭政府の國防上の任務が苛重となり、フリツピン⁽¹⁾の獨立が之に拍車を掛けつつありと説き、蘭領印度が他國の掌中に落つるときは、シンガポール、印度、濠洲等を保持し難かるべく、從て英國は之を默視し得ざるべしと論じて居たことは此の際回想の價値がある。大局觀として北支に於ては英國が其餘り大ならざる利益を今次の日支事變後の事態に適合せしむる様清算するの可能性

が寧ろ多い。併し反對に中南支に於ける英國の重大利益——死活利益とは云はず——は右清算を可能ならしむる見込が極めて少い。何の道、不退轉の我が國策が中南支の制壓を要求する結果、日英双方の利益に極學的取引を必要ならしむる虞がある。併し此の取引をして戦争に墮せざらしむることは絶望的ではなくて、唯之が爲には英國人の可塑性を前にして我が當局者側に於て外交に於ける時間空間の前後遠近を峻別し、國力の擴充利用に於て活殺自在の妙機を捉ふることを必要とするのである。

三、蘇 聯 邦

蘇聯邦の國情に關しては吾人は別に編を改めて詳論せんと欲するのであるが、其の軍事的極東再歸は嘗て外務大臣も述べた通り吾人の重大關心事であらねばならぬ。滿洲事變前後極東の廣野には僅か四個師團の兵しか無く、無人の境であつた極東露領は露國の一國社會主義、第一次第二次五年計畫と順を追ひ急角度を以て強化され、今日に及びては三十萬、一説では四、五十萬と籌せらるる茫大陸軍は多數の飛行機、タンク、其の他の新式武器を擁して虎視眈々、我が國境守備軍と對峙し、嘗て屢々國境衝突事件を惹起し、樺太に於ても沿海洲等に於ても我が條約上の權益は長縮退嬰を餘儀なくされんとして居る。海軍も潜水艦六十隻のものが此の上とも強化され、今春米國に戰艦を注文するやの噂さへ傳へられ日本海、必ずしも日本海でなくなつて居るのである。支那側が日本の恐露病を説き、日露開戦を打算に入れ對日戦備に驚進したのも故あることである。

此の蘇聯の脅威は何事にも増して雄邦日本の完成、東洋的東亞保全地接收の實現に障礙となるもので、一方蘇滿國

境一帯に於て、他方二種のコミンタイン、ルートを含む外蒙新疆と内蒙、回教徒居住地域との接觸面に於て對立する日蘇は思想戦をも加味して相剋關係にある。吾人は不敗に立ち、露國に必ずや來るべき冠履顛倒が例へば匪賊討伐の形に於て右脅威を解消し得せしむる天の時を待たねばならぬ。

斯の如き關係に在る露國に取り日支事變に乗すべき機會であるが、蘇聯は朝鮮人を北に追ひ、強硬態度を装ひ、樺太沿海洲等に於ける我權益行使を阻止し、我が領事館の二三を削り鎖國傾向を強化して居る。傍ら浦鹽及コミンタイン、ルートを経て武器彈藥、飛行士等を支那に供給して居るが未だ意義ある對支援助を組織化して居らない。兵力異動の異圖を示すものもない。之はトロツキイストの肅清事件、トハチエフスキー等の異分子掃蕩事件等打續く恐嚇政治の惱みが如何に深刻であるかを示すものである。結局蘇聯は自主的戰爭計畫を持たないものと判斷してよい様である。

四、結 論

人民戦線に屬する佛國政須國等が對支援助の片鱗を示したことに不思議はないが、香港と粵漢鐵道との蔣政權に供する支柱に比すれば問題でない。吾人は十餘年前から豫見された聯盟其の他、歐米の計畫的組織的對日抵抗に打當つてゐるのであるが、彼等歐米各國は蔣政權を操縦こそすれ、自ら矢表に立つ氣力がない。歐洲の狀勢も亦之を許さぬ。其の際吾人の希望を繋ぐべき日、獨、伊防共協定も出來、歐亞を通じて國民戦線、人民戦線、否寧ろ現狀打破戦線と現狀維持戦線と對立して我方は大方東亞に於て自由に手腕を振ひ得る地位にある。敵の計略を打たず、追隨戰爭から始まり、上海、南京陥落後に極東安定石の自負を裏切る長期戦の覺悟を必要とするに至つたのは遺憾であるが、尙吾人は天の時を利用するの望を棄てず、地の利人の和を發揚せねばならぬ。

第四編 歐洲現勢

第一章 歐洲潜在戰爭の陣營

一、南北米洲、亞細亞洲、歐洲

心眼を開いて世界の實相を洞觀把握し得る者に取つては世界大戰が其の前に久敷鬱積し來つた軍擴競争、潜在的戰爭の反動であつたと同時に、巴里平和會議に於ける諸平和條約即ち歐洲政治條項の決定と國際聯盟の出現とは之亦百パーセント滿四年間も續いた長期死闘戦の反動であつたことに明に觀取されるであります。聯盟規約に多くの普遍的妥當性が盛られて居たとしても、夫は既に業に或る米國學者も指摘しました如く、ウイルソンの大理想の幽靈に過ぎないものであつたのであります。其幽靈すら規約第十條に定むる現狀維持主義の歸結にして支持者たる規約第十六條を含み、同條は超國家即ち世界國家の國防憲法としては誠に相應はしいものであつても、假の組合に過ぎない。即ち自然的終局的實在體である民族國家の Association に過ぎない聯盟には妥當せず、始めより八十パーセントは空文であつたのでありますから滿洲事變は勿論、伊太利のエチオピア征討に際し遺憾なく其の弱點を曝露し、曩日の幽靈は今や木乃伊

となり英國側の改組案に従へばロカルノ式の地方的安全保障となる見込であります。夫すら既に獨逸のラインランド進駐の節に廢紙となつて居り、まさかの場合には敵と味方と中立とに分裂する運命に在りますので、結局軍備延長たる同盟條約の外まづ現實の保障が無いと云ふことが認識せらるる様になるだらうと推測されます。其の際歐洲の均勢が著しく破れませんならば或は世界大戰前久敷歐洲の分野を縦斷して行はれた強國の歐洲協調云はば「歐洲の重役會議」と云ふ様な制度の一時的再現を見るかも知れませぬ。ムツソリニの四國協約は實に斯の如き意味を持つものであります。

夫は兎に角歐洲のみならず世界全般の安全と平和とを等しく保障しようとした聯盟は現狀維持主義の規約第十條と現狀打破主義——之は第十條程大膽卒直に確認された主義にはなつて居らず、僅に勸告の範圍を出ませんが——の第十九條との間に明瞭なる矛盾を識し、此の現狀維持と云ふ平和と現狀調整變更の平和との不兩立は十年ならずして完全に曝露さるるに至つたのであります。

以上の世界全般の國際主義平和主義——平和主義者の平和とも軍國主義者の平和ともつかない——の波に乗つて彼の華盛頓會議に於て極東平和機構と云ふものが誕生して参りました。此の極東平和機構と云ふものは二つの要素から成立つて居りました。第一は海軍條約の内に大體盛り込まれた海軍力五・五・三の比率であります。第二は門戶開放機會均等主義と支那領土の不可侵と云ふ米國の極東政策を全部的に容認した九國條約であります。此の極東平和機構中に於て我國が米國の極東政策を受諾したと云ふことと、米國海軍が日本に對して使用されないと云ふこと従て六割を受諾しても差支ないと云ふことの間には實質上不可分の關係があるのであります。夫れでありますから反對に滿洲事變後現實化した様に米國極東政策の不受諾と云ふことがあれば米海軍の對日不使用と云ふ保障は、スチムソン主義が立證する如

く無くなり、米海軍は太平洋に集中され、米蘇協力の淡き模様も浮び出で、茲に五・五・三の比率は勢ひの赴く所解消せざるを得ないのであります。其の上九國條約可決調印の節、支那側は九國條約の新原則に合致せざる各般の既成事實特に滿洲の事態を匡革せよと主張し、我が代表は之に反對して滿洲の既得權益は飽く迄之を保持すると主張致し、米國側から支那に同情ある向の發言があつた後に争點は有耶無耶に葬られて居つたのであります。然るに英米等飽和國の國策の具たる自由主義、國際主義、平和主義を背景として華盛頓會議に登場した主義原則と云ふものは、日本國民の精力を擧げて内的のみ氾濫せしめんとし、米國は東より、支那は滿洲より直々我國を壓迫し來ると云ふ事態を招致せしめますので日本が收縮して化石とならざる限り到底久敷米國等の解釋する様に尊重される筈のものではありません。夫れで人々の意識せると否とに拘はらず、歴史的約束に従つて滿洲事變は遠慮會釋なく勃發し、極東平和機構と云ふものは或る見地よりすれば地に委せられたのであります。

楮てカリソメの集團的一般局地平和機構の夢が破れて見ると世界の實相は著しく之とは異なりたる場面を展開して居るのであります。

佛蘭西の有名な論策家シーグフリードは昨春 the clash of Commitments と云ふ一文をカーレント、ヒストリー誌に寄せまして、南北亞米利加、亞細亞、歐洲—阿弗利加、濠洲を隸屬—の三大陸の抗争關係を論じ、特に矮小なる民族主義に分裂した上亞細亞から政治的にも經濟的にも後退して行つた歐洲の將來を著しく悲觀して居るのであります。之も彼一流のヴィチヨンを感じた面白い描寫であります。

人類の競争は本來 Group competition となるが常の傾向であります。而て綜合的集團的將又大陸對立生存競争場裡に

於て亞米利加は最も恵まれた地位にあります。恐らく世界中で本國丈けを以て、オートルキーを略完全に實行し得る様な充分の資源ある廣大の領土に恵まれた國は米國一國でありませう。其のモンロー主義は勝利を博し、聯盟規約に堂々と揭示されて居る程で、歐洲の衰退は而して其の軍縮は愈々モンロー主義の威力を増す一方であるのであります。加之米國の國內事情が右申す通りでありますから、其の南米諸國即ち、ラテン亞米利加に及ぼす統制力はガリビアン海地方を除けば必ずしも十割迄利己主義一天張のものでなく、而て拉丁亞米利加は西班牙人葡萄牙人等と土人との混血兒の多い爲め人種的退歩の傾向もあり、其處に世界的強國を以て任ずるものなく、確かに南北兩米大陸は米國の汎米主義の羽翼に完全に抱擁され、米國は實に押しも押されぬ優勢の地位を占めて居るのであります。

之に比すれば亞細亞の地位は著しく悲觀すべもものでありまして、亞細亞全體として西力東漸換言すれば科學と技術とを有する白人種の侵入を受けて死屍累々たる有様であります。其の内の一部たる吾人が東亞と呼ぶ地方に於ても侵入者達は我國の決死的努力に依り部分的には撤退も致しましたが、今日でも我國の東亞安定力たる地位は完全無缺には確立致しません、誤算に誤算を重ねて一步でも氣をゆるせば即ち反て東亞の不安定力となるなきやを虞るるを國士の任とする始末であります。東亞安定力主義と云ふ語は時として人々は上の空で之を發するのでありますが私の解する限り之は世界に於て第二位と下らざる雄邦主義と云ふ容易ならざる意味を持つものでありまして、經濟的財政的實力等の充分之に伴はざるが爲に今後多大の犠牲が同胞から要求せられて居るのであります。而て今日既に私共は米大陸及歐洲大陸及東亞の熊襲的要素の蓋然的包圍陣の壓力下に在るのであると觀察する論者さへあるのであります。

歐洲大陸に於て他の兩大陸との對立交渉關係に於て意義ある役目を果たし、前述の包圍陣の一環をなす國は英國と露國とであります。英國は從來二國標準の絕對優勢海軍力を以て大西洋、印度洋、加之太平洋を征し、歐大陸に臨んでは分裂して、之を支配するの政策を適用し、ナポレオンたるとカイゼルたるとを問はず、常に歐大陸に覇を唱へさうな最強國を挫く爲に第二の強國を支持し、其の上で各小國の民族主義を支持しつつ之を自家築籠中のものとなし、加ふるに聯盟を支持して崩壊せんとする大英帝國の紐帶となし來つたのであります。即ち英國は下り坂で最近聊か信望を失つたとは申せ、尙歐洲と世界の他の部分とに跨り、押しも押されぬ世界の安定勢力として立つて居るのであります。世界の銀行屋として氣力を消磨し去り、其の實力は或は外觀程でないかも知れず、伊エ紛争は英國の鼎の輕重を問はしめたのであります。彼等は深謀遠慮ある國民でありますから、今日と雖も之を輕視するを許しません。露國は數年前迄國際政治上は無人島の如きものでありましたが、第一次五ヶ年計畫の成功で早くも強大國として歐洲及び極東に登場し、工業都市を起し鐵道を新設し、優勢なる科學兵器加之毒瓦斯を以て、西伯利亞、外蒙古新疆より紅軍と手を連ねて、滿洲國を包圍して居るのであります。其處に筒井順慶の如きもの立つて居らないと云ふ確たる保證もなく、誠に極東は高枕安臥を許されぬ有様であるのであります。歐洲内の情勢と云ふものは大陸の衝突に登場する英國と露國に如何に影響するかと云ふ點に於て直接間接に我國に重大なる影響を及ぼして來るのであります。然らば今日一つの内燃機關にも似たる歐洲の内部情勢は如何なるものでありませうか、之より聊か立入つて吟味して見たいと思ふのであります。

二、歐洲の情勢

西洋の諺に「Every body's affair is no body's affair」と申します。佛、獨、露の如き大體狐、雞、米の關係に比す可

き國々に共通の安全保障が有り得る筈はありません。夫故に國際聯盟と云ふ一般保障が発生すると前後して舊時の同盟と全く同一の國際協力が發生し、往々地方的協定特殊協定と云ふが如き名稱の下に、規約第十條とも調和を保ちつつ次第に強化されて参りました。加之、其の效果に於て後者の方が遙に前者を凌駕する様になり、一般集團保障たる聯盟は形骸のみとなり、特殊集團保障たる同盟又は準同盟が實體を構成する様になりました。一切人の要件は何人の要件でもないことの自然の歸結であります。其の結合の最初に且明瞭に觀取されましたものは、規約第十條に定むる現狀維持派即ち平和條約非改締派の陣營であります。

(イ) 現狀維持派の中心に位するものは云ふ迄もなく佛國であります。佛蘭西はアルサス、ローレーンと云ふ失地を恢復し一部獨逸植民地を得たのでありますから、今や歐洲の満足國となつた次第でありまして、守勢に轉ずるは當然であります。巴里平和會議當時は勿論其の後に於ても、ライランドを併合しようとか、茲に緩衝國を設け、尚ザール河流域をもアハヨクバ合併させて自己の地位を強化せんと意圖したこともありましたが、英米の牽制もあり大勢の非なるを見て中道に止まつた次第であります。英國に次での大植民國であり併も歐洲の最肥沃なる地域に、セネガル人や安南人迄加へて僅か四千萬にして潑然不動の人口を以て安定して居るのでありますから、大戦後の實情と相俟つて國情が自然現狀満足國に墮するのは當然であります。從て國軍陶冶の精神に於ても守勢で、獨逸との國境——白耳義との國境は之を除き——は歩一步に要塞を強化連接し、空軍は四千五百臺を以て世界に冠絶し、陸軍も亦兵數六十萬及び、タンク千七百臺其の他裝備に頗る優勢なるものがあります。之は、アングロサクソンが獨逸と同時に佛國等にも課せよとしたり徴兵制度撤廢其他軍縮秩序を拒否した結果然るを得たのでありまして、反對に佛國が聯盟に國際軍、國際參謀

本部、國際軍司令官——フォッシュ元帥一時此の地位を占む——を置かんとする要求は英語國民が國際軍國主義だと云つて之を貶し不成立に終はらした始末でありました。其處で代案として英佛、米佛保障條約が生れ、佛白同盟條約も前後して誕生して居ります。爾來聯盟規約夫自身を強化すると同時に同盟網を形成して獨逸包圍陣を完成することは佛國外交政策の一大眼目でありました。斯様な購立を急ぐと同時に現狀維持の大黒柱である、ヴェルサイユ條約の履行を迫つたのであります。賠償確保の爲にする、ルール占領の效果は相對的であり、後賠償は約三分の一位を獲得した丈けで棒引となり、平和主義者の平和を夢みたブリアンの甘い政策で、ライン占領軍の撤廢となりましたが、夫が一切の軍事條項の破棄に迄發展するとは考へなかつたのであります。勢ひの趨く所遂に其處まで到達致しました。之は軍國主義者的に平和と云ふものを見て居れば決して見落さない筈でありました。此の現實界では軍人が全然羊の様に處女の様になつてもよいとは云へないと私は考へるものであります。私は通俗語の心算で軍國主義的平和、國際無政府狀態、潜在戰爭、豫防戰爭等の字を用ひ、滿洲事變は立派な豫防戰爭であると考へるものであります。此の頃松岡鐵藏總裁を初め世の中には外にも斯様な文字を慣用して居る人のあることを發見して聊か人意を強う致しました。兎に角採みに採んだ閣議の末四閣僚の主戰論に拘はらず佛國左翼聯盟の内閣は豫防戰爭の最後の機會を逸し、冒險者ヒットラーは高をくくりつつも佛國側の空襲を相當心配して居ましたので漸く胸を撫で下しました。ヴェルサイユ條約は謂はば適用濟の國境規定を除く外殆んど廢止に歸しました。平和は動き出しました。歐洲は動搖せざるを得ません。

私は平和主義者の平和、絶對的安全保障は存在し得ないことを嘗て一應論結したことがありますが、神は人類に之を與へて居らない様であります。何故なれば絶對平和は夫自身人間を廢類に持つて行くからであります。人間に可能な

は相對的安全保障軍國主義者の平和であります。だから軍縮秩序の設定は困難且不完全で時に解消さへ致しませう。唯軍縮會議に臨む標語として「攻むるに足らず守るに足る」と云ふ語は精神分析學上全く満點であります。兎に角一日一日努力して平和を戦ひ取るのが人間の道である様に思はれてなりません。重ねて云へば平和は切つて干した化石ではなくして生々發展する常爲だと思はれます。されば悪口の様ですが大理想の木乃伊たる聯盟を越えて現状維持派と現状打破派との對立相剋は今や如何なる迂愚者の眼にも判然と映じて参りました。そして現状維持派の柱石には嘗て、チャンドーク、ナポレオンを出したけれども、今は佛蘭西社會黨、共產黨、急進社會黨の人民戰線——第二、第三インターの結合にて國民戰線に對する——内閣、結局、フラン、マソンに強く支配されると傳へられる佛國があるのであります。

(ロ) 此の佛國の地位を外交的に強化するものとして先づ第一に佛白同盟條約があります。白耳義は世界大戰の結果として永久中立國と云ふ有難迷惑な特典を失ひ、オイベン、マルメデイの二郡を合せ、其の犠牲に相應しい賠償を得三軍團二飛行聯隊を養ふこととなつたのであります。其の獨立國としての地位は佛國に依存することに依り、其の直接の支持に待たなければなりません。之が聯盟の活力の知れなかつた間にいち早く佛白同盟條約の結ばれた所以であります。獨逸の書物等に佛白同盟條約の内容として軍事行動までも一部豫定した協定が發表されて居るが其の眞偽は疑はしむといはねばなりません。併し一九一〇年九月七日參謀總長間に調印された軍事協定の存することは何より確實であります。夫で佛白はガツチリ、スクラムを組んだ國防上の一單位を成すに至りました。英國は勿論和蘭と白耳義とを自國と獨逸との間の緩衝國と看做し、次に述ぶるロカルノ條約を以て白耳義の現状を保障して居る次第であります。

(ハ) 次に現状維持的安全保障機構として、ロカルノ諸條約を擧げることが出來ます。此の體制の下に於て英・伊兩國が歐洲の安全保障機構に割込んで來て居ります。此のロカルノ條約は結局に於て米國が歐洲問題から手を退いた後の英佛、米佛保障條約の變形と解さるべきものであります。本來佛蘭西は、ライオンランドの合併が其の緩衝國としての獨立を欲したのであるが英、米が即時の軍事的援助を約束したので之に満足することとなつたのである。此の約束は米國としては同盟を排斥する華盛頓の遺訓に反し、英國としては自由行動を保留したい middle-road policy の傳統的要求に反するので、米國の批准拒絶に依り兩者共に效力を發生せぬこととなつたのであります。後英首相が

一、英國は佛國が其の挑發に基かずして獨逸の攻撃を受けたるとき直に軍事的援助を貸すこと

二、ヴェルサイユ條約第四十二條乃至第四十四條及び軍事條項の履行を確保する爲佛國に協力を與ふべきこと

を約した新英佛保障條約案を佛首相に提示したことがありますが、佛國側で、ポアンカレの時波蘭及びチエツコスロワキアの國境の現状をも保障せんこと等を要求して遂に此の案を流産に終らせました。後ルール占領の事があつて獨逸も此の苦しい占領より免がれんが爲に萊因協約及び獨佛間紛争平和的處理條約締結の用意あることを聲明し、其處に英國の斡旋も加はつて漸く、ロカルノ諸條約の成立を見るに至つたのであります。

本條約は獨逸の西部國境に直接利害關係を持つ獨、佛、白三國に尙保障國として英、伊二國が加つて締結を見たものであります。締約國は佛、獨、白の領土の現状維持、獨佛及び獨白間の國境の不可侵及びライオンランド無防備地帯に關するヴェルサイユ條約第四十二條及第四十三條の規定の遵守を約し、其の違反ありたる場合に於ては現行犯の場合を除き聯盟理事會の違反事實確認を待つて被害國に援助を與ふべきを約束して居ります。此約定は佛獨獨白仲裁裁判條約の外、獨逸の東部國境にも關心を示して獨波、獨致間仲裁裁判條約、佛波、佛致保障條約を隨伴して居るのであります。

聯盟規約に基礎を置ける所謂壽府議定書は一般的共同自衛を組織化せんと試みたものでありますが、斯る全般的連帯責任は世界の現狀に適合しないので勿論否決せられました。之に代はるべきものとして地方的協定即ち「自衛を織込んだ他衛」とも言ふべき局地的平和機構が聯盟に依り推賞されたことがありまして、ロカルノ條約は其の一例であります。英國には由來歐洲派なるものがあつて孤立派に對立し孤立漂流政策を危険視し、獨逸が國力を恢復し、例へば波蘭との國境を修正せんとするに際し、英國が中立の態度に出で、佛國を孤立無援状態に置かんか、獨逸は必ずや追つて佛國をも攻撃するであらませうし、其の結果歐洲の一國が或は海峽を獨占するか、又は北海の全海港を支配するに至るは英國の死命を制するものでありまして、英國は是非共斯る形勢を阻止しなければなりません。従て獨逸と佛白との現存國境を保障することこそ歐洲の平和及び英國の安全を保障する所以であり、極言すれば英國の國防第一線は萊茵河にあるのであります。此の意味に於て英國は現狀維持派の陣營に位置を占むるものでありまして、ロカルノ條約に於ける伊太利は寧ろ之に追隨するものと看做すべきであらませう。

以上の次第で根本に於て英國が現狀維持派の陣營に在ることは争はれないと私は考へるのであります。夫にも拘らず獨逸は一九一四年に英國が中立を保持すると思ひ込み、次の戦争には是非中立を保持させようと努力して居ります。英獨海軍協定も獨逸の軍事條項破棄への邁進も此の意味を語るもので、獨逸間に特に獨逸の方から接近の試みをして居ることとは疑もなき事實であります。英國にはラインランドの無防備を不合理と説き獨逸植民地の必要を認めんとする論者さへもあるのであります。其の上前にも申しました通り英國大陸政策の第一は分割して支配するに在ります。其の第二は第一條件の成就を條件として地中海、印度洋及び大西洋岸の海上覇權を保留して孤立を樂しむに在ります。其の第三は

小なる民族主義を支持して第一の政策の支柱となすに在るのであります。併し塊地利の獨立を維持する爲に武力干渉を試むるの意思はありません。其の第四は聯盟其他の平和機構を援用して大英帝國の紐帶とし、且は又飽和國としての自存の計を全うせむとするに在るのであります。其の第五は大西洋及び太平洋に於ける米國との親善關係に重きを置き、和蘭を支持し極東を攝理するに在るのであります。斯様な立場の複雑性の中に時として稀には獨逸を支持して佛國に當るの素因を寓し、獨逸が英國を籠絡して中立を維持せしめんと庶幾する理由があるのであります。之が同じ現狀維持派でありながらも英國の佛國と著しく異なる所以であります。

伊太利も獨逸との間の緩衝國としての塊地利の獨立を欲し、獨逸と直接に國境を接するを欲せず、ブレンネルを永久に其の北方國境となしたい意味に於ては現狀維持派に屬するのであります。併しながら以上の留保を以て伊國は特に、ムツソリニは著しく現狀打破派に傾いて居るのであります。巴里平和會議に於て佛國等の反對に因り一九一五年の參戰條件を充足されず著しく佛國に對して含む所があつたのであります。凡そ獨逸の聯盟加入以前聯盟の尙華やかなりし時代に於て英、佛が恰も太陽系中の恒星の如く澤山の星を從へて登場するのに反し、伊太利と日本とは常任理事國と云ふは名ばかりで實は協調の名に於て追隨に墮して來たのであります。巴里會議から伊太利は乞食の恰好で引揚げたと評せられたのであります。夫でもムツソリニ以前の自由主義の政府は協調の名に於て無自覺な自目的のない方針を追及して参り、ムツソリニすらも當初に於てはロカルノ條約に参加したのであります。實は之は百パーセント英佛追隨で伊太利は唯御先棒を擔がせられるに過ぎません。従て小協商なぞからも輕視せられるか、無視せられる存在に過ぎなかつたのであります。ムツソリニがフアンズムを通して歐洲の大國の地位に伊太利を引揚げてから追々其の外交政策も

自目的を盛る様になつたと認められるのであります。偕て本來佛伊關係が宜敷ない處へ佛國の左翼聯盟今日の人民戦線とファシズムとの思想的對立も手傳ひ、佛伊關係は可成り悪化したことがあります。併も嘗て伊太利は、ユーゴスラヴィアより、ヒューメを奪ひ、オトラント海峡を扼して、アドリア海の制海權を握り、ユーゴスラヴィアの内訌に乗じ、ダルマチアを窺ひ、アルバニアと同盟條約を結びて之を準保護國の地位に置き、ユーゴスラヴィアの地位を此の戰略的地點から脅威して、ユーゴスラヴィアと抗争して居るのであります。其の上ムツソリニは伊太利の未來は東方に在りとヒットラー張りの壯語を發し、空想ではあるが勃爾牙利と政治協定を結び、希臘土耳其にも其の制覇政策の觸肢を伸べてエーチエアン海、ロカルノを計畫し事々に小協商と對立關係に立ち、小協商が協力に依りて大國並の發言權を行使するを嫌惡し、昔時の歐洲協調特に歐洲重役會議とも云ふべき四國協定を提唱して聯盟及び小協商を袖にするの態度に出でて居ります。加之本來伊太利は原料、資源、動力に乏しく、原料の自由移民の自由を叫んで來たのみならず巴里平和會議に於ける最大不満足國として獨塊合併に反對する外は、百パーセント現狀打破派であるのであります。従て、ムツソリニは嘗て歴史の證明する所平和條約は決して永久に存続され得べきものでないと屢々揚言し、平和確保の爲條約改締の必要あることを力説して參り、現狀打破派と思想的に全然氣脈を通じ塊洪國の後立となり、其の改締運動を支持し、塊洪兩國の親伊政策を受け容れて前後二回の羅馬協定を以て此等兩國と政治的經濟的文化的プロツクを形成し、互惠通商條約を以て其の連鎖となし、小協商の統制下に塊洪國を置かむとする佛國や小協商側のドナウ協約案に反對し、明瞭に小協商の爲す所に倒行逆施して參りて居るのであります。

此の事は、ヒットラーの奮進を前にして現狀維持派の弱點を構成するので、伊太利の友情を九師團の兵力に評價する

佛國では古くから在る佛、伊接近論者の説が行はれて、昨年一月、ラヴァルムツソリニ間に羅馬協定が成立致し、伊國は植民地に於て四點の讓歩を克ち得、所謂 "compensations" 政策の徹する所、遂に英國指導下の聯盟の經濟封鎖に拘はらず、エチオピアの伊太利併合を見るに至つたのであります。之がロカルノの陣營内の著しき無政府状態を語るものでなくて何でありませう。併し嘗てより原料の自由、移民の自由を叫んで來た伊太利としては無自覺に英佛に追隨して、ロカルノ體制に入つて一文の利益もしない伊太利としては當然の歸趨と云はねばなりません。ナチスもファシズムも結局國家主義、一國社會主義で思想的に聲息相通するものがあるのである。そこで現狀維持派は伊太利の自暴自棄に陥るを阻止し、ナチスとの積極的提携を喰止める爲、エチオピア進出鼓舞の策に出たと見るは僻目でありませんか、夫にも拘はらず、聯盟を壓へて東阿を征せんとする伊太利と、ラインランドに進駐する獨逸との間には屢々打合が行はれた様であります。兎に角伊太利の次の進路が具體的に選定されない今日、獨伊間には併行する目的はあるも共通の目的はなく、獨伊間にはまた積極的協力に關する密約は無いと考へられるのであります。されば伊太利は塊洪の親分を以て任じ、小協商と對立するダニユツ組織を考へ、バルカン小亞細亞にも延びる形勢を示し、エチオピアを併合した點に於て油斷のならぬ現狀維持派中の異分子駄々子ではあるが、併も尙最近「爾今伊太利も飽和國となつたのだ」と叫んだムツソリニの言に徴し、吾人は伊太利を歐洲に於て一應條件附現狀維持派の陣營に配列する次第であります。勿論大戰の際三國同盟を脱して英佛に與した伊太利のことでありませうから戰爭勃發時の形勢で異變があるであります。

(二) 次に重要な現狀維持派の支柱は佛波同盟條約であります。十八世紀末露、塊普間に三回かに分割されて獨立を失つた波蘭は、ナポレオン一世の支持下に於て一度侯國を造り、世界大戰の結果、普魯西領波蘭面積五萬四千平方吉

米突、人口二百九十四萬、上部、シレジア面積一萬三千平方吉米突、人口百九十三萬人、東部及西部普魯西面積一萬二千平方吉米突、人口七十一萬人、埃領波蘭面積七萬八千方吉米突、人口八百萬人、露領波蘭面積十二萬七千方吉米突、人口千二百四十六萬人、ヴイルノ及クロドノ兩洲面積七萬九千方吉米突、人口三百五十五萬人、を合せて總面積は約十四萬平方哩人口約三千萬の大國として一世紀半ぶりに誕生して参りました。されば波蘭の佛國依存に其の系圖からして明解されます。埃地利が七花八裂した後の波蘭は専ら獨、露に備へねばならぬが、特に大なる關心事は右様に於て取容られた波蘭に百五十萬人の獨逸少數民族を包含し、歴史的に波蘭の要地でありましたが、經濟的に工業上重要でありましたも、ビスマークの移民政策や工業化の爲に既に著しく獨逸化した地方を永久に把持することの困難であります。ヒットラーが獨逸の未來は東方に在りと叫ぶとき第一に怯えねばならぬ國は波蘭であります。佛波同盟條約が早目に締結されたことに不思議はなく、波蘭は常に佛國に追隨し、リチユアニアとの紛争の際、國際聯盟に於ける協力は影の形に沿ふが如くでありました。嘗て蘇軍が大舉して波蘭を犯したとき佛蘭西のウエイガン將軍が之を撃退して居ります。蘇聯に對する防備の必要は同國が一國社會主義に轉換した後に於ても其の重工業の發展、軍備の強化の爲に加重せられる一方であります。獨逸の如き二大國間に國を爲す波蘭の心配は從來の日本人等には到底推測し得ざる所であります。此の邊の事情から佛波同盟條約を寢かして置いて先年十年間有效の獨逸不侵略條約の締結を見るに至つたのであります。

此の最少限度の獨逸接近と云ふ事も佛波關係に何等かの龜裂なくしては起り得ないことであるが、其の事情は佛國陸軍が優勢であつてもどうも守勢一方で本當に波蘭の頼みにならぬ。經濟的に波蘭は佛國に依存する考へから、佛國から品物を買入れるのに佛國の方では一向波蘭のものを買はない。政治的に波蘭の立場を考へるならば佛國としては軍縮及安全問題探究途上の聯盟内に在りて歐洲平和機構特に所謂東方規約の締結に關し豫め波蘭の意嚮を徴し、充分其の要望に考慮を拂ふべき筋合であるにも拘はらず、佛國は可成り波蘭に無頓着に行動し續けたのであります。斯様な軍事的經濟的政治的乖離から亦感情の冷却ともなり、佛波同盟條約の依然たる存続に拘はらず、佛波關係は到底昔日の如くはないのであります。東方規約將又東方、ロカールが波蘭及び獨逸の反對の爲に流産し、佛蘇同盟條約が成立したのは其の端的な證據であるのであります。波蘭としては優勢な蘇軍を國內舊露領等に進入せしめたら最早夫れ切りで國がお仕舞になるのだから無理もないのであります。一方波蘭は獨蘇間に中立均整不即不離を維持する心組でありませうか、蘇聯の平和策に乗つて蘇聯と不可侵條約を結んであるのであります。現状維持派に位置を占めて居りながらも、波蘭の中立性は相當見立つ、歐洲の平和の鍵は「ワルソー」に在ると嘗て「ムツソリニ」が嘆じたのも深い理由のあることでもあります。

波蘭は嘗て石炭、鐵、農産に頗る豊富な、ウクライナを領有し、キエフ、オデッサに伸びて居たのであります。今日もウクライナ人を相當少數民族として抱容して居ります。此の方面に伸びようとする氣勢があるのは自然であります。唯今日はまだ國力が充實せず舊露領の開發に相當の年月を要する時期にあるのであります。國民精力は内部氾濫で充分處理するに足りて居りませう。だから多分外部特に獨逸の働きかけに依りて獨逸と蘇聯との間に選擇をなすの必要に迫られることかと存じます。波蘭國防の重點は蘇聯に向ひ獨逸面の國防は第二次となつて居ると聞きますが、獨逸系波蘭特に「コリドール」が餘りに波蘭に取り工業上、通商上、軍事上重要であるため波蘭は獨逸と取引して相携へて併行して

東進し、波蘭は黒海に獨逸は、バルチックにと云ふ様な分野に分れることが至難で、唯最後のドタン場に波蘭は恐らく其の意思に反して其の東方から捲き起る大旋風の翼に乗せられて西の方へ持ち運ばれるのではなからうかと臆測されるのであります。茲に私共は明瞭に現状維持派に屬しながらも、苦しい準中立の波蘭を發見するのであります。

(本) 次に現状維持派の支柱として佛・ユ同盟條約を擧示することが出來ます。ユーゴスラヴィア否其の中核を爲すセルビアは世界大戦中、コルフ島に退却して居た始末でありましたが、平和會議に於ては所謂民族自決主義に惠まれて、主として埃地利次で洪牙利の相續國となり、伊太利を著しき悲觀の底に陥れながら、舊セルビアの面積四萬二千方哩、人口約五百萬人から、ボスニア、ヘルチエゴヴィナ面積二萬方哩、クロアチア、面積一萬七千方哩、ダルマチア面積五千方哩、スロヴェニア面積六千七百方哩、モンテネグロ面積三千五百平方哩を合せ、一躍して面積九萬五千方哩、人口千三百五十萬の有力なる一國となつたのであります。此の國は今や南巴爾幹に君臨しつつ、尙中歐を制御する雄大なる中等國の地位に躍進したのであります。併し斯くして言語上に於て民族的統一を實現したものの、人口の四割五分を占むる塞耳比亞人は希臘正教を奉ずるに反し、クロアイト人、スロヴェーン人等、人口の約四割は加持力教を奉じ、其の外にマセドニア人、アルバニア人等をも包含して居るのであります。今其の千四百萬と算せらるる南部、スラヴ系人民の内譯を一寸申上げますれば次の如くであります。

- セルビア人 五、一五〇、〇〇〇
- モンテネグロ人 二五〇、〇〇〇
- クロアイト人 三、五〇〇、〇〇〇

- マセドニア人 八〇〇、〇〇〇
- アルバニア人 八〇〇、〇〇〇
- スロヴェーン人 一、一〇〇、〇〇〇
- ボスニア居住回教徒 六八〇、〇〇〇
- 獨逸人 六〇〇、〇〇〇
- マチール人 四七五、〇〇〇
- クツオヴアラツク人 四〇〇、〇〇〇
- 其の他 二四五、〇〇〇

従て、クロアイトや、スロヴェーン人は民族としての獨立運動を起さない迄も尠くも完全なる自治を享有するか、さもなければ聯合國の形式を採用せんことを要望した様子であります。併し此の要求は、セルビア人の汎セルビア國內に於ける覇權を失墜せしむる處がありますので容れられずに居ります。夫ばかりでなく反てセルビア人中の中央集權主義軍國主義を刺戟する結果を見てもあります。

爾餘の民族に至りてまでは、ベルグラード政府の露骨なる同化政策の壓迫を蒙り、國外に放逐せられる者もあり、旁々彼等の反抗心を挑發する所がなかつたでもありません。其の著しきものが絶えず自治を要求し續けてゐる。マセドニア居住の勃爾牙利人約五十萬の群でありまして、コミタチと成つて時々侵入し來りました。國內にも民族運動共和主義運動、左翼運動起り、革命の氣運は動き、共產黨が勢力を伸長したこともあつたのであります。英明の君主、アレキ

サンドル一世の一九二八年以降の宮廷獨裁政治は、此の事態に倒行逆施せんが爲であつたのでありまして、其の結果はダルマチアを窺ふ伊太利や、クロアートの自治要求を支持する洪牙利等の宣傳に拘はらず、兎に角國基を鞏固ならしめることが出来ました。併し同國王が、マルセイユに於て非業の死を遂げられたと云ふことは獨裁政治に反抗する、クロアートの奮激の結果であつて、底に流れる暗流を物語るものであることは到底之を呑み得ないが、夫でも國家の統一は増し來つて今や自治運動に落着いてゐる始末であります。當國には獨逸や勃爾牙利等の現状打破派より來る誘惑も全然無い次第ではなく、獨逸が、ユ國の外國貿易の五割を占め、獨逸が軍需工業を起す特權を得、クルツプが進出したことはユ國の不感症でないことを示すものである。アルバニア、ダルマチアの關係特にフューメの伊太利歸屬問題等は伊太利と對立關係に立ち、洪牙利の背後にある伊太利のダニューブ盟約案には反對し、佛伊接近には嫌惡の情を抱き、蘇聯とも歴史的に相許し得ない立場にあるが、夫にも拘はらず佛・ユ同盟條約及び小協商の誠實なる履行者と見て間違ひなく、或は將來蘇・ユ關係も改善されるなきを保し難い。其の軍隊は今日の處では、未だ佛國シユナイグ等の兵器に依り武装され、其の訓練や軍隊精神は頗る上位に在つて原則として、敗ヶ軍をして來た伊太利軍を呑むの概ありとさへ云はれて居るのであります。

(ハ) 其の次に現状維持派の支柱に一九二六年に出來た佛羅同盟條約があります。羅馬尼は第二次巴爾幹戰爭中に二十五萬の勃爾牙利人を含む、ダブルチャを併せ、世界大戰の際、トランスシルヴァニア、マチャール人百五十萬、ベツサラビア、ウクライナ人百萬外に獨逸人七十五萬人を併せて面積人口共に二倍強となつて、頗る農産、礦産共に有福な國柄となつたのであります。土地の半分を所有した大地主の土地を取上げて九割迄小地主に與へた農政改革は有名で

あります。併し軍隊精神は昔から左迄でよくなく、世界大戰では一も二もなく國外に退散して居た程でありますから勿論守備に専らであり、第一には背後に獨逸を控ゆる洪牙利に對する警戒にオサ／＼怠りない有様で、次には勃爾牙利の同様の要求にも備へて居り、最後には、ベツサラヴィアの併合を全然は容認しない蘇聯に備へて居るのであります。蘇聯との關係は同國が聯盟に復歸し、一切の隣接國と侵略條約を結び、羅馬尼其の他と侵略國定義條約を結ぶに至りました爲め、餘程緊張が減少して參りました。其の結果隣接國波蘭とは一九二二年蘇聯に對抗する意味で同盟條約が出來て其の後度々強化されて居たのであります。其の後解消して仕舞ひました。蘇佛同盟條約と同一の約定を結んだり、蘇軍を國內に容れることは聊か躊躇しながらも蘇聯を取込んで獨逸包圍陣を形成せんとする東方規約には賛成でありますから、蘇羅相互援助條約の不成立を斷言するは早計であります。由來佛國の忠良なる同盟國で之を宗主と仰ぐ小協商の熱心なる支持者であり、聯盟規約第十條の信奉者であるのであります。同様に、ブルガリアに對し背後を警戒しつつ小協商の地位を強化する爲に巴爾幹協商を結んで、巴爾幹協商は優に人口四百五十萬と之に應ずる武力を以て一大帝國丈の發言權を持つと豪語してゐるのであります。其の實力は疑問視されながらも、獨逸の經濟的、バルカン接近策にも拘はらずナチスや親獨論者は先づ大勢を支配し得ないものと思はれ、誠實なる現状維持主義者であることは疑を容れません。

(ト) 次に佛致同盟條約を擧げることが出來ます。チエツコスロヴァキアは舊境領ボヘミア、モラヴィア、シレジアに居住せるチエツコ人七百萬人、上部洪牙利即ちスロヴァキア、ルテニア等に居住し、自治を要望せるスロヴァイク人三百萬人等を合せ、外に境、洪國及獨逸の相續國として國內に三百餘萬と籌せられる獨逸人、七十五萬のマチャール人、

五十萬の羅馬尼人を抱擁して居るのであります。併も其の平坦な地理的地位は獨逸國內に深く没入し、獨逸に對する防禦に頗る便利でないので小協商三國中最も苦境にあり、獨逸が東南方に動くときは眞先に死活的の影響を蒙らねばならぬ地位にあります。

奧地利、洪牙利が其の國境を變更したり、舊王室の復辟を實行しようとする場合にも亦其の影響を受けねばなりません。従て現状維持主義は理の當然であります。其處から國際聯盟中心主義と云ふものが生れて参ります。次に一層具體的の安全保障としては第一に佛國依存主義があり、一九二四年に佛致同盟條約と云ふものが結ばれて居るのであります。第二に一九二一年以來洪壤を目的とする現状維持主義の小協商プロツクと云ふものがあります。今迄久敷致須國の外相であり、最近大統領に就任したベネシユ氏は、小協商の外交政策を指導しながら國際聯盟に於て大國の代表も及ばぬ程迄に牛耳つて來て居るのであります。尙致獨關係に鑑みて波蘭と協力したこともありますが、致須國に波蘭少數民族があり、尙蘇聯及び獨逸に對する政策の乖離から兩國の協力は昔日の觀がありません。奧、洪に對しては其の獨逸との併合や、關稅同盟や再軍備問題や復辟問題や此等と抗争すべき立場に在り、其餘波を受けて伊太利とも亦親交を維持し難く成つて來て居ります。其處で獨逸の再軍備後佛國に做つて蘇致同盟條約を結んで居ります。即ち波蘭中立の結果、チエツコスロヴァキヤを通して蘇佛兩軍を呼應協力させようとして居るのであります。空軍に就ては勿論可能であります。露の陸軍を引入れて獨逸を突かせるには羅馬尼の協力を必要とし、是非蘇羅同盟條約を結ばせる必要があるのであります。私共は其の推移を注視する必要があるのであります。兎に角今はトーチカ時代でありまして、獨逸が東方又は東南方に攻勢に出づる爲に西方に於て守勢に出て、今後ラインランドに築かれる要塞の一线に依り少數の約

十萬とか二十萬とか云ふ軍隊で佛白軍を喰止め得ることとなれば、蘇聯が大舉して來り援けざる限り、致國は實に累卵の危きにあるのであります。

(チ) 次に現状維持派の一大支柱として、チエツコスロヴァキヤ、ユーゴスラヴィア、ルーマニアの一九二一年以來組織する小協商を挙げなければなりません。本協商はハブスブルグ家再興阻止、洪牙利の國境現状維持を主目的とし、必然的に奧國にも現状維持を強要せんとし、尙經濟的相互依存關係をも併せ促進せんとするもので、其の結合は頗る固く、結局現状打破派の總帥たる獨逸及び局地的條件附現状打破派にして奧洪國の支持者たる伊太利と對立關係に立つてをります。而て常備兵力より論すれば小協商は歐洲第五の強國として奧、洪國の平時兵力の約六、七倍の軍備を備へて、何時でも國境を越えて進軍せんとする氣勢を示してゐるのであります。勿論奧、洪國の常備兵力は軍事條項の破棄も改訂もされない今日、著しく薄弱たるを免かれません。綜合國力から云つても、小協商側は中歐側に比し三倍近くの優勢を具備して居るのであつて、一九一四年と異り歐洲の此の邊から平和が破綻し出すとは考へられないのであります。併し云ふ迄もなく、之は歐洲潜在戰爭に於て對立尖鋭化する兩陣營の一環に過ぎないのであつて、地方的局地的に孤立して事が起ることは、到底これを期待し得ないのであります。

(リ) 次に巴爾幹に尾を曳く現状維持派の後續部隊に巴爾幹協商があります。本協商は小協商の延長として、土耳其希臘の二國を一應現状維持派の陣營に羅致したものであるが、此の巴爾幹協商は勃爾牙利の存在なくしては到底之を考へ得られないのであります。ブルガリア人は小民族であるにも拘らず頗る精悍であつて、併も第一次第二次巴爾幹戰爭及び世界大戰以來の因縁で、絶大な不満足國であるのであります。それで同國は希臘との關係に於ては、サロニカを中

心とする南部マセドニアに於て十萬人のブルガリア人が居住して、百以上の學校と多數の教會とを維持して居ましたので嘗てバルカン戦争の際、これが併合を欲して成らず、今は其の地方民の自治を要望して居るのであります。カヴァラよりデデアガツチに至るエチエアン海に沿へる一帯の地方は、世界大戦の結果希臘に奪取され、地中海への出口を失つて仕舞うたのであります。ヌイイー條約の第四十八條はブルガリアに對し、地中海に出る出口を與ふべきことを約束して居るのであります。而してブルガリアは其の出口は領土的のものでなければならぬと云つて、領土たる一港と領土たる一鐵道とを要求するに對し、希臘はそれは經濟的のもので澤山だ。デデアガツチ港に於ける自由地帯と、鐵道利用權だけを與へようと云ふのであります。斯様な政治的繋争問題がある爲に、通商條約は嘗てヴェロゼロスが勃爾牙利壓迫の爲に破棄して仕舞ひ、戦争賠償金も追放ブルガリア人——南部マセドニアよりの——への補償金も兩國の孰れもが對手方に支拂はず、最も仲が悪いのであります。

勃爾牙利はユーゴスラヴィヤに對し、一大失地を持つてゐるのであります。夫は北部マセドニアに五十萬のブルガリア人が居住して居るのであるが、夫がユーゴスラヴィヤに合併せられ、ユ國から追放された避難民中の無賴漢や國家主義者達は、所謂コミタチとなつてユーゴスラヴィヤに侵入して、略奪破壊をやるのであります。此の最後の事は最近ブルガリアに強力内閣が出來て、勃塞接近を志向する様になつてから餘程下火になりました。此の外にも尙二、三ブルガリアの失地と認むべきものがあります。

夫れからブルガリアは、第二次バルカン戦争頃からルーマニアに對しても、ドブルチャと云ふ失地を持つて居るのであります。

唯紛糾が無いのは土耳其丈けであります。土耳其は第一次バル幹戦争に敗退して、首都に向け引揚げたのでありますから、ブルガリアの國內に多少の土耳其少数民族が居る位のものであります。夫れでも第一バル幹戦争當時、ブルガリア兵は頗る勇敢に戦ひ、土耳其の主力軍を破つて長驅コンスタンチノーブルに入り、ビザンチン帝國の後繼者たらんと欲したのであります。此の野心は露國の爲に抑制せられたのであります。此の歴史的事實は時に之を回想する必要が起るかも知れないのであります。

以上の次第でバル幹の最大不満足國たるブルガリアは、公然と外交上でもマセドニアの自治やヌイイー條約の改訂を要求して、虎視眈々たる有様であります。併し人口六百萬、面積四萬平方哩、歳出入五十二億、レヴァ、ルーマニアの規模を三分の一に縮少した農業國で、工業は進み居らず、ヌイイー條約で制限された陸軍兵力は唯二萬人で、多分合法的に條約改訂の方法に依り軍事條項の改訂を實現せんとして居るのでありますから、不退轉な現状打破派と見るべきであります。以上の理由で單獨でバル幹の禍亂を捲起す懸念はないものと見て宜しいであります。

此の極めて標悍なるブルガリアを取巻いて居る國々の状況は如何と云ふに、土耳其は辛うじて歐洲の一部と全小亞細亞とを保つて現状維持に汲々として居るのであります。世界大戦の結果は或は歐洲に於ける地歩を全く失はんとし、土耳其は或は地圖面より貌を消すかとも危ぶまれたのであります。歐亞を繋ぐあの要衝に土耳其を置くことは英國等の地中海政策にも合致しますので、結局あの通りに決定しました。セーブル條約は爾餘の平和條約と同様に苛酷なものであります。ケマルパシヤが蹶起して希臘人をスマイルナ地方より驅逐致しましたので、平等條約に近いローザンヌ條約が出來、面積二十九萬平方哩、人口千三百萬を確保することが出來ました。此の土耳其の地位を脅すものは露國でな

ければ伊太利だと、土耳其人は考へて居る様であります。嘗て海峡とコンスタンチノープルとを窺ひ、今でも地中海に出でんとする蘇聯は昔ながらに恐いものでありますから、資本主義國よりの包圍を恐れた露國と夙に不侵略條約、仲裁裁判及び調停に關する條約、中立維持條約をも結んで居ります。次に伊太利は希臘とスミルナの委任統治を争つた經緯もあり、又ムツソリニが伊太利の未來は東方に在りと述べたことなども手傳つて、ドデカネス諸島を飛石とする伊太利の小亞細亞進出を土耳其は大に恐れて居り、之に對して備へて居ります。既に數年前より土耳其が海峡の再武装を要求して居り、軍縮秩序解消の波に乗つてローザンヌ條約の改訂を要求し、近く海峡の再武装を許容する意味に於ての海峡通航制度に關する條約改訂會議の開催を見んとして居る始末であります。過去五世紀間殆んど不俱滅天の仇敵であつた土希兩國は政府に關する限り、伊太利の斡旋も加はり、雙方共に舊怨を水に流し、外交國策の一大轉換を行つて、互に親近するに努め、先づ通商航海條約成り、中立及び國際紛争平和的處理條約も出來、海軍制限條約も出來、人民交換に關する條約成り、一九三三年には國境不可侵條約が成り、協議條項、聯盟に於ける協力等が約束されて居ります。

希臘は世界大戰の結果としてコンスタンチノープルを首府とし、全希臘人を包括する大希臘を實現することに依り、ビザンチン帝國の後繼者には成り得なかつたのであります。併しヴェネゼロスの働きで、巴里平和會議に重きを爲し非常任理事國と成り、著しく領土を擴張し、一應はスミルナ地方の委任統治をすら克ち得たのであります。それにも拘はらず、今日の希臘は尙英國に對してキプロス島、伊太利に對して、ドデカネス島、アルバニアに對し北部エピルス、土耳其に對し、二三の島嶼を失地として持つて居るのであります。強力に依り之を恢復することは不可能であります。斯から、此等の對手國が他日其の國策を変更して返還して呉れる日の來らん事を待望して居ると云ふ有様であります。斯

くて希臘政府は一貫せる政策として、平和の維持、平和條約非改訂、隣國との親善、中立維持、戰爭回避、聯盟依存を方針として居るのであります。

偕てルーマニア及びユーゴスラヴィアの南部バルカンに對する態度は如何と云ふに、何れも現状打破派たる背後のブルガリアに警戒しつつ、大國特に伊、露がバル幹に進入して地歩を占めんとするのを阻止しようとして居るのであります。其の際勃爾牙利の方からユーゴスラヴィアを南方スラヴ系の聯合を以て誘ひ、相提携してエーチアン海に進出せんとする動きを見せて居るのであります。ユーゴスラヴィアの方から未だ之に對し熱意を示すに至つて居りません。但し希臘の方はユ國がサロニカを欲しがらる事情もある爲め、此の物に接近を非常に氣にして居るのであります。此の様なルーマニア、ユーゴスラヴィアの政策と、土希兩國の守勢とから小協商の延長としてバル幹協商と云ふものが生れて來たものの如くであります。

バル幹の諸民族は土耳其帝國に五世紀間も隸屬して居つた結果、政治、經濟、社會、文化生活を一部分に數世紀に互り共通にするに至りました。其の結果土耳其の羈絆を脱する意味をも加味して、「バル幹人のバル幹」と云つた様な運動が、十九世紀の始めから起つて居るのであります。一九一二年に生れた物、塞、希三國のバルカン同盟も多少斯の如き意味を有するのであります。

先年此の意義を擴充して萬國平和大會のバル幹部會として私的バル幹幹會議が生れ、ルーマニア、ユーゴスラヴィア、ブルガリア、アルバニア、トルコ、ギリシヤの六ヶ國の代表が全部之に加盟し、バル幹に限り政治、經濟、文化、之を要するに局地的平和問題一般を議することになりました。希臘の政治家、ババナスタシニウ等主宰者の理想とする

所はバルカン聯合で、差當り關稅同盟迄漕付けたい希望である様に見えます。本會議は其の第三回會議でバル幹の平和機構試案として、紛争の平和的處理、安全の保障、既存諸條約特に少数民族保護に關する條約の尊重に關する條約案を可決致しました。其の内容たる原則は (一)不侵略、(二)紛争の平和的處理、(三)協同制裁、(四)國內及びバルカン少数民族保護局の設置等でありました。尙本會議は通商互惠制度、開港、保險、鐵道連絡、商業會議所の協力、社會政策の共通立法、中央銀行の共助、觀光事業に於ける共助等の問題をも議して、種々の試案を起草致しました。

此の運動が機縁となつて一九三四年二月雅典に於て、バルカン協商規約と云ふものが希、ユ、土、羅の四國間に調印せられるに至りました。其の内容はバルカン内部の國境の現状維持を約束し、有事の際は締約國が集つて協議をすること、を約し、四締約國たるアルバニア、ブルガリアに對しては單獨行動に出でてはならない。尙又四締約國の二ツ或は三ツだけが、相互間に特殊親密の關係を結んではならないと云ふことを規定し、ブルガリア及びアルバニアが入りたければ之を許してやると定めて居ります。此の規約には八ヶ條より成る附屬秘密議定書がありまして、其の第一條は侵略國の定義に關する條約を採用して居ります。第二條は如何なる國をも假想敵國とせぬが、若し四締約國の一つがバル幹六ヶ國の何れかの一國から侵略された場合には相互に援助すべきことを規定して居ります。第三條は締約國の一つがバル幹以外の國から攻撃を受け、而してバルカン六ヶ國の内の孰れかの一國が、此の攻撃に加勢する場合には、此の加勢した國に對して締約國が協同して制裁を科する旨を定めて居ります。第四條は軍事的、經濟的、文化的協力を促進する爲協議を開始すべき旨を定めて居ります。第五條は小協商に關する條約を含めて、既存條約を尊重すべき事を定めて居ります。第六條に於ては四締約國の一つが侵略國となつた場合には、爾餘の締約國は當然義務を免るべき事を定めて居

ります。第七條はバル幹の國境は現状の儘永續しなければならぬと規定して居ります。第八條は存續期間を定めて居るのであります。

此のバル幹協商規約はルーマニア、ユーゴスラヴィアの策動で生れて來ました。之に希臘が參加致しました理由は一つは伊太利の勢力が一層バルカンに伸びるのを欲しないと同時に、萬一にもブルガリアとユーゴスラヴィアとが同盟聯合して、相携へて南下し、サロニカ、トラリスに殺到せんことを恐れた爲めでありましたが、併し他面希臘は萬一の伊太利とユーゴスラヴィアとの戦争の場合に之に引入れることを欲しないのであります。茲に於て希臘は安全保障を受くべきバルカン内部の國境の内からアルバニアの國境だけを除外せんと欲したのであります。併し斯様に致しますときは本條約がユーゴスラヴィアに取り無意義のものとなりますので、同國の反對が強く、希臘も止むなくアルバニアの國境を含ますことに同意致しました。然るに此の點が希臘議會で問題となり、反對黨から攻撃せられました爲め、希臘政府は止むなく伊太利とアルバニアとの間には、既に從來から同盟關係があるのであるから、伊、ユ戦争の際アルバニアが伊太利に加勢しても、バルカン協商規約同附屬議定書第三條は、アルバニアに關し其の適用を見ないと聲明致しました。斯くてはユーゴスラヴィアとしては非常に不満足であります。夫が原因になつて同國とルーマニアとの批准は、佛國の斡旋もありました後、著しく遅れて同日に行はれて居るのであります。

此の點はバル幹協商規約の一大弱點であります。尙ほバルカン協商がバルカン人のバルカンを標榜して居りますにも拘はらず、アルバニアは伊太利の準保護國で、伊太利からの禁止でもあつたであらうか、其の希望に拘はらず、該規約に加盟して居らないのであります。反對にブルガリアは本規約の起草會議に参加を招請せられたのであります。

前述の理由で之に参加を拒んだのであります。此のことは列強の勢力が戦前に比すれば、弱いながらも兎に角バルカンに加はつて居る事と相待つて、バル幹の安定を充分に保障するに足らない感と與へるのであります。唯併し此の留保の下に於ては、勃に對する土希の勢力は尠くも三倍の優勢を示し、之にユ、羅の加はるあり、戦前のバルカンが歐洲の火元であつたのに比し、今日のバル幹は外交的に見れば安定を増し、歐洲現狀維持派の陣營に多少の貢献をさへ爲して居ると認められます。

(又) 次に實質的貢献はない迄も現狀維持主義に精神的貢献を爲すものとして、エストニア、ラトヴィア、リチウアニア等、北方バルト海沿岸諸國間のバルト海協商を擧げ得ると思ひます。

(ル) 最後に現狀維持主義に非常の重味を寄與するものに、佛蘇同盟條約及致蘇同盟條約があります。資本主義國の間に孤立した蘇聯がゼノア會議の際、ラバロ條約を以て露獨接近を企圖した時に較ぶるときは實に隔世の感があるのであります。其の後新經濟政策に伴うて國交の恢復と不戰條約締結とに轉換し、今や甦生し來つた大軍國露西亞は孤立主義を棄て、資本主義國への反對をやめ、手段として一國社會主義に轉換し、利權政策に依り多少の外資を利用し、國民經濟を全部的に國家の最高目的に動員し、第一次第二次五年計畫を遂行し、重工業、輕工業を起し、芬蘭よりアフガニスタンに及ぶ隣接國と不侵略條約、仲裁裁判條約、中立條約、侵略國定義條約等を結び、土耳其、波斯、アフガニスタン等にはダンピングに依り安價品を供し、國際航空路を開きて接近し、西方の外交戰線を強化し、國際聯盟に加入して全歐の問題に發言權を獲得し、列國の第二インターと結んで獨裁政治に警戒し、人民戰線を勃興させ、米國とも平常關係を恢復し、現在及び未來の各般の協力の出發點に資し、英國とも接近し、日獨同盟説を宣傳して日獨の孤立に努め、常

に其の地位の強化に成功して居るのであります。斯の如き百八十度の外交政策の轉換が極東の事態、特に日本の禍心を口實として宣傳した上實行されて居る事は心外と云はねばなりません。蘇聯は今や東方規約の不成立、獨逸の勃興を前にして單獨媾和や五十億に近き債權の踏倒しで、露に深怨を抱いてゐるが露國の空軍を高く評價する佛國と同盟し、歐洲均勢の不可缺の要素となるに至りました。五年又は十年前の蘇聯に比し實に著しい變化であると申さねばなりません。極東に於ては蘇聯は外蒙と同盟して之を藥籠中に收め、其餘勢を新疆に伸べ、紅軍と連絡して之を支援するのみならず、支那の以夷制夷策の脊骨とならんとしてをるのであります。而して滿洲國を二十三萬と算せられる陸、海、空軍を以て取巻き、極東特に支那本部民族主義を煽らんとしつつあるのであります。而して機微な支那の動きは日本が今や反て押され氣味であると云ふことから割出されてゐると聞くに至つては、極東安定力の手前我々は無關心であり得ない次第であります。兎も角此の極東に於ける蘇聯地位の強化は、其の反動として西歐に對する蘇聯の威嚴をも同時に高むるものであらねばなりません。

唯蘇聯の地位を聊かながら脅かすものとしては、先づ芬蘭を擧げ得る。芬蘭人はカレリアに澤山居住して居り、芬蘭は此の地方を合はせんと欲して居るので、蘇聯は此の方面より芬蘭人を他に移住せしめて問題を解消せんと試みて居ります。勿論芬蘭人は豪勇でありませうけれども、大勢を動かすことは出来ぬものと私共は見るのであります。次に波蘭は元より蘇聯の敵ではないけれども、領域内に多數のウクライナ人を包含し、嘗てはキエフよりオデッサに及ぶウクライナを領有した事もあり、東方發展の潜在意識はあるも五年計畫、第二次五年計畫と進展して、重工業より輕工業迄も發達させた蘇聯とは勿論太刀打すべくもなく、獨立の際露國より取戻した國土は、未だ未開發で相當長年に互り植民と

原始産業の創設を必要とするのでありますから、侵略の雄圖は今持たないと見るべきでありませう。東にも西にも無理のある波蘭は、所詮獨露の間に立ちすくまざるを得ないのであります。最後のドタン場に如何なる動きを見せるかは、獨露國力の今後の發展と機先を制する最初の衝突時の成敗利鈍の影響されると思はれるのであります。

以上の外現狀維持派の頼みの綱として國際聯盟がありますが、之は充分豫見された如く、日獨の脱退、伊エ紛争等で其の實相を遺憾なく暴露させて仕舞うたのでありますから、本講演の目的から云へば大體無に等しい存在と見てよいでありませう。ドナウ規約も考へられましたが、吳越同舟の協約に如何程の價値があるでありませうか。股鑑遠からずロカルノ條約に之を見ることが出来ます。ドナウ協約の成立の見込は、先づないと見る方が當つて居らぬでありませうか、之を後日に徴する外ありません。地中海ロカルノの方も倫敦海軍會議以來度々話題には上つて居りますが、之も亦實現性に乏しい様であります。既に對伊制裁の爲に出來た英、佛、土、エ希間の地中海相互援助條約は佛、希等に依り破棄されんとして居るのであります。

三、現狀打破派

1 獨逸は佛國の爲に、アルサスローレン人口百八十七萬、波蘭の爲に西プロシアの大部分、東部及び上部シレシアの一部其の人口二百九十六萬、チエツコスロワキの爲に上部シレシア、同盟國側の爲にメーメル其の人口十四萬とダンチツヒ其の人口三十三萬、白耳義の爲にオイベンマルメデイ其の人口六萬、丁抹の爲にシュレスウイヒの一部、要するに歐洲領土の一割三分を失ひ、右の外植民地の全部を失ひ、炭坑の一割六分、鐵鑛の四割八分、鐵工業の一割九

分、亞鉛工業の五割九分、鉛工業の二割四分、獨逸全生産力の一割五分を失うたのであります。凡そ人生は迂餘曲折を経て進むものと覺しく、戦争も反動であれば、平和條約も反動であるのであります。従つてヴェルサイユ條約が戰敗國に殘酷であることに決して不思議はない。どうも敵を受することは人間には六ヶ敷いと見えるのであります。平和主義者の立場から此の平和條約の履行を確保する爲には初めから講和條約を寛大にし、歐洲の國境を精神化して行き、歐洲關稅同盟とか歐洲聯合とかへ進むことが必要であり、聯盟規約第十九條等は此の意味にて挿入されたものであると思はれます。然るに講和條件が苛酷であれば、武装解除其他の強制手段も苛酷であり、従つて逃避、抵抗、再武装の要求も痛切とならざるを得ません。そこで戰後各國は之又必要に促されて軍事的軍擴をやつた上に經濟的軍擴をやつたのであります。國境は愈々不退轉の障壁と變つて來ますので、必然的に戰敗國の現狀打破主義が非常な底力を以て勃興して參るのであります。

現行法は或る視角からすれば正義であるが、他の視角からすれば、實に鐵鎖の如き不正義であり得るのであります。ナチスの擡頭と云ふものは、國內的には猶太人排撃であつても、國際的にはヴェルサイユ條約に對する公然の反撃の潮に乗つたもので、其の重點は後者に在ると見るのは僻目でありませうか。兎に角ナチスは破竹の勢で、ヴェルサイユ條約を引裂かんとし、賠償條項の反古となり、ラインランドより國際軍の撤退した後を受けて、ザール河地方を回收し、聯盟より脱退して、ヴェルサイユ條約の軍事條項を破棄し、佛國が第三インタナショナルの一部となり、露の命令を奉

する際、佛蘇が二國丈けて侵略國をきめると云ふ佛蘇相互援助條約は、ロカルノ條約違反であると稱して、ラインランドに進駐して、ロカルノ條約及びヴエルサイエ條約第四十二條乃至第四十四條を破棄し、今や又ダンチヒを聯盟の國際行政より獨立せしめんとし、機會あらば奧地利の現状打破主義、即ちアンシュルツスの民意を迎へて、之を併合して大獨逸を建設せんとして居るのであります。其の實現の曉は云ふ迄もなく今でも三百萬人の獨逸人を含むチエツコスロヴアキ一の運命は風前の燈と云はねばなりません。波蘭も之に類する様になるのであります。獨逸の次の主張たる植民地回收運動は一寸成功すまいが、時を経る毎に執拗に繰返し主張されることでありませう。兎に角奧致波三國に掛けて、此の方面には蔽ふことの出来ない一大危機が掩ひ掛つて居るのであります。

ヒットラーがアルサスローレーン問題を提起せずと云うたのは、獨逸の未來は東方に在りと云つたのと對句を爲すもので、獨逸は次の戦争には西部戦線を守らんとするものであると私は推察致します。従つてラインランド進駐後要塞を築かない様にと云ふ佛國の希望は顧みられる筈であります。屹度トーチカが吃立して來るでありませう。獨逸は英國に對しては是非共中立を維持させようと努め、海軍の保有量及び海岸要塞は守勢を示して居るのであります。ナチスは、獨逸本國內を集約的に耕して原料を得る外他意なきを示さんとし、獨逸の未來は東方に在りと云つたのは嚮導者ヒットラーが無責任な地位に在つた當時の放言に過ぎぬと打消して居る次第であります。獨逸が軍備平等權を得た後に如何に英國に迎合して西方に守勢を取らんとしてをるかば、ラインランド進駐當時佛國に於て四關係が豫防戦争を主張した當時獨逸から

(一) 佛、白、獨逸に平等且つ相互主義の無防備地帯を協定すること

(二) 二十五年間有效の佛獨不侵略條約を締結すること

(三) 英、伊は保障國として右協定に加盟すること

(四) 和蘭國にして希望するに於ては右協定に加盟すること

(五) 空襲の脅威除去の爲西歐諸國間に空軍協定を結ぶこと

(六) 獨逸の東隣諸國間に不侵略條約を締結すること

(七) 平等權の要求充足せられるに於ては、ロカルノ條約に復歸を妨げざること

と云つた様なロカルノ條約代案を提出した經過に徴しても明瞭であるのであります。其の際は、英國は對案を提出し、ラインランドを國際化し、國際聯盟保障下の國際軍にて之を占領すること、二十五年間有效の不侵略條約を結ぶこと、移民、原料、植民地問題を再検討すること、軍縮會議を開催すること、西部空軍協定を結ぶこと等を提議したと傳へられて居りますが、三月中の倫敦善後會商では假措置として獨逸よりの攻撃に對し英國が佛白を援助すると云ふ暫定的の約束が結ばれ、追てロカルノ條約に代るべき一般歐洲平和協定を立案することが約束されたに過ぎませんでした。

獨波關係は本來現状打破者と現状維持者との對立關係から尖鋭化する一方であるべき筈であり、又現に少數民族問題ダンチヒ問題で争つて來たのであります。複雑な事情、特に蘇聯獨逸雙方の勃興が波蘭をして獨逸に一應接近させたのであります。當時或る者は秘密條約の存在を推定したのであります。夫はまだ事實でない様であります。獨逸から波蘭に歸屬した諸地方は波蘭としては國をなす以上は歴史上、經濟上、工業上將又民族的に不可缺の地方であつて、獨逸も亦百五十萬餘の同胞を永久に見殺しにする事は出来ないであります。故に獨波關係の根本的整調は非常の難事と

申さねばなりません。加ふるに獨逸も大戦中ウクライナを占領して善政を布いて脱服された經驗を持つてをります。西方にて前述の如く佛、白及び英に對して守ると云ふ政策を取る以上は東方での進出は是非共必要であるのであります。佛蘭西以下も實は達觀すれば、獨逸の西進を阻む以上は其の東進を阻まぬ方が、眞の政策だとも云へるのであります。惟て東方では波蘭が舊獨逸を獨逸に譲り、大波蘭の歴史を追うてキエフより、オデッサへの道を打ち抜き、獨逸がバルチック海より進出する如きことは、積極的協力の基礎ではあるまいかと人は考へることでありませうが、他に第三、第四の要素が加はらなければ、斯様な協力は餘りに六ヶ敷く組織化出来ないと判定されます。従て若し萬一、五年、十年又は二十年後に歐洲に異變あらば、夫は平時の分野と戦時との分野に相當の開きを生じ、戦後には非常な政治的混亂を伴ひ、歐洲政治地圖に根本的な一大變化を齎らすに相違ありません。

ミュンヘンとドレスデンとの間に深く侵入した致須國と獨逸とは兩立し得ません。塊の合併が延期されても終局的斷念は六ヶ敷でせう。兎に角波蘭、チエツコ、塊をひかへて獨逸は氣長に之を一つづつ解決して行く策に出づべきであらうと思ひます。ピスマークは普塊、普佛戦争を二回にやつて居ります。此の回数が多い程外交は成功するのであります。大戦中殆んど世界全部を敵として東部バルカン西部の三戦線共之を威壓し、唯孤立持久戦の爲に經濟的行詰りから破綻を招いた獨逸人は、負けても殆ど勝つた氣で居るのであります。其の陸軍は多分今や既に歐洲第一であらうし、其の精神力に於ては歐洲中之に優るものはあり得ません。之を包圍する陣營の同盟は二重三重に出来ても其の協力は相對的且條件附で此の陣營の軍備の可成りの量的優越に拘はらず開戦後の歸趨は、相當怪しくなつて參るのであります。兎に角、獨逸の今日の實力は既に現状打破派の首領として、全歐を震撼させるに充分であると見るのは僻目でありませう。

か。斯様な歐洲の動きを適確に見透し、之を有利に導き、極東の不安定力を聊かたりとも削減することが、我國政治家の課題であらうと存じます。特に大切なことは佛、伊葛藤解消の代價をエチオピアが支拂はされたやうに、全歐葛藤解消の代價を、東亞が支拂ふと云ふ様な勢を順致しないことでもあります。

(口) 塊地利の現状打破主義は主として獨逸との併合問題として發現して居るのであります。全獨逸民族の統一はピスマーク當時に於て考へられないことはなかつたのであります。併し普魯西即ちホーヘンツォルレン家制覇か、塊地利即ちハプスブルグ家の制覇かと云ふ問題にも引懸り、前者は新教にして後者は舊教であり、前者が獨逸民族一色であるに引換へ、後者が異民族を包含した非民族國家であると云ふ理由から、塊地利は獨逸聯邦の圏外に立つて、後年には獨逸の汎獨政策の手先となり、其の支援の下にボスニア、ヘルチエゴヴィアの併合を實行した次第でありました。

併し世界大戦終了後獨逸合併問題は急に日程に載せられました。夫は一九一八年十一月の塊國假憲法第十二條に「獨逸系塊地は獨逸共和國の領土的部分を構成す」と規定され、翌年八月のワイマル憲法第六十一條第二項に「獨逸系塊地は獨逸國に合併したる後其の住民數に應ずる投票權を以て獨逸國議會に参加するの權利を有す」と規定されて居る爲めであります。此の事は必然的に主たる同盟及び聯合國側の利益に重大影響があり、従つてヴェルサイユ條約第八十條サンチエルマン條約第八十八條にこれを阻止する意味で、獨逸の併合は聯盟理事會の同意を要する旨規定して居るのであります。

世界大戦後の平和克復が獨逸合併を急展開させた理由は面積二十六萬平方哩、人口五千數百萬を算した塊地利、洪牙利國が爆破して仕舞ひ、特に塊地利が戦前面積十一萬五千平方哩、人口二千八百萬より面積三萬二千平方哩、人口六百

五十萬に縮小され、面積に於ては僅に從前の二割八分、人口に於て從前の唯二割三分を保留するに止まり、中歐の雄邦を扶養して來た經濟的背景を全く失うて仕舞つた結果であります。即ち奧地利はチエツコスロヴァキアの爲に硝子、麥酒、皮革、レース化學、纖維各工業の中心地であり、且、石炭、大麥、甜菜の産地たるボヘミア、石炭、裸麥、葡萄の産地たるモラヴィア、農牧兼林産地方たるカルパチヤ地方を失ひました。波蘭の爲に石炭産地たる上部シレシヤ、石炭、石油、岩鹽に名あるのみならず、レンベルグと云ふ工業中心地を取容れたガリシヤを失ひ、ユーゴスラヴィアの爲にイストリアの一部、ボスニアヘルチエゴヴィナ、グルマチヤを失ひ、伊太利の爲にトレンチノ、トリエストの海港を含むイストリアの一部等を失うて仕舞つたのであります。

殘餘の新奧地利共和國は全人口六百五十萬人で九割五分迄獨逸人であるが、海口を失つた唯の山國となり、石炭、化學藥品、脂肪、羊毛、銅、石油は全部外國に依存し、蜀黍、大麥、小麥、ライ麥は大部國外よりの輸入に待ち、併も人口二百萬と算せられる維納を養はなければならず、歳入は歳出の漸く三分の一で外國貿易は巨額の入超を示し財政的輸血なくしては到底維持出來ない有様に陥つたのであります。茲に同民族たる獨逸と合併して大なる經濟プロツクを形成することに活路を見附けようと有識者が考へるに至つた根本原因があるのであります。別案としては奧洪關稅同盟があるが、之にも奧洪國の復活と見て佛國や小協商やらの大反對があつて、一寸實現は困難なのであります。

惜てアンシユルス問題に關し、獨逸は奧地利との合併に依り大戰後に失ひたる歐洲領土及び其の人口を償うて餘りあるのでありますから、獨逸帝國主義の甦生が、先づ奧地利合併に於て片鱗を示さんとするのは、極めて當然の成行であるのであります。

夫で合併運動は一九二一年春最高調に達し、中央政府の布令に違反して人民投票を行ひ、獨逸との合併を可決した地方もありましたが、其の後は前述の平和條約の規定を楯に取つた列國の反對運動、獨逸がルール地方の占領を招來して極端なるインフレーションに陥つたこと、奧地利が聯盟保障の下に列強より七億八千萬金クローネの融資を得たこと等の原因で、一應は全く下火となつた様な次第でありました。

中途ドーズ案の成立、獨逸幣制の改革、ロカルノ條約の締結、獨逸の聯盟加入等に依り、獨逸合併の再燃を見たこともありません。後一九三一年に至り獨逸關稅同盟説も傳はり、世界の耳目を聳動しました。關稅同盟は歴史的必然性の立證する新併合への前驅と看做されますので、佛國が率先して之に反對し、英國資本一億五千萬志を以て、當時の奧地利銀行恐慌は救済され、佛國資本を以て獨逸の恐慌も救済され、關稅同盟は拋棄せられるの止むなきに至りました。併し最近に至りヴェルサイユ條約よりの解放を使命とするナチスが登場し、一切の獨逸民族を打つて一丸とする完全民族國家の建設を理想とする運動が熾烈となり、獨逸のナチスより奧地利のナチスに動き掛けることとなり、遂にナチス一黨のドルフス殺害事件を惹起するに至りましたが、爾來伊太利を急先鋒とするストレッツァフロントの壓力でヒットラーも奧國の獨立を尊重し、内政に干渉しない旨約束し、小康状態に在るのであります。伊エ紛争中の伊太利とヴェルサイユ條約を引裂く獨逸との間には協力があつた様であります。奧地利問題では獨逸の要求は調和の餘地なく、獨逸、伊同盟など現狀維持の下に他所に併行的に進出すると云ふ了解でも新に成立しなければ、一寸其の實現を信じ得ないのであります。兎に角合併問題は佛伊の賛成するハプスブルグ家の復辟と共に、歐洲列國の頭上に懸垂されたデモクリタスの劍であることに變りありません。之が奧國の逃避的現狀打破主義の眞の貌であるのであります。唯此の方に進展出

來ない結果として佛伊の賛成する復辟の第一歩を實現し、一九三四年三月の羅馬議定書を強化して、伊、埃、洪の經濟的文化的ブロックを形成し、ダニウツ規約を排斥し、唯二ヶ國限りの條約を以て小協商國とは協力しようとして居ります。此の動向の積極的現はれとして、兵員數十五萬人の徵兵制度を布くこととなり、洪勃にも範を垂れて居ります。埃地利も矢張動的の進路を示して、其の現狀打破派たる所以を裏書して居るのであります。

(ハ) 洪牙利は現狀打破派の第一の使徒であります。第九世紀から世界大戰末期に至る迄の洪牙利は、面積十二萬五千平方里人口二千百萬人を有しドナウ河の谿谷を成す沃野を領有し、フューメに於てアドリアチック海に吞吐口を有する一大經濟運営でありました。然るにトリアノン條約の結果として、新興國チエツコスロワキ一の爲にスロヴァキア州面積六二、二二二平方吉米、即ち總面積の一割九分一厘、洪牙利人一、〇六六、八二四人を、羅馬尼の爲にトランスシルヴァニア面積一〇三、〇九三平方吉米、即ち總面積の三割一分七厘、洪牙利人一、六六三、五七六人を、ユーゴスラヴィアの爲にクロアチア及びスラヴォニア面積六三、一一三平方吉米、即ち總面積の一割九分四厘、洪牙利人五七一、七三五を、埃地利の爲に面積四、〇二〇平方吉米即ち總面積の一分二厘、洪牙利人二六、一二五人を失はしめられたのであります。即ち洪牙利は總面積の七割一分四厘を失つて二割八分六厘丈けを剩すこととなり、面積三千五百平方里、人口八百萬の一小邦と化し、國外に三百三十二萬人のマチャール小數民族を遺棄せざるを得ないこととなつたのであります。

此のマチャールは經濟的には、今でも埃地利よりは遙かに恵まれて居るのであります。夫でも財政困難の爲一九三一年には佛國から二千五百萬弗の借款を起して、其の代償として國內に於ける平和條約改訂派の政治的活動を抑壓し、

一九二三年と一九三二年とは聯盟から夫々五千萬弗、二千萬弗の借款を起さざるを得ませんでした。今迄マチャールの貴族や富農がセルビアに合併されたドナウの沃野や、トランスシルヴァニアに於て所有した莊園は、頗る善美なもので、南方スラヴ系民族や、羅馬尼人やスロヴァキー人やの小作人を搾取するに役立つたもので、之でブタベストの高度の生活が出来たのであります。今日では之が殆んど全部失はれて仕舞ひ、洪牙利政府は主として羅馬尼の農政改革の爲めトランスシルヴァニアに於て土地を失つた洪牙利小數民族の權利の爲に隣國と始終衝突を續けて來てをり、ユーゴスラヴィア内のクロアチア人の自治運動、致須國內のスロヴァイク人の自治權獲得運動を支持して参り、平和條約の改訂に依る失地の一部又は全部の恢復を、經濟的復興の捷徑であると考へて居るのであります。此の要求を貫徹する爲同様の要求を有する獨埃兩國並に埃國に親善にして獨埃合併を除く外改訂運動を支持する伊太利と接近し、伊、埃、洪經濟ブロックに加はりました。此の改訂運動の擔當者には洪牙利保全同盟マチャール民族同盟等があつて失地恢復を策し、或は獨逸のナチスに接近せんとし、或は伊太利に依頼せんとして居るのであります。併し國際聯盟外に在つて孤立しつ獨力ヴェルサイユ條約の破棄に邁進し、伊埃とも對立關係にある獨逸のナチスとの表面上の協力は頗る都合の悪いことでもありますので、一見改訂派に屬する伊太利と親善關係を結び、伊埃兩國と通商條約を結びて特惠關稅主義を適用し、一九三四年伊、埃、洪三國首相會議の結果羅馬政治經濟協定を結び、締約國は互に其の獨立を尊重しつ經濟的復興招徠の爲に協力すべき事、三國の經濟關係促進の爲特惠關稅を設くべきこと、伊太利は埃洪兩國の爲にトリエスト港の利用を認むることを約し、更に最近補足的政治經濟協定を結び、伊、埃、洪の三國は政治的にも經濟的にも文化的にも協同動作に出で一團結を構成すべきこと、締約國の一は豫め他の二國と商議せずして、第三國とダニューブ問題に關

して政治的交渉をしないこと、三國政府は他のダニューヴ沿岸諸國と經濟的に接近するを有利と認めるも、當分之二ヶ國間の條約締結に依りてのみ促進せらるべきこと、三國外相より成る常設協議機關を設けること等を決定しました。之は此の中歐三國の經濟ブロックを結成し、之を強化するもので歐洲問題に對する此等の國々の發言權を強め、再軍備を始め、平和條約改訂に進まんとするもので、其の小協商に對立し、之を牽制せんとする意味は頗る明瞭であります。嘗て小協商や佛國や聯盟は小協商と塊、洪二國とを打つて一丸となし、塊洪を小協商の擁護に委ねんとして所謂ドナウ規約の成立を策したものでありますが、此の伊、塊、洪ブロックの出現で、右ドナウ規約案は成立し得ざるのみか、明瞭に反對され、小協商は稍押され氣味とならうとして居ります。勿論目下は洪牙利も財政窮乏の爲め聯盟や英佛に依存せんとし、小協商とも折合ふことに努めて居るのであるが、之が決して中歐の實相であるとは思はれません。今後自由な獨逸が益々國力を回復して來るに伴つて、改訂派の急先鋒洪牙利の後立も強固となり、再軍備の要求を手始めに洪牙利も大膽に動き出すことと思はれます。既にアレキサンドル一世のマルセイユに於てクロアイト人革命家の手に非業の最後を遂げさせられた時には洪牙利がクロアイト人の背後に居り、伊太利が洪牙利の背後に在る關係上、此の三國の關係は極めて緊張し、洪、ユ開戦に至る惧もありましたが、聯盟の仲介、小協商の穩和な態度、洪牙利の多少の讓歩で幸ひ事なきを得ました。併し將來洪牙利に向けられた小協商の矛先は獨、塊、洪の同盟軍又は更に之に伊太利及勃爾牙利同盟軍を加へたものに或る戰線に於て出會す運命に置かれて居るのではありますまいか。

(二) 最後に現状打破派の陣營に協力する者にブルガリアがあります。同國が希臘、ユーゴスラヴィア、羅馬尼の三國に對して有する失地に關しては既に詳述した通りであります。同國が巴爾幹協商に参加を拒否した理由も既に述べ

た通りであります。巴爾幹協商側のブルガリアに對する數量的優勢は勿論明瞭であります。全歐を揺らぐ大きな波の押寄せるときには、ブルガリアも矢張潮合を見て立上るに相違ありません。伊太利の連衡策はブルガリアへも延び、兩王室は姻戚關係に在り、一九三三年當らず觸らすとの政治協定も出來て居ります。一九三五年三月の希臘革命に際しては、勃國は國境 動員し、爲に土耳其も動員して之を制するの態度に出でました。此の動きを我々は常に記憶して置く必要があるのであります。

(四) 結 論

十五、六年前は世界孰れの國に於ても國際聯盟譏論者は随分多數でありました。日本の聯盟脫退以降は、獨逸其他の聯盟脫退、伊エ紛争等で聯盟の打撃を受けるのを痛快がる論者も亦た數ある様であります。併し私から申せば孰れも感心出來ぬ態度であると申さねばなりません。本來世界の實相を見れば五十何箇國の集合が聯盟で、實在するものは五十何ヶ國の個體であつて、聯盟の方は遺憾ながら假の結合であるに過ぎません。一方無暗に之を國際道義の總本山の様考へて禮讃するのも當らない話であるし、他方聯盟が打撃を受けたからとて、何處にも自國が打撃を受けたと云つて痛痒を感じる國は居りませんから、之を痛快がる理由もないわけであります。

聯盟の如き普遍的協力——夫は結局本質的基礎が無いから追々人道問題や技術問題位しか取扱へなくなる傾向を持つであらうが——其の地方的構成であるロカルノ體制の如きは舊同盟條約と異なり、對立する假想敵を設けない點に於て平和の保障として勝つて居ると評せられて來たのであります。斯の如きものの成立は分割して支配しようとする英國

の中立態度、成るべく歐洲問題に深入りすまいとする米國の態度等、不即不離 (Middle road policy) を採用せんとする國に負ふ所が大であります。余輩は嘗てロカルノ條約を検討して、結局それが獨逸の西部國境に關する英佛保障條約の變形なる點に重點を置き、實體は同盟條約たる所以を顯現すべきを豫斷したことがあるのでありますが、獨逸のロカルノ條約破棄に當り、佛國及び白耳義に斷然豫防戰爭の決意なく、英伊も進んで其の義務を履行しなかつたが故に、反對に廢紙に歸したのは悲惨なる現實曝露でありました。地上に既に軍備が存在すると云ふことが對立する他團體の存在を豫想せしめ、其のこれあるが故に平和は常に「軍國主義的意義に於ける平和」となり、其の必然的發展として敵方と味方と云ふ分野を生ずるのであります。學者が鬭争と同盟とは社會的運營を營む群團に、同時に並行する現象であると云ふのは、これが爲であります。勿論中立と云ふ地位の存在は之を認めなければなりません。歐洲に於てはスカンデナヴィアとイベリア半島、全世界に於ては南北兩米大陸であるが、前者は歴史的背景と地理的地位に淵源し、後者は米國の中立政策とモンロー主義とに淵源して居るのであります。併し米國すら世界大戰には参加し、日本と太平洋を挟んで海軍競争をやつて居るのであるから、世界的に見て中立は例外であつて、原則ではないと斷言して差支へない様であります。私が歐洲の現状維持派と現状打破派とを對立せしめて、其の兩陣營を一瞥したのは、之が眞に現實の貌で、聯盟規約とか、ロカルノ條約とかは中立と同盟とを混和した鵝的存在で、試練の瞬間に同盟の中に貌を没し去ると殆んど疑なきが故であります。

私は一體平和と云ふ當爲は生々發展するもので、凝然不動の存在ではなく、従つて人間には追ひかけることは出来ても、接近することは出来ても、捉へられないと云ふ様なことを考へた事がありますが、最近讀んだスフォルザ伯の本講演と同一の問題を取扱つた、Les Irres éminents と云ふ本に次の様なことが書いてあるのを發見致しました。「若し絶對的の安全が存在したならば、夫は多分退嬰廢頽の原因となるであらう。丁度支那の秦朝が難攻不落と思はれた長城の背後に隠れた時の様に。一國の安全は戀愛中に於ける幸福の如きものであつて、各人が毎日新に創造せねばならぬ筈のもので、幸運なる奇蹟にも似てゐる。決して此の奇蹟を永久に確保してくれる様なほれ薬も城砦もあるものではない。」

だから聯盟やロカルノ機構が今日の爲體であるのに不思議はなく、新ロカルノ外交交渉や、例の歐洲聯合案などから今迄よりも著しく變つた結果が齎らされようとも思はれません。加之今の軍擴競争が行詰つて將來再度軍縮會議時代が現出しても今迄よりも、著しくよい結果が現はれるとは想はれません。従つて歐洲の國際政局は前迄述べ來りました對立關係が、最も根柢的のものであつて、歐洲に織出される歴史の波紋は、著しく右對立關係に吻合するであらうと、大膽ながら揣摩致す次第であります。

今右様に多數の現状維持派と少數の現状打破派との兩陣營に區分對立せしめた基礎の上に、聯盟の軍事年鑑其の他の資料に基いて、假に平時兵力の比較をやつて見ると、次の如くなるのであります。尙小協商と塊洪國とは平時兵力で比較すれば、前者は後者に六、七倍し、綜合國力で比較すれば前者は後者に三倍すること。土、希兩國の勃爾牙に對する優勢も略同様であることは既に述べた心算であります。

現 狀 維 持 派

國名	兵員數	飛行機	タンク
國名	兵員數	飛行機	タンク
佛國	六十萬	四千五百	千七百
英國	三十五萬	千五百	四百七十
伊太利	三十五萬	千五百	二百五十
蘇聯	百三十萬	四千	五千
波蘭	三十三萬	七百	三聯隊
白耳義	七萬	百九十五	二十四聯隊
羅馬尼亞	二十四萬	八百	不明
ユーゴスラヴィー	十八萬	六百	不明
チエツコ	十四萬	五百五十	不明
希臘	六萬	百二十	不明
土耳其	十九萬	三百七十	約八千
(計)	三百八十一萬	一萬四千八百	

現狀打破派

獨逸	五十五萬	二千五百	不明
奧地利	十五萬	〇	〇
洪牙利	三萬五千	〇	〇
勃爾牙利	二萬	〇	不明
(計)	七十五萬五千	二千五百	不明

〔註〕 奧地利の徴兵制度採用は、將來一層同國の軍備を擴大すべく、洪牙利も勃爾牙利も約十五萬の平時兵力を有するに至るであらう。

右様の統計表を基礎として推定しますれば、未だ奧地利が徴兵制度を布いた丈りで、洪牙利、勃爾牙利などは綜合國力に應ずる丈けの兵力を持たないのでありますが、其の結果大體に於て現狀維持派は戰時膨脹力や精神力やは之を留保して、現狀打破派に比し約五、六倍の優勢を示して居るのであります。獨逸側が目下佛蘭西は三百萬人即ち全世界の兵力の半分を支配して居る。脅威を感じるのは獨逸側だと云ふのは、決して無理もないことでもあります。此の見地からすれば現狀維持派に決定的優勢があつて、平和は微動だもする筈はありません。

然るに前述の理由で假に英國が中立を保つものと見做し、伊太利も自由主義の隨勢による他主消極追隨外交たるロカルノ・フロントやストレッツァ・フロントを拋棄して、伊、奧、洪政治經濟文化聯盟を形勢して、小協商に對抗して現狀打破派に投じ、獨逸が南方奧地利の合併問題を寢かして置いて、餘剩精力を唯の一點より氾濫せしめることに依り仕事を爲すの策に出で、東方國境の一部例へばチエツコスロヴァキア丈けの國境を突破せんとして、其の爲めに併行東進す

る獨、伊の協力も出来ることとなり、波蘭が少くも佛國との義理をすてて中立し、若しかして嘗て親獨であり、今やフアッシュ的であり、戦争の分野に關しては中立に出でんとする傾向を示す希臘土古耳も亦中立することとなれば、現状維持派の量的優勢は、辛うじて約二倍に過ぎないこととなつて来るのであります。

右の形勢に加ふるに開戦の翌日、佛、白同盟軍が獨逸の築城と其の少數の守備軍とに阻まれて東部戦線と呼應出来な
いこととなれば茲に初て頗る五角に近い形勢を誘致して参り、獨逸はタンネンベルグの剽滅戦やベルグラードの敵前渡
河を決行し、早目に終局の勝利を收めうるかも知れぬこととなつて参るのであります。蘇聯が同時に相當の軍隊を極東
に割いて置く場合に於ては特に然りでありまして、獨逸も亦分割して支配するの戦法に出で東部と西部との二面作戦を
避け、東方に於てもメーメル、エストニア、リチニア波蘭、チエツコ、澳地利等を各々別個の問題として其の一部
丈けつ解決することとすれば、茲に獨逸への機會は恵まれるのでありまして、我々は歐洲の外交と軍備との消長を注
意して見守る必要があるのであります。世の中には氣早い人があつて、或は一年半か二年内に歐亂が発生すると説く者
もありませんが、多數の人は十年、十五年、二十年後に何事かを期待すると云つた有様であります。

最近代の戦争は空軍の爲め非戦闘員を戦争に参加させ、空軍戦に機先を制すると云ふ必要が痛切に感ぜられて來まし
た上、獨、伊、露の如き獨裁國家が全國力を軍事に傾て平時から總動員に近いことを致しますので、愈々軍擴の形勢を
馴致して來ました。我々も徹底的に經濟的效果的にして、持久力ある武裝國家の備を固めて、敏速に併しながら天の秋
を待望して、氣長に前進しなければなるまいと考へます。(昭和十一年六月二十二日、専修大學同窓會に於いて講演)

第二章 歐亞潜在戦争の内攻

歐洲國際政治關係の新發展は、前章に「歐洲潜在戦争の陣營」の舊稿を載せて置いたから、筆者に取つては比較的容
易な仕事である様に思はれる。特に走馬燈のやうに變化する近時の國際情勢に鑑みて、最近六七ヶ月間の新發展が、右舊
稿の基礎の上に殆んど論理的に繰繰げられて行くのを見るのは、筆者の欣幸とする所である。余輩の一事稍々意外とす
るのは、西班牙の政府軍と叛軍とが、今に至るも互に増大する雜多の、併し時に信念に固つた外人部隊に掩護されなが
ら、軍難の様に取り組んで居り、而て此の一國內に對立する國民、人民戦線に片や蘇聯、片や獨、伊、葡が其の最良の爲
に、虎視眈々聲援を與へて、一見人民インターナショナルと國際インターナショナルとを展開させて居ることである。
第一に現状維持派の陣營に於ては、英國が此の陣營に屬しながら尙一方獨、伊他方佛蘇の兩プロツクの對立に對し、
中立的の役割を演ずると云ふニタ役を買つて居た所、破壊せられた舊ロカルノ體制に取つて代るべき新ロカルノ體制の
誕生の到底困難なるに鑑み、今度は愈々巴里平和會議當時の英佛、米佛保障條約の傳統に立ち歸り、獨逸よりの侵寇に
對し白耳義に兵力援助を内容とする安全保障を供與し、今又日獨防共協定の餘波をも受けて佛國に對しても之と同一の
保障を與へんとするかに傳へられて來た。即ち英國は前述のニタ役の執れをも抛棄しないのだが、先日迄に獨逸が uni-

の中心であつたから之を庇うたのであるが、今や又此の負け犬に似通うて來た佛蘭西を庇はんと欲して中立よりも寧ろ現状維持派の立役者たる役割の方が稍々鮮明になつて來たのである。十一月五日英外相イーデンは、國際聯盟の威信を高め、歐洲平和機構を確立し、英國國防を全般的に強化すべきことを提唱して居るのであつて、英國は愈々確かに現状維持派に屬し、只分裂して支配するの政策の各場合に於ける運用の妙を、其處に端視せしめて居るに過ぎないのである。

現状維持派の内に於て、白耳義の最近の舉措は、著しく全世界を驚かした。十月十四日國王臨御の下に、白耳義内閣會議が開かれ、兵役延長、裝備機械化の問題が議せられたのであるが、その席上に於て國王は、軍備充實の必要となれる理由として、獨、伊、蘇等の軍擴競争、獨逸軍のラインランド占據、白耳義國境兵力集中、近代戦争の機械化、聯盟保障の無効、同盟國の救援の遅延、人民國民兩戦線の國內的及び國際的對立を擧げ、同盟は却て他國の白耳義侵襲の口實となり得べきに鑑み、隣國間の戦争に捲込まれるを避くる爲め獨自の地位を維持し、専ら且つ全面的に白耳義本位の外交政策に精進しなければならぬと揚言せられた。之は戦前の永世中立を恢復したものでないことは勿論であると同時に、白耳義をして現状維持派の陣營より、完全に脱却せしむるものでもない。勿論白耳義は佛、白同盟條約以來、佛國の完全なる腰巾着になつたと評されたのであるが、現今佛國の様には人民戦線と國民戦線との對立激化し、社會的解體の危機さへ孕む國とは、内政上全く同一の立場に居らず、ロカルノ體制や佛白同盟條約の立場から見れば、獨逸の侵入の場合のみに協力すれば足る次第であるのに、蘇國の聯盟加入と佛蘇同盟締結との結果は、曩日の西部戦線に於て佛國が却て獨逸に侵入する場合をも假説として考慮しなければならぬ事となり、斯ては白耳義の負擔する危険は、其の不利益に於て増大する一方であるに鑑み、和蘭の地位等を憧憬して、此の舉措に出たものと自分には思はれる。併し此の宣言

は、佛白同盟を解消したものでなく、白耳義が果して能く、自國本位の政策を追及し得るか否かも疑問であり、英國としては佛、白が乖離して、其の孰れもが獨逸に對し守を失ふのは好む所にあらざるが故に、白耳義をして他國の侵入に對し國力を擧げて其の防衛に努むべきを約せしめ、之に對し英國は陸海空軍を以てする兵力援助を與ふべきを提議せるやに傳へられ、寧ろ白耳義も素の鞘に收まらんとするやうに傳へられてゐる。露國の聯盟加入前のロカルノ體制は、佛波同盟に拘はらず獨逸の所謂東部戦線と西部戦線とを各別個のものとして取扱ひ、東部戦線を略開放状態に置いた。等しく現状維持派と云ひ條、此の兩戦線の一方に接する國の間には連帶關係が殆んどなかつた。蘇國の聯盟加入と佛蘇同盟條約とは、此の事態を一變せしめた。之れ白耳義が佛國に追隨しては居られない。蓋し自國の危険が著しく増大したと慌て出した所以である。兎に角本事件は、佛蘇同盟が佛白關係に一小龜裂を起さしめたことを物語ると共に、東部戦線西部戦線の兩戦線の連帶不可分關係を確立すべきや否や、其の利害如何と云ふ問題が、伊太利を除けるロカルノ體制加盟國の頭上に懸垂せるを物語るものである。

筆者は波蘭が獨蘇の間に去就を決するの難きこと、佛波同盟は解消されず、獨波關係の全的調整が到底困難なること、右調整が可能となる爲には第三の要素が介入するの必要あることを力説して置いたのであるが、其の後波蘭は Edward Rydzy-Smigly 元帥を佛國に派し、佛國との舊情を温めて借款を起し、器材の供給を受け、佛波同盟條約に活を容れるに至つたが、此の事は波蘭が現状維持派との關係の到底清算し得難きものを持つて居り、従つて又蘇國兵を波蘭國境内に進駐せしめることを除いては、蘇聯とも接近する可能性を残して居ることを物語るものではあるまいか。

現状維持派中の衛星たる小協商は、全體として根本的には決して其の立場を變更しては居らない。併し羅馬尼に於て

は親佛一點張りにしてモギリフ、チエルノウイツ、ボルサを経て、致須國に入り込む蘇聯と致須國との貫通鐵道に賛成して居つたチチエレスコ外相が追はれ、獨逸のナチスに稍々同情を注ぎ、獨逸とも經濟上提携せんとする、右翼内閣が出現し、羅馬尼の親佛特に親蘇政策に多少の變調を齎らし、獨逸の巴爾幹產品需要者としての經濟上の優位が、偉力を發揮するに至つたものの如くである。此の事は依然ユーゴスラヴィアに就ても云ひ得ることである。併し之等の事情は決して結局の場合に於ける小協商の現状維持派に於ける立場を顛倒せしめるものではない。唯チエツコスロヴァキアの不利なる地理的地位より來る焦燥は思ひ遣るだに氣の毒である。

土耳其が軍縮條約を破棄せずして其の改竊を選び、列國が土耳其の主張を容認したるは、此の國が兎に角現状維持派に屬して居る事を物語ると同時に、時として或は中立維持に傾く可能性を持つて居ることを暗示して居る。此の事實は土耳其の親英政策を主とせる最近の事實とも吻合する。此の點希臘も同様と筆者は解する。

現状維持派中最も特異の存在として他主追隨消極外交を拋棄し、伊、埃、洪政治、經濟、文化ブロックを形成して居る伊太利は、今や百尺竿頭一步を進めて、當初よりのムツソリニの信條に忠實に現状打破派たるの面目を發揮し來つた。ヒットラーがヴェネチア宮にムツソリニを訪問して以來、獨、伊は埃地利問題で相離反するに至り、埃國に於けるナチスの進展、特にドルフス事件の勃發に際して伊太利のブレンネルに於ける國軍集中を目睹したのであるが、ヒットラーは大局を顧念して能く自派の輕舉を壓へ、埃地利の内政不干渉を約して、此のナチスの一大目的を暫く高閣に束ね置くこととした。此の方針は伊太利のエチオピア遠征中に於ける獨伊の接近、獨逸のロカルノ條約破棄西班牙内亂の勃發に際し、人民戰線に對抗上の必要より餘儀なくされた國民戰線の結成等に依り強化され、果ては伊太利の斡旋に依り獨埃

協定の成立を見るに至つた。其の内容は獨逸に於て埃地利の内政不干渉を確約し、埃地利は從來の獨逸に對する門戸閉鎖を撤して協力を與ふべきことを確約したものであつた。此の獨埃諒解が實は獨、伊諒解であることは云ふ迄もない。伊太利は英國提唱の新ロカルノ會議を西歐の問題であると爲して蘇聯の参加に反對し、聯盟の活用、歐洲の安全保障の強化、新ロカルノ體制の誕生を阻止して居る。ムツソリニは十一月一日未蘭に於けるフアシスト黨員二十五萬人の集合を前にして、一大獅子吼を爲し、軍縮の幻影は消滅に歸したこと、世人は嘗て存在したることなき集團的安全保障の迷夢より覺むるの必要あること、或は平和不可分、或は萬國平等と云ふが如き實際に適合せざる原則を拋棄せざれば、聯盟は解消の外なきこと、獨伊協定の重要意義を有すること、地中海に於て伊太利の咽喉を絞付んとする國あらば全伊太利民族は一人の如く起ちあがるであらうこと、伊太利は平和を重しとするも夫は武裝的平和であること等を説いた。此の演説は外相チアノ伯の伯林訪問直後に爲されたものであつて、同外相の伯林訪問に依り、獨逸はエチオピアの併合を承認し、伊太利は將來獨逸が植民地恢復に付き爲すべき要求を支持すること、獨伊は國民戰線を形成して列強に呼掛けると同時に、防共事業に積極的に協力し、特に西班牙に於ては蘇聯の政府軍援助を抑へて叛軍を支持すべきこと、埃地利洪牙利、其の他ダニューヴ谿谷に對する政策を調整すること等が協定せられたと推測せられる。斯くて最早伊太利は現状維持派の星座中には、其の席を見出さなくなつたと觀察せられるに至つた。

二

拙稿「歐洲潜在戰爭の陣營」起草以後、歐洲打破派の陣營に於ては、前述の獨伊獨埃の接近を除いては過去六ヶ月間

に特記すべき事項は比較的尠い。蘇伊關係と云ふものは電光石火の能動力を示すムツソリニの働きで、早くから平常の良好關係が打立てられ、嘗ては對日態度に於てモスコウの口吻と羅馬の口吻とに、同一轍の調子が親はれたこともある。伊太利は早くから蘇國と通商し、材料製品を賣込み、軍需品を賣込み、技師を供給し、對日軍備を助けて居る。伊エ紛争中蘇聯は聯盟至上主義を唱へて伊太利に口先では楯ついて居たのであるが、商賣上は對伊貿易で儲けることを忘れなかつた。斯る關係もあるから萬一にも佛伊、佛致同盟條約の生んだブロックに伊が塊洪物等を従へて参加することは現狀打破派の痛手である。従つてヒットラーは伊太利に誘ひを掛け、楮てこそ前述の如き獨、塊、伊の接近を見たものである。併し獨伊の諒解は植民地問題、塊洪其の他ダニューズの豁谷、西班牙内效に關する、態度等に關するものと想像され、それ以外に現狀打破派としてのデシデラタに於て、明瞭に共通又は併行の目的を設定して居ると信すべき理由がないから、獨伊協力の質量及び威力に至つては、稍疑問を容れるの餘地が充分に在る。夫にも拘はらずバルチックより地中海に互つて、一大フアショ、寧ろ現狀打破ブロックが結成され、東歐と西歐とが全く中斷されるに至つたことは之を認めざるを得ない。これ佛國人が佛蘇同盟の佛國に取りて利益の認むべきなく、其の不利の影響のみ現はれるのに焦慮して、西班牙問題に自重の態度を採り、蘇に追隨せず、英國と進退を共にする傾向顯著なる所以である。

其の後洪牙利政治家の訪伊行はれ、近く又訪獨の實現を見んとし、獨洪關係も密接になつて行くものと認められる。塊地利は既に自主的に解決した問題であるが洪牙利の再軍備問題に就ては政治家の間に協議が行はれ、勿論現狀打破ブロックに於ては洪牙利の要望を當然として容認して居るのであるが、其の實現が土耳其の場合の如く、條約の改訂に依つて實現されるかどうかは頗る疑問であると思ふ。

西班牙問題を契機として獨蘇の抗争は宣傳戰に於て著しく激化し來り、蘇側はチ ヴイエフの反亂に獨逸の支援あるやに説き、獨逸はウクライナの饑民暴動説を傳へ、ニュルンベルグのナチス黨大會に臨みては、獨逸側は赤への宣戰を公然と唱へ、歐洲は赤色の魔手の下に没落の運命を辿らうと全歐に警告して、防共運動の第一戰に立ち各國の國民戰線に呼掛けたのであるが、之は一時のことで餘り重大視するの必要はない。吾人は唯此の動きの中にも宇宙自然の理法に従ひヒットラーが曩きに其の著「我が闘争」に記述した様に 獨逸の未來は東に在りと考へて居ることを看取しプラトニツクラヴの宣言ではあるが、志向性を持つ日獨防共協定も亦此の事實と關聯して居る様に解するものである。

三

西班牙は其の階級構成、經濟の涸渇、民族の統一鞏固の未完成等の原因の爲に國內鬭争は内攻し、一九三一年の共和革命以來慢性的に續いて居る。夫が七月中旬國民戰線即ち貴族、僧侶、大地主、大資本家、將校側と人民戰線即ち貧農、農工労働者との兩分野に屬する尖鋭分子間の暗殺事件から骨肉相喰むの大亂は勃發し、叛亂軍はモロッコより本國に侵寇して諸要地を抜き、今やマドリッドの城内城外に迫つて居る。人民戰線の結成はフアショ團體の脅威に對抗する爲めにする左傾共和黨、社民黨、共產黨等の大同團結に端を發するのであつて、佛國等に於ては先般選舉以前より其實を存し、第七回共產黨大會が之を是認したものである。斯の如く人民戰線が國際性を有するに鑑み、國民戰線も亦其の國際的反映を持つに至るのは自然の理であつて、蘇聯特にコミンテルンが人民戰線を自己の浮沈の分れ目と看做せば、フアショやナチスの國、即ち獨、伊、葡が國民戰線の浮沈を自己の國際的及び國內威信の問題となして、此の後者を支

持するは當然である。茲に於て五角に近き形勢に於て對峙せる政府軍及び叛亂軍に對し、最良筋から援助が行くのは當然である。傳ふる所に依れば一時は叛軍が頗る優勢にて、マドリッドは將に陥落するばかりになつて居たが、政府軍内に今や二萬の市街戦に慣れたる赤軍の混入せる爲め、今日尙陥落を見るに至つて居らないとの事である。

此の國內死闘戦の兩陣營中の政府軍に對し佛蘇は同情を寄せ、叛軍に對し獨、伊、葡は同情を寄せてゐる。佛國は個人個人としては勝手な行動を取つて居ても、不干渉主義の提唱國であるだけに政府は關係しない様であるが、蘇聯は寄附金を募集し、同情示威運動を決行し、政府軍に糧食彈藥義勇兵等を供給して居る。之に對し獨、伊は更に積極的で武器彈藥特に飛行機等を供給し、獨逸軍艦は一度スーダ港に入つて叛亂軍に好意を示し、獨逸在留民が共產黨員に殺されるや嚴重な抗議を呈しミノルカ島の保障占領を以て政府軍側を威嚇したと傳へられ、伊太利も同様の援助を叛軍に與へ内亂鎮定後はバレアリック群島の割譲を得るかも知れぬと傳へられてゐる程である。

此の佛蘇對獨、伊、葡の對立に驚いたのは現状維持派に屬しながら尙中立的態度を持する英國であつた。又ラインに對する防守を思ふに専らなる佛國であつた。そこで佛國政府は共產黨其の他の政府軍積極的援助論を排し、中立維持政策を決定し、不干渉協約案を提唱し、英國も之を歓迎し、約三十ヶ國の代表より成る中立委員會の成立を見たが、一方獨、伊、葡の代表他方蘇聯の代表との間に、互に他の中立違反を指摘し合つての泥仕合が續けられたことは、人の知る如くである。

以上一方英 佛が蘇聯を牽制するありて、他方、獨、伊も亦英國に氣兼ねする節があつて、世人は一觸即發と云ふが、吾人は西班牙の内亂から國民人民兩戦線の對立に依る歐洲一般戦争は勃發するものでないとの當初からの見解に猶引續

き把住せんとする者である。所詮歐洲に於ける本質的の對立は現状打破派と現状維持派との間の夫でなければならぬ。此の見地に立つるとき西班牙に於て、國民戦線が全勝を得て武斷的獨政治を布くか、政府軍が優勝して準ソヴィエツト政權が樹立されるか、叛軍がマドリッドを攻略してカカロニアの政府軍と久敷對立抗争を續けるか、夫とも亦兩戦線の妥協に依り局を結ぶかは、餘り重大な問題ではない。一觸即發と云ふ文字は餘りに強文字であるが、之を用ゐるとせば寧ろ之を極東に持參するを適當と考へる。

四

最近の最も興味ある出来事は日獨防共協定である。世間に於て本協定に對し賛否の論喧しく、民主主義國英、佛、米等及び支那に於て起された反響に氣兼ねして本協定を直に有害無益なりとする論者もある。斯様な表面的な一時の現象に動かされる事大主義者には筆者は與せないものであるが、此の協定の發案が孰れより出でたるやの問題、母性、産婆、名附け親、牧師が誰なるやの問題は暫く措き、其の價値は其の利用の結果に依つて判定せらるべきで、只今の所吾人は之は發展性に富んだ興味ある協定であると評するに留めて置きたい。獨逸は嘗て日英同盟の原著者で一方日本に此の支柱を與へて強大蘇國に對抗させ、他方露國の東進を極力獎勵することに依り、自己の背後を安全ならしめんとしたと評されて居る程、深謀遠慮實に驚嘆するに堪へたる國である。蘇國政府が一國社會主義に轉身し、コンミンテルンは自己以外の者であると指稱した様に、第三インターの國際活動は無限のものではなく、各地に赤の分子が居ることから派生して來るのだから、余輩は同様の理由でファシヨ・インターナショナルと云ふが如きものを端的に認識するのを拒否し

たい。ムツソリニもフアシズムは輸出の爲ではないと度々揚言して居る。

獨、伊、澳、洪をフアシヨブロックと云ふのが既に當らない、寧ろ現状打破ブロックと云ふべきではあるまいか。斯様な次第であるから、日、獨協定が、日、伊協定に依て補足されたとして、此のブロックは直に思想的な背景を顯著にする國民戦線インターナショナルと見るべきものではなくて、寧ろ現状不満足國間の漠然たる推感會通即ち現状打破國ブロックと觀察するが最も妥當であると余輩は考へる。余輩の如き〇〇〇〇論者は斯の如き深遠の見地から日本の滿洲事變勃發以降から今回の大旋回迄の外交上の新展開を興味を以て見まもるものである。所で佛波關係が前述の如く本然の外交關係が前述の如く本然の多交關係に合致する様に新展開を見せたことは日獨協定を其の第一條第二條の字句に表面的に示された程度に限定するの結果を持つかも知れぬ。某國の外交官は只今東亞に登場して居る芝居は今後三十年を経なければ大團圓に達せない。最近の日本の大陸活躍が成功であるかどうか吾等は危慮の念を持つものだ。北上する強化した抗日一色の蔣介石の大軍を停戦協定地域に於て阻止し得ずんば其の結果果して奈何と余に語つた。吾人は帝國の政治家に大局の明と虚實の略と小手先の俊敏さとを缺くの爲めに昨今南京政府に見絞られ、吾人をして桐一葉の感を抱かしめるものがないでもない。露支同盟の有無を穿鑿することなどは愚の骨張である、日英同盟復活は問題であり得なくとも米とは違ひ英とは支那に於て諒解出来る縁が昔からある、此の縁の利用は十餘年前の南京上海事變の時に既に始められねばならぬのに、今になって日英接近を唱へて内胄を見透かされ、支那にての對立は必要以外に尖鋭化し反て日獨協定に依て乖離せしめた観がないでも無い。反對に英獨海軍協定の内容は空粗なる質の問題で併も極東海面は之より除外されて居るが、風説にもせよ英が蘇聯——極東に潜水艦四十九隻、驅逐艦九十隻を有すと傳へらる——の海軍の

再建に對し或る程度の援助を與へ其の海軍力を擴張せしめて一方バルチック海に於て獨逸と拮抗せしめ他方極東海面に於て日本海軍の牽制せんとすと傳へられる如きは吾人の重大關心事であらねばならぬ。兎に角最早問題は外交の口頭禪の領域を脱し、素朴な物質力での抗争時代となり、男子正に筆を投じて劍を帯ぶべきの秋となつた。吾人は臥薪嘗膽此の大試練を勝利を以て乗り切らねばならぬ。進むべき道は此の外にあり得ない。何んとなれば吾人は始めより二流三流の國に墮し、自由主義者達の様に風向きに依ては華盛頓其の他に外向いてスチムソン主義の前に脱帽することを拒否し、世界に於て第二位と下らざる雄邦主義と浮沈を共にすることを意識的に最終的に撰擇し終りたるが故である。

五

ヒットラーのニュルンベルグ大會に於て述べたる所の如く人類は今や未曾有の大動亂の前夜に直面して居るのではなく、實に大動亂の眞只中に置かれて居り、何人も此の儼然たる事實を疑ふことは出来ないものである。歐洲の潜在戦争は内攻し、東亞の潜在戦争は綏遠問題の爲に急性に轉ぜむとするの危険さへ孕んでゐる。而て日獨、日伊の接近は聊かながら此の歐洲の天地に漲る妖雲と東亞の天地に低迷する黒雲とを抱擁せしむるに至つたと觀察せられないこともない。斯て歐亞大陸には宿命の大嵐が餘程逼つて居る。軍縮とか、*Paasifulehange*とか、平和機構とか云ふ聲は狂瀾の渦巻に吞まれて仕舞うた今日からは臥薪嘗膽身を棄てて浮ぶ瀬を求むる國民のみが大試練に能く打勝ち得るであらう。

第三章 巴爾幹の變容

一

大戰前のバルカンに就いては、もう充分御承知の如くでありまして、トルコ人と云ふものは遊牧の民で農牧に極めて秀でて居つたのでありますが、同時に武技に秀でて居る、さうして彼の成吉思汗の西方征服にも似まして、一時は維納の近郊に達する程の歐亞に跨る大帝國を作つたのでありますが、國民性が農と武技に適して科擧や技術を學ぶことが出來ないといふやうな缺陷がありました爲めに、十八世紀後半以來躍進した西洋文明に依り取り殘され、それから又國內の政治が民族のエフィシエンシーを發揮させる事が出來なかつたものでありますから、徐々に衰頹して參つたのであります、トルコのことを、*homme malade*、病人と呼んで居つたのであります。トルコが衰へて中歐より巴爾幹の一角に退却するにつれまして、由來トルコといふものが歐亞に跨る大帝國と致しまして一つのアンチ・ナショナル・エンパイア、即ち民族主義を蹂躪する帝國を作つて居つたのでありますから、それが爆發するにつれまして、其の破片を相續して變つた小さい獨立國が生れて參つたのであります、先づギリシヤが一八三〇年に英・佛・露等大國の力を藉りて獨立をして居ります。それからルーマニアは一八六一年に獨立して居ります。それからセルビア、モンテネグロ、ブルガリアなどは獨立してふ既成事實が早く完成して後、一八七八年のベルリン會議に至つて獨立を承認せられて居りま

す。それから最近にアルバニアが一九一三年になつて獨立を認められて居ります。さういふ時に當つて土耳其の手からもぎ取られた領土の分け前を取る事に大國も介入致しましたから、一層國際關係は紛糾致しました。即ちボスニア、ヘルツェゴビナはオーストリーに合併され、それが直接の動機になつて、それから間もなく世界大戰に發展して行つたといふことになつて居るのであります。大戰直前實際諸強國といふものがバルカンの政治に干渉を致しまして中小の諸國を自家の歩として取扱ひ、自分の勢力をお互ひに伸張しようと努めたのであります、特にロシアとドイツが一番あそこで鎬を削つたのであります。それで協商側——英佛協商、佛露協商であります、——に於いてはトルコに關してどうしてもイギリスとロシアとの利害が衝突致します。即ちイギリスは相當強いギリシヤ、相當強いトルコといふものを護り立てて行つて、東部地中海の制覇に役立てんとし、且つ海峡を閉鎖したいと云ふのでありますから、海峡通航權に合せてコンスタンチノーブルまでも狙つて居るロシアとは非常に利害が衝突致します。でありますから、イギリス及びフランスの力は幾分中和されまして、寧ろその間隙に乗じて、ロシアをも追ひ抜いて、ドイツの汎獨主義が伸展をしたのであります、ルーマニア、ブルガリア、トルコにもドイツの勢力は著しく加はつて居つたのであります。特に土耳其に於いては獨逸大使館や、ハイダル・パシヤ停車場やバグダット鐵道にカイゼルの雄圖を思ふことが出來ます。これに對してロシアの勢力は、伯林會議後コルチャコフが憤死したやうなこともありましたが、如何にも蹉跎たるものあつたのであります。同時にまたバルカン諸邦の内部に於きまして、折角獨立しかけたこの小さい國々が一方土耳其の最後の互解を促進すると同時に、他方民族自決主義に従つてお互ひに自分の民族を皆自分の領土内に入れようと思ひ、セルビアと致しましては汎セルビア主義を提唱致しますし、ギリシヤ人と致しましては大ギリシヤ主義を提唱致

しますし、それからブルガリア人と致しましては大ブルガリア主義を提唱したのであります。即ち是等諸邦が同一民族の住まつて居る地方は全部自分の領土に加へたいといふ、さういふ要望で動きました爲めに、小國間に種々嫉視陰謀が行はれたのであります。勿論その間には、トルコを最終的に爆發せしめる爲めに、一九一二年にバルカン同盟が出来まして同年に第一回バルカン戦争が戦はれ、マセドニアの争奪戦で今度は同盟が兩陣營に割れて第二回バルカン戦争といふものが戦はれて居りますが、此の第二回バルカン戦争の際にはセルビアとギリシアが協力して、獅子の分け前を取つて、ブルガリアは馬鹿を見たといふやうな形になつて居ります。斯様な経緯を全部含めまして、極めて情勢が複雑して居り、何時さういふ關係から戦争が勃發するかも知れないといふことを稱して、ヨーロッパ人は世界大戦前バルカンのことを火薬桶——トンノー・ド・ブールドルといふ風に申して居つたのであります。さうして現實に、オーストリーが一つのアンチ・ナシヨナル・エンバイアたる自國を強化せんと欲すれば、之れに對峙してセルビアが大セルビア主義を實現しようとおせりました。此の兩傾向は正面衝突するのであります。その背後に、一方に汎獨主義があり、他方に汎スラヴ主義がある。さうして一九一四年に奥地利と塞耳比亞との衝突將た又汎獨主義と汎スラヴ主義との衝突から歐洲大戦は惹起せられました。外交史研究上の見地から見すれば、この衝突が最も主なる世界大戦の原因になつて居るといふ次第でありまして、ガルカンは實に火薬庫と云ふ名前に恥ぢなかつたのであります。

二

併しながら世界大戦後、殊に最近十五年間の流轉の結果を見ますと、そこに、バルカンに、相當深い變容が齎らされ

て來て居るやうに認められるのであります。バルカンと申しますれば、ユーゴスラビア、ルーマニア、ブルガリア、トルコ、アルバニア、ギリシアの六ヶ國であります。その中北の方のルーマニアとユーゴスラヴィアといふものはチエツコスロヴァキアと一緒になつて小協商として、中歐御即ちオーストリー、ハンガリーといふものに對し共同戦線を張つて居るのであります。先づその北方戦線がどういふ風になつて居るかといふことを申上げて見ませう。

小協商といふのは、御承知の通り、一方ハプスブルグ家の復辟を阻止して、さうして他方オーストリー、ハンガリーの國境の現状を維持するといふことを中心目的として、チエツコスロヴァキア、ユーゴスラヴィア、ルーマニアの三つの國が結び着いたものであります。オーストリー、ハンガリーは、何れも戦後三分の一の小さい國になつて居るのであります。前者は財政的に外部からの輸血がなくては一國として立行かず、後者は小協商に沃野を奪はれて富貴よりの轉落に泣いて居ります。

ルーマニアはトランシルバニア、ベッサラビア等を合せて人口は二倍となり面積は二倍以上となり、而かも極めて肥沃な農耕地と石油等の産地とを持つて居ります。その内部的の政治機構に弱點もないことはありませんけれども、なか／＼大きい平時二十八師團約十五萬人の陸軍と備八百臺の空軍を持つて居りまして、陸軍などは、軍隊のモラールはどうか知りませんが、量に於いては日本の夫れに接近するのであります。

それからユーゴスラヴィアはルーマニアより三割方小さい、併し農牧産品特に産産に富んで尤富な國であります。この國は殊に軍隊のモラールが良く、大戦中負けてばかり居つたイタリアの軍隊は、決して恐るるに足らないといふやうな自信を強く持つて居ると云ふことであります。兵員數は卒十萬、士官八千餘で騎兵二師、歩兵十六師、砲兵十六旅に

編成されて居り、空軍は六百臺であります。

尙ほチエツコスロヴァキアもユーゴスラヴィアに人口面積共匹敵した國でありまして、士官一萬、兵卒十一萬、飛行機五百五十臺を有して居ります。之れに反し埃洪兩國は獨逸と同様な軍備制限を課せられ、併もサンゼルマン及びトリアノン條約の軍縮條項は圓滿に履行され其の後違反の事實も破棄の事實もありませんので、中埃側には空軍はなく兵員數埃地利二萬人餘、洪牙利三萬五千に過ぎません。それ故に小協商の武力の中埃側に對する壓力と云ふものは尠くも外觀上は陸軍に於いては一に對する七の比となり、空軍に於いては比較を超越して居るのでありまして、小協商の中埃に對する壓力は戰爭を狩獵となすに足り、爲に中埃側に課せられた軍縮條項は先づ嚴然と保持せられて居るのでありまして、巴爾幹北方現狀維持派の優越——不均勢——はそれ自身巴爾幹北半の安定力となつて居ると見るべきで、昔日の火藥庫に茲に發見されません。

三

オーストリーの方は、嘗てはナシヨナリズムを壓倒して居つた。即ちアンチ・ナシヨナル・エンパイアであつたのでありますが、今や戰敗の結果分裂したのでありますから、面積は約三分の一に減つたけれども、大體夫れは異民族が分離獨立したに過ぎないので大體ドイツ人ばかり固まつて居る地方は埃地利として残つたのでありますから、本來自分に屬すべきものが他の國に取られたといふ部分は少い。従つてインデンチズムの觀念は現在のオーストリー人には寧ろ尠いのでありまして、小さくとも本來のドイツ系のオーストリーたる状態を保持して居るのであります。でありますから

埃地利に於いては條約改訂運動といふものは弱いのであります。これに反して、ハンガリーの方は極めてその運動が熾烈であります。領土が三分の一に削られ、經濟生活は極めて困難になつて居るといふことをパンフレットに刷りましてイギリスなどに向つて宣傳を盛んに致しまして條約改訂熱運動を執拗に煽つて参つたのであります。併しながら、これらの二つの國は、軍備などに就いては、オーストリーは條約所定の兵員數三萬人に對し約二萬の兵員しか有して居りませんし、ハンガリーすらも格別平和條約に依つて規定せられた軍備の制限を目に立つ程超過しては居らないだらうといふ豫想であります。さうしてこの何れの二つの國も、ヒットラーがやつたやうに平和條約の第五編である軍事條項を蹂躪すると云つたやうな宣言は通例から申せば仕兼ねて居るのであります。即ち中埃側の條約改訂運動、國境變更の試みといふものに對する小協商のフロントは、特にルーマニア、セルビアといふもののフロントは極めて鞏固で、現在ではその七倍も優勢の壓力は充分に利いて居り、中埃側に於いてはドイツの敢てしたやうなことが大體出来ないといふ状態にありますので、この方面に於いては、現状を維持しようといふさういふ國際團結が、現状を打破しようといふ團結よりも遙に優越でありますから、その優勢の爲にその勢力不均衡の爲に現状維持の平和が持續されて居ります。防波堤は先づ堅固に出來て居ると見るべきであります。

四

次に、南方バルカンに於きましては、ブルガリアが極めて現状に不満でありまして、現状を打破しようと焦つて居るのでありますが、このブルガリアに對するバルカン諸國のフロントを觀察して見たいと思ひます。

ブルガリアは色々な要求を持つて居るのであります。ギリシアに對しては、十萬人の南部マセドニアに住まつて居つたブルガリア人が併合されて居ると云つて、第二回バル幹戦争當時から蠶々の不平を鳴らして居り、南部マセドニアに於けるブルガリア人に自治を許して呉れといふことを要求し續けて居るのであります。ブルガリア人はギリシアに併合せられたマセドニアに百の學校があり、又多數の教會がある。それを皆抹殺されてしまつたと言つて不平を言ひ、自治許容を要求して居るのであります。それから特に經濟上軍事上極めて重要な地點であるサロニカに關しては、其の近郊にまでブルガリア人が住まつて居つたのでありますから、ブルガリアは第二回バル幹戦争の際サロニカを取りたいと努力致したのであります。それが實現せずに、辛うじて第二回バル幹戦争の後に、カバラと云ふ港からその東の方のデデアガツチと云ふ所迄の極く狭いエヂアン海に面する沿海一帯の地に出口を得るに止まつたのであります。ところが世界大戦の結果その沿岸地方を希臘の爲めに失つてしまつたのであります。ブルガリアと致しましては今では黒海の方しか海への出口はないといふことになつて居ります。御承知の通り、ヌイイ條約の第四十八條には、ブルガリアに對して地中海に出る出口を與へなければならぬといふ約束がしてあります。さうしてブルガリアは、その出口といふものは領土的のものでなければならぬ。即ちブルガリアの領土たる地中海沿岸の一つの港とその港からブルガリアに續ける領土たる鐵道と、それだけを貰はなければならぬと云ふのであります。ギリシアはこれに反して、勃爾牙利に與ふべきものとしては、經濟的の出口で澤山である。即ちデデアガツチ港に於いて自由地域を與へよう。それから鐵道を敷く權利を與へようといふことだけ云つて居りますので、その主張が合はないのであります。それでこの二つの國の間の關係は極めてまづい、通商條約も希臘の方から破棄せられてその儘になつて居ります。ブルガリアが戦争賠償

金を拂はぬと思へば、ギリシアの方はマセドニアから追ひ拂はれたブルガリア人の財産に對して補償をするといふ約束をしながら、その補償を拂はないと云ふ始末で、葛藤があるのであります。この希・勃關係をいふものは今日でも極めて險惡な關係にあるのであります。

それからまたブルガリアは、ユーゴスラビアに對しても、ユーゴスラビアに合併せられた北部マセドニアに五十萬人のブルガリア人が居ると主張するのでありますから、茲にも一大イレデンチズム即ち恢復すべき失地を持つて居ります。そのほか小さい地方でストルミツツとか、ボシルグラードとか、ツアリプロツトとか、チモツクとか、狭い地域であります。是等に關してユーゴスラビアに對する數個のイレデンチズムを持つて居ります。五十萬人と註せられるブルガリア人の内ユーゴスラヴィア領マセドニアから追はれて来たブルガリア人といふものは、謂はゆるコンミツタジとなつてユーゴスラヴィアに侵入、奪略をほしつてしまふに鐵道を爆破するといふことをやつて居るのであります。最近之れを取締る強力政府が勃爾牙利に出現する迄勃・ユ關係と云ふものは頗る緊張して居つたのであります。

それからルーマニアに對しても、ドブルチアに關して一つの請求權即ちインデンチズムを主張して居るのであります。またトルコに對しては、格別紛糾はないのであります。寧ろブルガリア領に居住する土耳其少数民族をブルガリアが追放すると云ふ始末でありますけれども、第一回バル幹戦争の時には、ブルガリアは極めて勇敢に戦つて、トルコの主力軍を破りましたので、その勢ひで長驅コンスタンチノーブルへ進んで行つて、ブルガリアの皇帝を昔のビザンチン帝國の後繼者と仰がしめようといつたやうな野心まで懷いたのであります。それを強國ロシアが押へたのであります。併し今日はトルコとブルガリアとの關係は險惡化して來ると云ふ徴候を示さないのであります。まあ勃・土關係

といふものはバル幹に於いて最も蟠まりがないと申上げて宜いでありませう。

さういふ風に色々な事情が錯綜致しまして、勃爾牙利はマセドニアの自治を要望する、それからスイイ條約と云ふものの改訂を絶対に要求する。これは國民的の要求で、どの政府でもこれをどうすることも出来ないといふ有様になつて居るのであります。

五

この懐悍なるブルガリアに對しまして、これを取り巻いて居る國はどういふ状態になつて居るかといふことを見ますと、今日のトルコといふものは辛うじてヨーロッパの一部とそれから小アジアの一部とを保つて現状維持を理想として居るのであります。さうしてロシアが昔ながらに最も恐いので、資本主義國の包圍を懼れたロシアとは夙に中立條約を結んで居ります。不侵略條約、仲裁調停條約をも結んで居ります。それからドデカネス島を足場とするイタリアの小アジア侵入を恐れて、それに對する準備もやつて居ります。それから過去一世紀間否な數世紀間不俱滅天の仇敵であつたトルコとギリシアとは双方とも國策の一大轉換を行ひ、最近七、八年間互に接近に努めまして、關係——特に政府間の關係——が改善されて參つて居ります。ブルガリアとトルコとの關係に暗雲の漂はないことも先に申上げた通りであります。概して土耳其と致しましては現在の地歩を失ふまいといふこと、即ち現状維持が精一杯で外交方針は全部之れから割出され、海峡の軍備増加と云ふ要求も亦現状維持に役立たせる爲め即ち特に露伊兩國に對する防禦のためである様に思はれます。

ギリシアは、ビザンチン帝國の實際上の構成部分になりました、その皇帝は選舉に依つて希臘の内から擧げられたこともありまますから、ギリシア人の中から皇帝も輩出して居り、彼等はビザンチン帝國といふものをギリシア文明の訂正第二版だと考へて居る傾向があるのでありますから、ギリシア人の大ギリシアの夢といふものは、コンスタンチノールを首府としてさうしてギリシア人の住まつて居る東部地中海沿海一切の地域を引つくるめようといふ大望なのであります。而してヴェニゼロスも一時はその夢を懐いて働いた譯であります。併し勿論左様な大望は成就される可能性さへありませんでした。夫れにも拘はらず希臘は世界大戰の結果として左迄戰爭に貢献しなかつたのに、ヴェニゼロスの働きで、バリ會議に重きをなし、非常任理事國となり著しく領土を擴張し、スミルナ地方の委任統治を克ち得、殆んど得意の頂點に達したのであります。併しながら土耳其と英國の委任統治地域との間に楔を入れる様英佛等から招請せられたのに應じましてスミルナ地方の委任統治地域に實力を以て支配權を確立せんと欲して遠征を企てましたが、反つて土耳其のケマルパシヤの爲に一敗地にまみれ、スミルナからは撤退致し、従つてその大ギリシアの夢に近かつた改善のギリシアより尙ほ一層縮小された希臘を克ち得たのであります。それでも或は少し國力に餘るかも知れない程大きなギリシアといふものを實現して、これを把持して居るのであります。それで、軍備を擴張してこれを確保しようと、現状維持といふ方針で進んで居ります。それでも尙ほ、今日のギリシアはイギリスに對してキプロス島、それからイタリアに對してドデカネーズの諸島、それからアルベニアに對して北部エピルスそれからトルコに對してはトルコを持つて居る幾つかの島嶼といふものに對してイレデンチズムを持つて居るのであります。併しながら、實力に依つて英伊やトルコから土地を奪ふことは出来ませんから、それらの國が他日國策を變更して返還して呉れるのを待望すると云つた程度

に止めて居るのであります。

歴代のギリシア政府は何れも、平和の維持、平和條約の現状維持、隣國との親善、それから中立維持、戦争引込回避主義、それから聯盟依存主義と云つたやうな政策で進んで居りまして、そして此の際、特にブルガリアに對する防備を怠らずにやつて居るのであります。

六

それで、ギリシアとトルコとの關係は、過去三十年間否な過去一世紀間、ギリシアが最後に残つて居つたトルコ帝國と云ふものの爆破に盡力したのでありますから、極めて國交關係が悪かつたのであります併しながら最近十年間に於いて、通商航海條約が結ばれ、それからギリシアとトルコとの間に中立及び國際紛争平和處理に關する條約が出来、それから海軍制限に關する條約が出来、それから人民交換に關する條約が成り、トルコ人はトルコに歸り、ギリシア人はギリシアに歸るといふ人民交換が行はれました。それから特に一九三三年には、國境不可侵條約といふものを結びました——トルコとギリシアは東部トリスに於いて短かい共通の國境を持つて居りますが、——其の共通國境を變更しないといふこと、それから若しも事が有つたならば相談をすると云ふ所謂協議條項であるとか、それから聯盟に於いて協力をしよう、若しトルコが理事を出すならば、トルコの理事はギリシアの利益も代表する建前とするとか云つたやうな原則を掲げて國境不可侵條約といふものを結びまして、その關係、著しく改善されて居るのであります。

それから次はアルバニアであります。アルバニアは小さい國であります。人口僅か百萬の國でありますから、無論独自の政策を掲げ得られる筈はありません。それで中立政策を執つて居り、その中立は特に主としてユーゴスラビアとイタリアの間に中立して行かうと云ふ中立であります。それから獨立と主權を擁護すると云ふ大方針を樹てて居ります。結局自國の存立を全うしようといふことに、精一杯努力して居るのであります。アルバニア人の主張に依りますと、二百萬のアルバニア人が國外に居る、その大部分はユーゴスラビアに居る、一部分はギリシアに居ると云ふのでありますから、彼等から云へばもつと領土を廣めたいのでありますけれども、實力が足りませんので、イレデンチズムと云ふものすらもないのであります。

七

偕て以上の如き立場にある國々が特に同じくする傾向といふものは、大體、存立を全うしよう、中立を維持して行かう、國際聯盟を護り立てて行かう、平和條約に決められた現在の領土其他の政治條項を維持して行かう、條約非改竄現狀維持をやらうといふのであります。これに反する動向を示して居るのはブルガリアただ一國でありますから、これを取り圍んで居る國々の間にバクト・バルカニツク——バルカン協商規約——と云ふものが生れたのはあまり偶然ではないのであります。私はこのバルカン協商規約と云ふものを讀んで、これはバルカンの混沌たる情勢を著しく變更し、今日のバルカンをして世界大戰前のバルカンと著しき對照の地位に立たしむる様變容したものと觀察して居るのであります。ブルガリアを圍む四ヶ國——アルバニアは右協商に入らなかつたから四ヶ國であります——この四ヶ國がバルカン協商規約を結んだといふことは、バルカンに於いて一時期を劃し、尠くも精神的にはバルカンをして昔の火藥庫であ

つた時と相當異なつた國際的意義を帯びしむるに至つたものであると、斯う見て居る者であります。之より巴爾幹の歐
洲に於いて占むるに至りし新國際的意義に就いて申上げて見たいと思ひます。

バルカンは、擧げてトルコの領土でありました爲めに、數個の民族の居住地でありながら、單一の政治地域を構成し
た次第でありますから、人民の往來が自由になり、そこに經濟生活の共通といふものが生れて参りました。また社會生
活の共通といふことも生れて参つたのであります。従つて一世紀も前から、トルコの羈絆を脱する、即ちトルコから獨
立すると云ふ運動の標語として、バルカン人のバルカンと云ふやうな標語が採用せられたのであります。それで一九一
二年に生れました勃・塞・希三國の對土耳其バルカン同盟と云ふものも、その思想と一脈相通するものがあると考へら
れるのであります。

斯様なバルカンを一つの政治的の渾一體として結び着けようといふ考へが、特に一九二九年の萬國平和大會の時に、
偶然に具體化されたのであります。つまりその時に集りましたバルカン諸國の代表が、バルカン諸國だけで私的國際會
議を組織して共通の經濟問題、政治問題、文化問題、平和問題其他の國際問題を議さうではないかといふことで、バル
カン會議といふものが茲に誕生致しました。さうしてその標語はバルカン人のバルカンでありました。關係者の言ふと
ころを見ますと、彼等はバルカン聯合——コンフェデラシオン・バルカニツク——と云ふものを理想として掲げて居る
のであります。さうしてそれに終局的に到達する手段としては、關稅同盟と云ふものを形成しようといふことを考へて
居ります。それからバルカン諸國の間にはお互に通商其他各般の特惠制度を實施しようといふことで、通商條約の中に
クロース・バルカニツク——バルカン條項——と云ふものを入れる、さうして色々の特惠を互に供與しあふのであるが

此の事は之れをバルカン六國間だけに限らうといふのであります。丁度スカンヂナヴィア諸國間に行はれる局地的多邊
的相互の特惠制度を基礎づけるスカンヂナヴィア條款に似たクロース・バルカニツクと云ふ通商上の主義を確立しよう
といふ運動を試みて居る次第であります。次に當面の政治問題としてはバルカンの平和機構の問題を議して居ります。
それから尙ほ少數民族の保護に關する問題、開港に關する問題、保險に關する問題、鐵道連絡に關する問題、商業會議
所の協力に關する問題、社會政策を共通にしようといふことが如き問題、中央銀行の共助に關する問題、觀光事業に於ける
共助問題等色々の問題に就いて、恰も國際聯盟が六つの委員會を以て専門の問題を議するやうな風にやつて参つたので
あります。

それでこのバルカン會議は、今日までに四回開催されたのでありますが、その第三回目のバルカン會議の時に、漸く
コンフェデラシオン・バルカニツク——バルカン聯合——とまでは行きませんが、それに到達する前の、巴爾幹諸
邦の一つの政治的結合として、將た又バルカンの平和機構に關する試案としてバルカン諸國を結ぶ紛争の平和的處理、
安全の保障、既存條約特に少數民族保護に關する條約の尊重に關する條約案といふものがバルカン會議に依り可決され
たのであります。その内容と致しましては、(一)不侵略且つ戰爭を拋棄するといふこと、(二)紛争を調停及び仲裁裁判
に依つて解決するといふこと、(三)それからこれに反する國があつた場合にはそれに對して合作して戦ふといふ條項、
(四)それから少數民族の取扱ひを改善する爲に、各國に國內少數民族局を設け、その國內少數民族局が擧まつてバルカ
ン少數民族局といふものを組織することと云つたやうな基本原則を可決して居るのであります。

斯う云ふ民間の運動と云ふものには、バルカン諸國の議會内の有力者も無論加はつて居つたのでありますけれども、

政府も亦これに監視を加へ、大臣や外交使臣が絶えずこれに出席をして居つたのでありまして、加ふるに該運動には輿論の傾向を善導し、且つ之れを利用しようと云ふ政治家の工作も加はりまして、これ等が動因となつて、遂にバルカン協商規約と云ふものが生れるやうになりました。

八

バルカン協商規約と云ふものが生れましたのは、バルカンにその勢力を扶植せんとあせるイタリアに近接するところのギリシヤ及びトルコをして、イタリアの謂はゆるエーチアン・ロカルノの機構中に拉致せられざらしめんとする意味を持つものであります。此のエーチアン・ロカルノは、結局イタリアの狙ひ處たるユーゴスラビアを包圍しようとする政策の現はれと見なければなりません。さう云ふイタリアの覇制政策の現はれであるエーチアン・ロカルノと云ふものに對し、巴爾幹協商規約はイタリアその他バルカン以外の諸大國がバルカンに勢力を及ぼさうとする企圖を排除してバルカン諸國丈でバルカンの事は自主的に處理して行かう、即ちバルカン人のバルカンと云ふアイデアを實現しようとして、茲にバルカン・ロカルノとして成立を告げたのであります。

斯様な次第でありますから、一九三四年の二月九日に雅典に於いて調印されたバルカン協商規約は國際聯盟の地方的安全保障の主義に一致し、バルカン諸國の自尊心を高むる代りに伊太利を抑へんとする作用を持つものであります。この協商規約の成立に特に奔走されたのは、ルーマニアのチチュレスコと、マルセイユで非業の最後を遂げられたるユーゴスラヴィアのアレキサンドル一世であつたのであります。此の事は新協商規約が小協商國の延長として、フランスと

連絡する現状維持の陣營を固めようとして云ふ運動の現はれであることを意味します。従つて伊の野心を制し、南部バルカンに於ける改訂主義者勃爾牙利を、主として拘束する作用を持つ事になるのであります。

此の規約案に對しまして、ギリシヤは初めは頗る躊躇して居つたのでありますけれども、獨逸の解放を契機として高調し來る條約改訂運動は恐いので、佛國を宗主と仰ぐ現状維持派には追従しなければならぬ。それからギリシヤが孤立して居ると、共に南部スラヴ系であるブルガリアとセルビアとが接近をする。つまりこの二つの國が或は聯合國にならうとか或は單一の國にならうとかいふやうな提唱がありまして、素よりその實現性は疑はしいのでありますけれども、ギリシア人は、ユーゴスラヴィアがブルガリアと結んで、前者がサロニカに下つて來、同時にそれと相並んで後者がエーチアン海に進出して來るのを極めて憂へて居るのでありますから、それを阻止しようといふ考へにも驅られました。昔の希塞同盟に立ち歸る氣になつた様であります。それからもう一つには、コルフ事件の記憶尙新しき際イタリアの鋭鋒を避けるに役立つ障壁を築き、さうしてバルカン人のバルカンを口號としてエキストラ・バルカニツクの勢力に容易に對抗するといふ意味で、このバルカン協商規約の運動に賛成したのであります。

アルバニアも勿論先に申上げたやうな國情でありますから参加を希望致したのであります。ところがアルバニアにはイタリアの勢力が頗る加はつて保護國に近いものになつて居るのであります。その際バルカン協商規約と云ふものを締結することに依りバルカン人のバルカンと云ふ思想がそこに體現するといふことは、取りも直さず、イタリアのバルカンに勢力を既に及ぼし、また將來及ぼさうとする動向との正面衝突になるのでありますから、イタリアがアルバニアにバルカン協商規約に参加することを許可する筈はありません。従つて爾餘の國々が遠慮してアルバニアにこの巴爾幹協

商を結ぶ會議に出て下さいと招請することを見合はせまして、アルバニアは其の内心の希望にも拘はらずこれに加はり得なかつたのであります。

それからブルガリアは、これと反對に、自國が専らこの條約に依つて狙はれて居るのでありますから、國境の現状維持、平和條約非改訂といふことを主義目的とするバルカン協商規約に加入するやう招請せられても、これに不参加を表明したのであります。改訂派の急先鋒たる事を國是とするブルガリア國の立場と該規約の目的とは正面衝突でありますから、斷然ブルガリアは参加を拒絶したのであります。

従つて、このバルカン協商規約と云ふものは、バルカン人のバルカンと云ふ思想から出發して居つたにも拘はらず、不完全にそれが實現せられて、ギリシア、トルコ、ルーマニア、ユーゴスラヴィアといふ四國間の盟約として出来上つたのであります。

其の内容を簡単に申し上げますと、バルカン内部の國境——フロンチエール・バルカニツク——の現状尊重安全保障といふことが第一の原則であります。勿論陸上の國境でありますから島嶼は入りませんが、それからユーゴスラヴィア、ルーマニアと中歐諸國との間に國境は、これはフロンチエール・エキストラ・バルカニツクになりますから含まれません。併しブルガリアを含む國境は、全部この中に含まれる譯でありますから、この規約に依つてブルガリアを抑へつけて身動きをさせないといふ目的がそこに窺はれるのであります。それから又、アルバニアはユーゴスラヴィア及びギリシアと國境を接して居るのであります。ギリシアはアルバニアとの國境を除いて貰ひたいといふことを要求したのであります。それはユーゴスラヴィアとイタリアと開戦した暁、アルバニアが伊太利の同盟國たる關係上イタリアに

與して戰爭に参加するであらう場合、希臘の立場が困るからであります。併しそれではあまりに骨拔な條約になり、ユーゴスラヴィアに取つて全く無價値のものとなるといふ事で、ユーゴスラヴィアがそれを反對して結局、アルバニアのユーゴスラヴィア及びギリシアに接する國境もその中に含まれて、安全を保障されるといふことになつたのであります。それからその條約の第二條は、協議條項であります。事が有つたならば相談をしようといふ譯であります。尙ほそれに加へて、この四つの締約國は非締約國たるアルバニア、ブルガリアに對して單獨行動に出でてはならない、四つの國はいつも一緒になつて歩調を合せて右二國に對して行かう、それから、又、四つの締約國はいつも四つの國として一團となつて行かう、四つの國の二つ或は三つが特殊親密の關係を持つといふことをしてはならぬと云ふ規定があるのであります。即ちバルカン協商規約に入つた四つの國は同じ程度に接近し、同じ程度に於いて離れて居る。さうして特にユーゴスラヴィアとルーマニアが仲が良いとか、ギリシアとトルコが懇懇であるとかいふことを禁止すると云ふ、斯ういふ規定が入つて居るのであります。それから第三條は、ブルガリアとアルバニアがこれに入りなければ入れてやるといふやうな條項があります。

このバルカン協商規約は極めて簡單なものであります。これに關して附屬議定書と云ふものが秘密に調印せられました。併し間もなくその秘密がブルガリアの新聞に洩れましたから、遂に發表されました。此の附屬議定書は、第一條に於いてロンドンで確立されました侵略國に關する定義を下したる條約をその儘採用すると規定して居ります。それから、第二條に於いてこの條約は如何なる一國をも假想敵としない、けれどもバルカン六ヶ國の何れかの一ヶ國から四締約國の一つが侵略された場合には、お互ひに援助をすると規定して居ります。それから第三條に於いて、締約國の一つ

がバルカン以外の國、即ち非バルカン國より攻撃を受けた場合に、若しこの攻撃にバルカンの六ヶ國中の何れかの一つが加勢する場合には、その加勢した國に對して締約國が制裁を科するといふことを規定して居ります。それから第四條に於いて軍事的、經濟的、文化的の協力を爲めの交渉を締約國政府間に始めよう、殊に軍事的の協力を組織化する爲めの交渉を開始しようといふことを規定して居ります。それから、第五條に於いて既存條約の效力を尊重しよう。其の既存條約の中には小協商國間の同盟條約をも含むものであると規定して居ります。それから、第六條に於いてバルカン協商規約といふものは防禦的のものであるから侵略國となつた一締約國に對しては爾餘の締約國は義務を免れると規定して居ります。それから、第七條に於いてバルカンの領土は現状の儘永久に存続すべきものであると規定して居ります。それから第八條に於いて議定書の有効期間を定めて居ります。斯う云つたやうな八ヶ條から成る秘密議定書がバルカン協商規約に附屬して居つたのであります。

偕てこの秘密議定書の第三條に關しまして、ギリシア政府は大へんに迷つたのであります。イタリアとユーゴスラヴィアが戦へば、既に同盟を以てアルバニアはイタリアと結んで居るのでありますから、アルバニアが伊太利に加勢する、さうするとギリシアはユ國を援けてアルバニアに制裁を加へなければならぬ、従つてイタリアとも戦はなければならぬといふことになるのであります。でありますから、このアルバニアとギリシアとの國境を條約適用範圍外に置きたかつたのであります。その主張が通らずに、此の國境を含むことになりました次第は前述の通りであります。その結果、政府が非常に困る立場に立ち、特にイタリア最員のヴェネゼロスに攻撃せられました爲に、政府は後になりまして伊・ユ戦争と云ふ假設の場合に於て、イタリアとアルバニアとの間には既存の同盟條約があつて、之れに依つてアルバ

ニアとイタリアとが結び着けられて居るのであるから、この場合には秘密議定書の第三條の適用は起らぬ、つまりギリシアはアルバニアに對して制裁を科せなくても宜い、即ちイタリアと開戦の危険を冒さなくとも宜いといふ解釋を採用してこれを公表したのであります。さうすると、ユーゴスラヴィアは、さういふことになるとバルカン協商規約の意義が極めて削減されるのでありますから、ユーゴスラヴィアは頗る批准に躊躇することとなりました。併しながらフランスなどの斡旋もあつて、結局ユーゴスラヴィアもルーマニアと一緒に批准を致しまして、さうして今は該規約が實施されて居るのであります。

九

それで、今述べましたやうなバルカン協商規約及び秘密議定書が成立つては居りますもの、その成立に右様の缺陷がありますので、この規約を實施する爲に軍事協定を結ばうと云ふ約定があるにも拘はらず、軍事協定はまだ出来上つて居りません。併しながら一九三五年三月初旬希臘に未曾有の内亂が勃發し、政府軍とヴェネゼロス氏の叛軍と戦ひました際には、土耳其とユーゴスラヴィアとは勃爾牙利軍隊の動向を嚴に監視し、土耳其は兵を北方に移し、兵器彈藥を希臘の政府軍に供給し、叛亂鎮定を助けたのであります。多くの政治家は此の迅速な内亂の鎮定をバルカン協商の效力に歸し、該協商は充分の活力があると認定して居るのであります。然らばブルガリアと云ふ面積人口に於いてギリシアより稍や小さく、土耳其の半分、ルーマニアの三分の一に過ぎない小國は、差當りヌイイ條約で兵制兵器編成等の嚴重に制限された僅に二萬人の兵員を以てギリシアの兵員五萬、飛行機百二十臺、土耳其、兵員十萬、飛行機三百七十

臺に對して居るのであります——暫くルーマニア、ユーゴスラヴィアから來る壓力を除外するとしまして——後者の優越は一に對する七割合であります。

偕て歐洲を全體として觀察致しますのに先づ現状維持の道具たる聯盟があります。次にフランスを中心にして現状維持派が目下の處では遙に優勢を占めて居る。其の内特にバルカンに於いては北の方に於いては中歐、南方に於いてはブルガリアに對して、一方小協商、他方バルカン協商と云ふ現状維持派があり、その二つが結び着いて現状打破派たる中歐及びブルガリアに對し、平和條約軍事條項の守られてゐる今日に於ては、尠くも數に於いて七倍以上の優勢を示して居るのでありますから、バルカン全體といふものは、昔のバルカンに較べると、比較出来ない程安定力を増して参りましてヨーロッパに於いて一つのスタビライジング・フォースとして認められ得る様になつたと私には一應考へられるのであります。さうして小協商及びバルカン協商は、條約改訂派であるハンガリーとブルガリアを優に制御して居つて、ヒットラーがやつたやうな軍事條項を堂々と破棄するといつた様な眞似はさせないといふだけの威力を、如實に發揮して居るのであります。これが著しく大戰前のバルカンと較べて今日のバルカンの變つて來て居る點で、バルカンは今や一安定力となり、歐洲の第一の火藥庫ではなくなつて來たと私は考へるのであります。

併しながら、右のやうにバルカンが變つて來て居ると言ひましても、全然無留保にさうは申し上げられないのであります。バルカン協商の安定力たる壓力に於いて一面に缺陷もあるのであります。第一はこれらのバルカン諸國は歴史的に見て成立後日が尙淺く、爲めにトルコの總督に治められた地方であるといふ様な關係から参りますところの政治機構の弱點といふものをそれ／＼持つて居ります。ギリシアなどはその最も甚しいものでありまして、黨派心の浸潤した軍

部と政黨といふものが相結托し、黨が國家以上に置かれますので、政争は極端に馳せ、昨年も亦内亂を見たのであります。一九〇九年以來約十回、殆んど三年置きぐるに革命が起つて居るといふやうな實狀であります。程度の差こそあれルーマニア、ユーゴスラヴィアも無瑕とは申されません。そこで、是等の各國が持つて居る内部的の弱點といふものが、バルカン協商の安定力を殺ぐ一つの原因になつて居ります。

それから第二に、先に申上げたやうな理由で、バルカン諸國にリヴァリテイ抗争關係があるのであります。トルコとギリシアとは先にも申上げた通り、政府と政府の間は頗る情意投合して接近して居りますけれども、國民と國民とはかなり疎隔して居るやうであります。それから、ギリシアとブルガリアとの關係の徹底的に悪い事は先にも申上げた通りであります。ギリシアとユーゴスラヴィアとの間も、お互ひに猜疑の眼を以て見る關係にあります。即ち一九一四年世界大戰の初めに、セルビア、ギリシア間同盟條約に依り希臘は對境戰線に参加する義務を負うて居りながらセルビアを援けなかつたといふやうな關係もあり、其の外ユ・勃接近の流説、ユーゴスラヴィアのサロニカ進出の野心等もありまして、ユーゴスラヴィアとギリシアとの關係もお互ひに猜疑の目を以て見るといふ點がないではありません。

それから、第三にこの協商にはブルガリアも加はらず、アルバニアもまた加はらないのでありますから、普遍性を缺き、當初の狙ひ所であつた眞正の「バルカン人のバルカン」といふ口號は實現して居らぬのであります。斯ういふ意味で、バルカン内部の因習既に久敷き抗争といふものから、今の安定力が幾分減殺されて居ります。

それから第四には、バルカンの安定力を殺ぐ要素として、バルカン以外の大國の勢力影響といふものを擧げることが出来ると思ひます。戦前と違ひまして今日に於いてはその最大なるものはイタリアのアルバニアに對する特殊地位であ

ります。イタリアはアルバニアの獨立には世界大戦前の當初からオーストリー等と協力して援助を與へて居ります。併しながら、世界大戦中にはアルバニア北方はオーストリー軍、南方は伊太利軍を加へた同盟軍に依つて占領されましたが故に、アルバニアに就いて、イタリアとギリシアとで之れを分割しようとか、或は之れにユーゴスラヴィアを加へた三ヶ國で分割しようとか、或はイタリアの委任統治地域にしようとか、色々な提案もあつたやうであります。實現はされなかつたのであります。それで一九二〇年にアルバニアが重ねて獨立の國としての存在を續けるといふ時になつて、當時自由主義のイタリア政府は寧ろ快く南方ベロナ一帶の占領地から兵を撤退して、アルバニアの獨立を全うせしめてやつたのであります。併し間もなく、一九二一年の大使會議は、アルバニアの國境又はアルバニアの獨立を侵害するといふことは、イタリアの脅威を構成するのである、従つて若しアルバニアが守を失ひ領土を失ふ様な事になるならば、イタリアをして右失地を恢復せしめるといふやうな決議をやりまして、アルバニアがイタリアの勢力範圍たることを認め、てしまつたのであります。併しながらアルバニアは嘗て右の決議従つてまた伊太利の特殊地位を認めて居らないのであります。さうしてその後四年間はアルバニアは寧ろユーゴスラヴィアとイタリアの間に釣合と取つて何れとも不即不離將又中立の態度を保つて居つたのであります。併し一九二五年に、當時の總理、後の大統領、今日の國王であらせられるところのゾグ一世の政權が確立しましてから、アルバニアの親伊政策が確立して參つて、イタリアの勢力が侵々として伸びてしまつたのであります。即ち、最初に中央銀行借款と云ふものが出來て居る。それから土木事業の爲めに金を貸付ける。それから一九二六年の第一チラナ條約と云ふものが出來て、兩國が各般の方面に於いて特殊の協力をするアルバニアの政治的及び法律的現狀の攪亂と云ふものは兩國共同の政治的利益に反すると認める、アルバニアの政治的

及び法律的現狀を攪亂するものがあれが、互ひに一致協力して對抗しようといふ様な趣旨の約定を結んで居ります。その後、第二チラナ條約と云ふものを結んで居ります。これは二十年有効の防守同盟條約でありまして、平時及び戦時の軍事的協力を約束して居ります。その結果として、アルバニアの陸軍の組織、兵器彈藥の供給に關し絶對の特權をイタリアが有つやうになりました。即ち、士官を供給する、一時は八十人も士官を入れて居つた、それから武器を供給する、従つてアルバニアの軍隊とイタリアの軍隊とは何時でも之れを一所にして共通の司令官の下に立たせ得るようになります。唯例外は、參謀總長が一人オーストリー人でありまして、これは久しい因縁關係から來て居るのであります。それから憲兵隊最高顧問がイギリス人であるといふやうな例外もあります。之れは英國が此の地方に於いて特殊の野心を有せず信頼されて居る結果であります。此の二つの例外を除いてはアルバニア國の陸軍は即ちイタリアの陸軍であるといふやうに組織編成且調育されてしまつたのであります。それから當國の海軍の方は、六隻の砲艦から成つて居るのであります。艦長は孰れもイタリアの士官がこれに當つて居ります。それから農務省、商工省、大藏省には伊太利顧問が澤山入つて居ります。それから土木事業にはイタリアの資本技術を供給してその請負の任に當り、其の顯著なる一例としてイタリアの技師の雄大否な寧ろ龐大な計畫で、チヌラツオと云ふ港と、それに聯絡する軍事的の道路が築造されて居ります。アルバニアの中央銀行はイタリアの出資から成つて居り、本店はローマに在つて、頭取はイタリア人であり、さうしてその金單位はイタリアの通貨であり、支店長も皆全部イタリア人で、アルバニアには外國銀行はイタリア銀行を除いては一つもありません。それから航空權は全部イタリアが占めて居ります。それから石油、石炭、銅、アスファルトと云つたものを採掘する鑛山權は全部併せてイタリアがこれを獲得致して居ります。それからそのほか電氣

事業、セメント工業と云ふ様なものもイタリア人が獨占致しました。それから石油、ベンジン、マツチ、アルコール、砂糖に就いて專賣が行はれて居りますが、これにイタリア人が介入して利益の一部を占めて居ります。それから漁業權を一部イタリア人が獲得して居ります。それでアルバニアの輸出の六割、輸入の四割といふものはイタリア相手のものであります。でありますから、イタリアのアルバニアに及ぼして居る勢力といふものは、極めて廣く且つ深いと申さねばならぬのであります。

10

併しながら、アルバニアの立場から申しますればイタリアの資本技術將た又政治的關心を利用しようとしたのでありまして、自分の主權をイタリアに割譲しようといふのではないのであります。それで、今のやうにイタリア人が各種の特權を享有し之れを濫用してまで内政に干渉して來る、また時としてアルバニア人の感情を尊重したら宜しからうと思ふやうな時に不注意にも其の自尊心を傷ける様なことを敢てするといふやうなことから、追々反動が現はれて参りました、その反動は一九三三年に最も顯著になつたのであります。イタリアの顧問を數名解任したとか、多數のイタリア士官を解任したとか、憲兵隊にイタリア顧問の傭聘を要求されて之を拒絶したとか、北部地方のイタリア系加持力宗教學校——是は北部に多いのであります——を閉鎖するとか、それから七年後に改訂すべきものとせられて居る第一チラナ規約の改訂を斷つたとか、斯ういふやうなことで重ね／＼アルバニアがイタリアに對する不滿を表明致しました。これに對してはイタリアの方からも、然らば税關を押收して管理するとか、それから貸金の返済を要求するとか、若し

くは利子の拂込を要求するとか、貸付金に對する元利支拂計畫を立てることを要求するとか、これから貸出すことになつて居る金の拂込を斷るとか、對抗策が講ぜられました。それから一九三四年にはイタリアが軍艦を突如チュラツオ港に豫告なしに入港せしめたといふやうな威嚇をやつて居ります。それから、イタリアがバルカン協商規約に入つてはならぬといふことをアルバニアに申入れてこれを承諾させようとしたとか、イタリアが航空權をもつと擴大強化しようとしたといふやうな噂が傳へられて居ります。それから、イタリアがアルバニアに貸して居る重砲の返却を要求したとか、閉められたイタリア學校を開けると云つて要求したとか、色々な紛糾があつたやうであります。

併し、斯ういふやうに兩國が不和になるといふことは、一面ユーゴスラヴィアに機會を與へる原因でもあり、他面アルバニアの中央政府といふものはイタリアに對して徹底的に反旗を翻して立ち行くものでは絶對にありません。でありますから、アルバニアの政府も或る程度で折合はなければならぬといふ事情もありまして、一九三三年に極度に悪化した兩國の關係が幾分今は改善されてまゐり、イタリアが約定貸付金の殘額を拂込んでやつて居るといふやうなことを傳へて居るのであります。どの途、アルバニアにはイタリアの勢力が政治・經濟・軍事各方面に亘り深く廣く浸潤して居り、さうして従前の親密な關係が今は聊か冷却して居ると斯う見て差支へないと思ひます。

斯様な、バルカン以外の勢力の侵入を受けて居るアルバニアの要望を聞いて見ますと、アルバニアの望む所は自分の領土の確保及び獨立の維持、即ち自存を全うするといふことであります。これから割り出して、是非アルバニアの中立寧ろ永久中立といふものをユーゴスラヴィア、イタリア、その他の國に依つて認めて貰ひたい、即ちスキツツルのやうな地位を獲得したいといふのがアルバニアの外交政策の狙ひ處らしく思はれるのであります。これに對して勿論ユ

ゴースラヴィアは、アルベニアに於いてイタリアと均等の地位を得たいと狙つて居るのでありますから、このアルベニアの要求する中立保障を興へるのに賛成でありませうが、イタリアがこれを興へるかどうかは極めて疑問なのであります。今のところアルベニアの中立の地位獲得といふ要望は實現されさうもないのであります。

扱て、斯様にイタリアがアルベニアといふバルカンの一角に進出して來て居るのでありますが、それは一體イタリアの、アドリア海を支配しようと云ふ海上制覇の現はれであるか、それともサロニカまでも進出してギリシアを初めバルカン半島の南部を自分の勢力範囲に收め、或は小亞細亞にも進出して、あはよくは是等を併合しようといふ方外もない帝國主義の現はれであるか、そこは疑問なのであります。つまりイタリアのバルカン政策特に對アルベニア政策といふものが、アドリアチツク海の制覇の爲めであるのか、それともつと進んでバルカン半島に領土を廣めんとする爲めであるのかといふ設問に對しましては、これは將來の歴史の開展のみが答へ得る課題だらうと思ふのであります。

一

そこで滿洲國とアルベニアとの比較、つまり日・滿關係と伊・ア關係と如何に違ふかと云つたやうな事に就いてちよつと考へて見たのでありますが、勿論、弱い異民族が住まつて居る邊疆地方に及ばず大國の支配權——無論武力がその脊骨になつて居るのであります——といふ意味では日本の滿洲に對する關係とイタリアのアルベニアに對する關係との間に精神的方面は暫く措き餘り大なる差異もありません。併しながらその内容に入つて見るとかなり違ひが大きいのであります。言ふまでもなく、日本は生存を賭して長い間に既得權を確立し、今日は之れを生命線と考へて居ります。

イタリアの既得權の起源は先に申上げた通りで、左程大なる犠牲は拂はれてゐないのであります。世界大戰の際もイタリアがアルベニアを占領したのは、ヴァロナと云ふ極く南の方の一端だけでありませう。さうして時にイタリア軍とアルベニア軍と戦つて、イタリア軍が反つて驅逐されて居ると云ふやうな例さへあるのでありますから、その起源に於て相違があるのであります。それから世界政策の點から考へて見ますと、滿洲と云ふやうな大國の間のコンフリクティング・ポイントと申しますか、衝突點である人口三千萬を入れる廣大な地域と、バルカンの一角に於けるイタリアの勢力範圍とは、政治的の意味に於て著しい違ひがあります。それから利權の内容に就いて云へば、日本の滿洲に於て持つて居るものの方が複雑多岐でもあり、また廣汎でもあります。それからアルベニアの場合はイタリアが一つの民族を勢力範圍にして居るのでありますが、滿洲の場合は、日本が滿洲と云ふ支那民族のその一部分に支配權を及ぼして居るのであります。まして其の意味が違ひませう。従つて夫れから惹起される問題も其の性質が異つて参ります。それから尙ほ、滿洲に於ては治外法權とか、租借地鐵道附屬地とか、鐵道とかいふやうな機關を通じまして、その事實上の支配力を日本が揮ひ得まして、駐兵權と彼此協力し相補つて居りますけれども、イタリアはそれ等のものを持つて居らないのであります。日本は長い間に色々な條約上の協定に依りまして、政治的性質を帯びる國際法上の權利といふものを持つて居るのであります。イタリアの持つて居るのは多く事實上の、時としては私的の經濟的の權益であるといふ特質があるやうに思はれます。それでアルベニアに對して若し萬一、日本が滿洲に對して最近に及ぼしたやうな、あゝいふ支配權、擁護權をイタリアが確立しようと掛かつたと想像して、どうなるかといふ事を考へて見たいのであります。日本は日本の實力に依つて、御承知の通りの既成事實を招來致しました。イタリアが若しあれと同一の事をアルベニアに於てやらうと

するならば、極めて慄悍なるアルベニア人の反抗は、かなり根強いものがあるだらうと思ひます。それから國際聯盟といふものが伊太利、エチオピア間の紛争の場合に比し、比較にならぬ程有効に干渉して來るだらうと思ひます。國際聯盟の中核には、佛國を盟主とする現状維持派がある事を我々は忘れてはなりません。それから色々な缺陷もありませうけれども、兎に角「バルカン人のバルカン」と云ふやうな標語から生れたバルカン協商が、伊太利に反抗するでありませう。換言すれば、先づアルベニアの直接の背後にあるユーゴスラヴィア、次にその背後にある小協商、次にバルカン協商、次にヨーロッパ全體の現状維持派、最後に國際聯盟が一團となつてイタリアをしてさういふやうな冒險を敢てさせないだらうと、斯う私は考へるのであります。

のみならず、イタリアがアルベニアに向つて、今のやうな進んだ支配權を確立する可能性も、羅馬協定で佛伊接近が成り、伊太利、ユーゴスラヴィア間の緊張も著しく緩和され、殊にエチオピア問題と云ふやうな植民地問題が起つて、伊太利は悪くすると衰へるか、夫れとも遠く阿弗利加に伸びて行くか、其の瀬戸際に立つて居るのでありますから、さういふ關係で幾久しくイタリアのアルベニアに對する壓力と云ふものも下火となり、伊・ア關係の現状維持が寧ろ當分の傾向ではなからうか、と斯う私は想像して居るのであります。

それで、斯ういふ程度にイタリアの勢力と云ふものがアルベニアに加はつて居りますので、英佛は寧ろバルカン人のバルカンを口號とするバルカン協商規約に現はれたる運動に好意を持つて居ります。それからロシアは、昔と違ひまして、その持つて居るイデオロギーと云ふ點、また外交政策が防禦的であると云ふ點から、バルカンには昔と違ひましても當分は力が伸びて参りません。それから、昔汎獨主義を振り翳して進んで來たドイツ——全バルカン半島から小亞細亞

にかけて異常の政治的經濟的進出をして居た獨逸——も、今日に於いては精々、アンシユルス即ちオーストリー合併と云ふやうな手近かな問題でもがいて居り、バルカンに勢力を伸ばすといふことは忘られては居ないのであります。現實に其の壓力が加はつて來るのは遠い問題であるのでありますから、エキストラ・バルカニツク、即ちバルカン以外の大國がバルカンに勢力を揮ふといふことも、今のイタリアを除きましては、昔より遙かに減つて居ると結論し得るだらうと思ふのであります。

一一一

以上を総合して見ますと、成る程バルカンはそのスタビライジング・フォースとしての資格に色々な制限があるであらうませうけれども、バルカン諸邦としてもバルカン協商としても、矢張り現状維持派の陣營に幾分有力なる貢獻を爲して居るのであります。バルカン協商規約に加はつて居る國が全部集まると、人口に於いて四千五百萬、その陸軍軍備を集めれば量に於いて優に大國の軍備に當ると云ふのでありますから、歐洲現状維持派の陣營から見ますれば、今日のバルカンは火藥庫であつた昔のバルカンと違つて、ヨーロッパ全體の安定力にまで相當の貢獻をするやうな地位にまで進んで來ると斯う申上げて差支へなからうと思ふのであります。さうしますれば、バルカンと云ふものは、その程度に於きまして、ヨーロッパの火藥庫であると云ふ資格を失ひまして、寧ろヨーロッパの火藥庫と云ふものは、今や遙に西歐の方に移つて世界動亂の第一の禍源は、ドイツの東方國境から東南國境の方に位して居ると云ひ得ましょう。それから、世界の第二の危機は植民地にある。イタリアの次はドイツが舊獨領植民地、即ち今の委任統治地域を返せと

要求するでありませう。歐洲の進歩的政治家の一部は一般に歐洲の現状打破と云ふ事が起らないやうに、植民地の遺り取りに依つて歐洲内部での衝突を免れようと云ふ考へらしいのであります。つまり、ヴェルサイユ條約に依つて決められた領土の現状は維持しよう。併しその缺陷は、植民地の整調に依つて補つて行かうと云ふのが一部大國の方針らしいのであります。ハウス大佐の主張——ロシア・イギリス・アメリカ・佛蘭西は、日本・イタリア・ドイツに有り餘る其の植民地を少しづつ分けてやりなさいと云ふ植民地再分割論——は其のスポークスマンの役目を果したものでありませう。兎に角白熾熱の歐洲の安全瓣として、植民地の方面に於て、一つの現状變更の運動が試みられるのでありませう。

併し歴史の證明する限りそれは國際圓卓會議——戦後の平和會議は別——の問題には適しませんから、萬一左様な場面が展開したと致しましても寧ろそれには色々な制限があつて、充分な結果は得られませんまい。さうすると復は問題は歐洲内部へ戻つて行くだらうと思ひます。それから第三の世界の危機としましては、東方アジアの今動いて居る有様、特に赤露が南方に進んで来るのに對する不十分な、日支共同工作、將た又今日の日米關係と云つたやうなコンフリクティング・ポイントや、國際的の紛糾やを東方アジアに認めることが出来るのであります。

斯様な次第で前述の第一から第三迄の地點に世界の火藥庫たる資格が移つて、バルカンの方は先づ小康を得て居るといふのが、私が最近二年間バルカン方面に居つてバルカンを見た総合的印象でございます。勿論洪牙利、勃爾牙利の要求及び其の地位に鑑み、歐洲動亂が惹起された際、バル幹が其の圏外に立つと云ふ事は到底想像出来ません。従つてバルカンがスカンデナヴィアや、イベリア半島の様な半恒久的中立の地位を獲得したとは尙更ら申上げられません。夫れにも不拘歐洲の火藥庫はバルカンより獨逸の東方及び東南方國境に移動して、バルカンは反對に、歐洲現状維持派の

陣營に屬して、聊かながら歐洲の安定力たる地位にまで向上して來たと觀察せられるのであります。従つて私共は世界に於いて生命躍進の壓力の一層大なる地方に、我々の注意を轉じて宜敷い理由であります。(昭和十一年一月下旬)

一九三四年十月、マンチエスター、ガーヂアン紙が新バル幹と題して、次の様に論じたのは、我々の全然首肯し得る所であります。

尙未開状態に在つて國際關係から見ても、平和脅威の原因と看做されたバル幹諸邦は、今迄は大國霸制政策の道具に使はれ、諸邦互に對立し、分離運動を互に利用した。然るに今や事態は根本的に一變した。世界大戦に依りバル幹諸邦の多數が民族の統一と領土の擴大とを實現し、大國の羈絆を脱して、獨立の基地を据ゑた。今迄大國の傀儡に過ぎなかつたバル幹諸邦は、大國の指導に服する必要がなくなり、彼等の共同の利益と之を擁護するに足る連帶關係の力を意識して自立するに至つた。伊太利がバル幹を制し様として失敗し、バル幹協商が國際的に大なる發言を有するに至つたのは之れが爲めである。

第五編 蘇聯獨伊等に於ける全體國家の顯現

第一章 經濟的民本主義論

一

余輩は嘗て經濟的民本主義なる言葉を偶發的に兩三回使用したことがあるが、今暫らく祖國を離れるに際し、聊か其の概念構成を試みて、世の識者の叱正を得度いと考へるのである。筆者は拙著『極東外交論策』第二編第五章「動搖する坤輿」に於て、次の如く述べて置いた。

余は保守、勞働、共和、民主、右黨、左黨等對立する萬國の既成政黨は多分保守と進歩との一般形式に還元して略誤なきを信するが、是等の黨派は政權を回つて抗爭する關係上、必ず保守進歩の何れかに偏するを常として居り、其の結果百弊の鬱積して堪へざるに至るや時に超然内閣起り、加之ムツソリニ、ヒトラー等の賢人獨裁政治を産むのである。而して其の成功と否とは是等賢人がピスマークの目分量に於て眞に天才的なるや否やに依つて決せられる。社會の動搖國內政治の紛亂は部分人の間の無政府状態にあらざれば、之を全人の綜合判斷に還元する際に於て此の目分

量を過るに依るのであつて、「動搖する坤輿」の國內問題は、實に斯の如き所に淵源し、其の解決點を暗示して居るのである。要之國內問題の領域に於ては、一面的眞理に過ぎない民主主義（政治的民主主義）及び社會主義（經濟的民主主義）が程度を越へて跳梁跋扈し、人間社會及び個我の内に潜む自然の法則等を餘りに蹂躪せんとしたことに、國內の動搖、國內の行詰りが淵源する。之を還元して自然の法則と人間の理念との間に、天則の一部たる勢力均衡の法則が確立せられたるとき、其處に一切の國內問題を解決する最高の指導精神が発見せられるのであらう。

此の經濟的民主主義なる語は、日本の特異性を加味する時、當然經濟的民本主義となるのであるから、外交時報十月一日號所載、拙稿「日本國際主義」に於ては、之を經濟的民本主義と改めて置いた。

二

マルクスは佛蘭西革命を封建制度に對するブルジョアの革命と認識し、次に必然的に放つて置いても不可避免的に、だから科學的には必ずやつて來る革命を、資本主義制度を體現する國家に對するプロレタリアの革命と認識した。従つてサンチカリズムの始祖ソレルも認めて居る様にアルキシズムの中心思想は階級戦争と云ふ一語につきて居る。従つて彼の思想は全體主義、全民族主義の否定と云ふ一語、將又階級的國際社會主義と云ふ一語につきて居る。斯様なイデオロギイが彼の思想の他の部分と共に、吾人の經驗の世界に適合しないことは明かであつて、共產革命は露國以外に傳播せず、歐洲の經濟學者はマルクスの經濟學が全體としての誤謬であることを餘蘊なき迄に論證して居る。唯日本の若き學生達が此の舶來思想に掙取され、極めて多數が思想的に、所謂同情者であるは嘆すべきである。

階級的國際社會主義の妥當しないことは余輩の國際軍備縮小問題及び極東外交論策の主要なるテーマであつて、既に充分論證し盡されて居るから此の方面は暫く措く事とする。一國內部に於て、マルクスに従へば尠くも九割九分を占むべき筈の貧民大衆を解放すると云ふ課題を、露國の共產主義者は解決して居るかと思ふに事實は之に反する。嘗て我國に於て領臺後本邦移民に一人平均五町歩かの土地を與へ、共產制度の變形とも認むべき均産制度を布いたことがある。然るに酔つて業を怠る者、産を治めざる者、病みて働く能はざる者ありて數年ならずして財産の不均を來し、土地は多く勤勉を治むる者に歸屬したと云ふことである。原因を平等にしても業に依り結果の不平等は既に斯の如きものがある。社會主義者がかかる事實を知らないかの様に人類經濟生活の結果の一面のみを見る。而して一人の資本家、一人の富者を見出して平等の消費に與らむと欲して茲に搾取者が居る。財産は盜品であると叫ぶ。所が結果は原因なしに來るものではない。今同船で食卓を共にせる小玉吞象氏の話によれば、高島易斷翁が尙事業界に雄飛せる頃、一日彼は、明治大帝の御臨幸を忝うした、一門の光榮として陛下をお迎へ申上げた翁は著しく其の懐を膨らせて居た。之に御氣附になつた陛下は懐のものは何かと仰せになつた。此の時翁は實は今日の光榮を擔ふに至つたのは自己一代の努力丈けの好くする所ではなく祖先より善行を積んだ結果であるから差當り父母及び祖父母の四個の位牌を懐にして陛下をお迎へ申上げた次第でありますと奉答した由である。吾人は此の話の内に達人の心境を發見して奥床しく思ふものである。偕て反對に共產主義者達は目前の果實丈けを見て其の均分に與らんと主張する、斯様な指導精神の下に何處に汗を流して生産に従事し働く馬鹿者があるか。共產主義の社會に於ては最小の勞費を以て最大の結果を收めんとする經濟主義は一切人を怠者にする様に作用する、即ち所得が一定して居る以上、怠ける程得である。生産が顧みられない所以である。

露國の物資の缺乏は今や次第に極端に走つて、露國人のニチエウオ主義、露國少數專制者の武斷的彈壓がないならば共產革命に對する反動革命は或は免かれぬ形勢にあると云ふ情報を聞く事屢々である。少數富豪の奢侈的消費を取上げて之を全國大衆に分配した所で幾何程生活標準向上を結果し得るであらうか。若かず原因を培ひ生産に精進せんには。余輩此の意義に於て見慣れない生産黨なる名稱に左袒する者である。嘗て圓覺寺の太田管長猥下が社會主義者は因果關係を無視し果を見て因を見ざるものであると語られたのは、マルキシズムの根幹を一刀兩斷したものと云ひうべきである。斯るが故に歐洲諸國に於てマルキシズムは社會民主黨となり、社會改良主義を標榜し、普通選舉に依り政治的社會主義が議院に於て克ち得る所を克ち得て満足することとなつた。工場労働者の社會主義即ちサンチカリズムが極端に走り、經濟機構を脅威するや、ムツソリニのファシズムは伊太利を其の全體主義を以て救済し、獨逸に於てはワイマル憲法起草者や履行政策論者の後に、國際的奴隸國となれる獨逸救済の爲に、ヒトラーの國粹労働黨が登場した。英國に於ては共產主義は勿論組合主義者の主要戰略たる總同盟罷工さへも受容れられなかつた。余輩は社會主義には一定の妥當する狭き限界があると信するものであるが、英國の失業保險制度は既に明瞭に右の程度を越へて居る。此の制度の下に於ては一家の主人たる労働者が寧ろ失業して官給を受けつゝ、家を守り、女房や子女を働かして副収入を擧ぐる方が有利であつて、かゝる制度下にありては生産力の老衰と相俟つて、英國の産業は國際的に敗退し、必然的に枯死し、アダム・スミスの排斥した保護貿易主義に歸還しつつある有様である。かかる狀勢の下に財政窮乏と相俟つて、先般失業保險費豫算節減の議が英國政府内に起り、遂に労働黨の分裂を來したことは人の知る通りである。

三

共產主義の妥當せず、社會主義の妥當する限界が極めて狭いことは前述の通りであるが、さればとて前述の有爲轉變を通じて富豪財閥資本家と稱せられる部分の地位は、斯の如き存在としては決して安固を加へて居らないのであつて、此の部類に屬する人々の犠牲は、加重する一方で輕減される傾向がない。パーランド・ラッセルは世界がマルクスの云つた通りにもならないが、又驚く程マルクスの云つた様に動いてゐると云つたが、此の言葉は充分よく理解されうる。大觀すれば、日本左右兩翼思想混淆の原因は實に近く茲に在るのである。實際某々の日本社會改造案、某々の斬奸狀と云ふが如きものを通讀するに、大多數は社會主義の經濟學說を大體其の儘受容れ、之に我國固有の皇室中心主義を配した程度のものであつて、時としてはマルキシズム以外の何物でもない様な極端な場合もある。文部省社會局が其のパンフレットに於て左右兩翼思想の混淆を恐れ、轉向者等を含めたる一部の右翼團體は左翼の伏兵にあらざるなきやを恐れつつある實情にある。此等の紛糾せる事實の内に、吾人は民族全體を推進する或る動力を把握しないわけには行かない。而して余輩は泰西の事態に鑑みて、經濟的民主主義なる名稱を右動力に附して置いたのである。即ちマルクスは佛蘭西革命と云ふ彼の所謂ブルジョア革命に將來の所謂プロレタリア革命を對立せしめたのであるが、余輩の見るところでは、佛蘭西革命は政治的、法律的、民本主義的實現の爲にする運動で、爾後の運動は結局に於て妥當するやうに、認識把握せられるならば、それと一體の繼續事業たる經濟的民主主義の爲にする運動に過ぎないものである。

西洋人が industrial democracy と云ふ時、之を産業的民主主義と譯するのが常であるが、此の場合の industrial は工場労働に關するの意に解すべきでなからうか。然りとすれば、"industrial democracy" なる語は労働主義特に工場労働主義を多分に加味して居て、未だ社會主義思想を蟬脱せざる思想である。之に反し、經濟的民本主義は、生産と消

費とを等分に顧念し、農、工、商の區別の上、に止揚し、民生全般を厚くすると同時に、國際社會の競争單位としての有機體たる國家の生存競争能力を高めんとする、一全の思想、國難及び經濟國難克服の原理である。

正統社會主義は社會主義的思想を唯物論と云ふ統一原理に關聯せしめ、其の論理を極端に迄推進した結果、マルクスに依りて組立てられたものである。併し漠然と社會主義的思想とも云ふべきものは、夙に古典の内に現はれ、論語にも孟子にも説かれ、時としては均産主義として、其の實施をさへ見たのである。加之佛敎に於ては無我無欲無一物と慈悲とを教へて居り、基督教の名畫で吾人の目に最もよく觸れるものは、基督が富める青年に向つて天國に入らむと欲する者は一切の持てるものを賣り、人々に頒ち施して十字架を負ひて我に従へと説いて居る所である（此の青年は基督の言を聞かず基督をして富者の天國に入るは駱駝が針の目を通るよりも難しと嘆息せしめて居る）。實踐政治學の領域に於ても、古來治安に處する君侯治世の要道は、産業、特に農業を興し民生を厚くするに在つた。徳川幕府時代に於て赤穂浪士の外には熊澤蕃山や、二宮尊徳や、野中兼山等が世に顯はれた所以である。西洋に妥當する經濟的民主主義は我國に於ては當然經濟的民本主義であらねばならぬことは先刻述べた通りである。

四

經濟的民本主義が民族全體の潜在意識の内に宿り生動して居ることは、三の歴然たる徵候に現はれる。一國の生活水準を定める官吏の俸給に於て事ある毎に年と共に、其の上下の間の収入の開きは小さくなりつつある。金持が兎角嫉妬の標的になり、ポールドウインはなるべく収入を目立たない方法にて費消せよと國人に忠告してゐる。反對に清貧の

政治家は歡呼して迎へられ、一般に國人は其の指導者たる政治家が勞働服を着て土いぢりをする寫眞などを見るを好み、西洋の此の頃の政治家は社會黨の擡頭も加はつて、パンカラの服装にパイプを喰へると云つた傾向である。非常時に入つて民族の全體主義を高調するの必要に逼られて以來、日本の責任政治家としても従來の政治家と環境風格の異つた人が登場する様になつたことも前記徴候の一つである。明治時代の富豪は高樓を築き、稀には美姬を貯へ、一夕の宴會に萬金を投げ、時に帝劇を買切り綠門を飾り豪者を天下に誇つたものである。昭和の富豪に於ては其の反對が傾向である様である。封建時代の遺物たる交通を害する様な大邸宅が次第に分讓されて行くのも同一の傾向を語るものである。勞働者の利益に偏重すれば工場は立行かす、都市に偏すれば農村は不可避免的に之に復讐し、百貨店は中小商工業者に其の利益を制限され、有機體として全體の福利を顧みねばならぬ國家は、確かに經濟的民本主義に依て推進せられて居る。經濟的民本主義は實に共同生存意思の歸結である。政治形態は民主主義と云つても、常に少數政治 localism の形態をとるを常とする。従つて不平等をも容認せねばならぬ次第であつて、悪平等は素より不可であり、悪不平等は更に一層不可である。經濟機構も工業生産等に於ては、マルクスの認めた如き資本集中主義の傾向の存在することも一面疑なき事實なる故、或る程度の不平等を容認せねばならないのであつて、悪平等や悪不平等は是非共之を排斥すべきである。之に反し美食は胃を傷ひ、自家用自動車は健康を傷ふもので農、工、商を問はず消費經濟はなるべく平等なるを可とする。政治的悪平等又は悪不平等と經濟的悪平等又は悪不平等と結合し、互に支持するとき社會的有機體としての民族國家の全體主義は著しく傷はれる様になる。五・一五事件に於ける動機に於ては、尠くも純眞を疑ふべくもない被告達は斯くの如き事態が既に存在すると、或は誤つて或は正當に思惟し、これに向つて突貫したものではなからうか。

五

人間の社會生活は實に複雑困難なものであつて、政治的善不平等を以て生産經濟の善不平等と消費經濟の善不平等とを保障する様な社會機構を必要とするものの如くである。だから思想困難、經濟困難の十字砲火の巷を通して進軍する組織化されたる民族共同生存意思、即ち民族國家の動向は農、工、商無差別に不可避免的に經濟的民本主義である。本主義は「常に來るもの」として一切の健全なる思想對策及び經濟政策の試金石として役立つものである。社會主義の換骨脱胎である統制經濟や、計畫經濟も亦經濟的民本主義の尺度に依りてのみ其の價值を判斷される。今日の思想混亂は畢竟するに唯經濟的民本主義の産みの苦しみに過ぎないものである。將來に於ける一切の人類の運動は此の主義に合する場合に於てのみ效果的であり、人類に永續的の福祉を齎らしむるも、之に反する場合必ず失敗に歸する。今日の國內情勢は經濟的貧民たる精神的貴族の政治を待望せしむるに似てゐる。

經濟的民本主義の口號は餘りに簡單且漠然であるが、其の眞諦を把握するならば其の大綱の實行は決して困難でない。經濟主義は國家が生産機構に干渉すること尠ければ尠ない程よいことを教へる。消費はなるべく平等がよいことは既に述べた通りだが、さりとて共產でも均産でも、分配の絶對且直接の均等は即座に曳て生産を害する。従つて國家は財政上の強要に應じつつ租稅政策、特に所得稅と相續稅とを以て經濟的民本主義を國民に強制し、保障してやればよい。戰債を負へる歐洲諸國の有産階級の負擔する所得稅は苛重なる累進率に壓搾されて金持は其の金持たる所以を享樂して居ない有様である。然るに我國に於ては好景氣時代以來所得稅は聊かも改正されて居らない。之では本來無暗には犠牲を

好まない富者に經濟的民本主義を實踐せしむることが出来ない。父祖に英雄が出ても子孫は兎角凡愚であつて父祖の功業を繼ぐことが出来ぬ。板垣伯に依て始められたる辭爵は追々流行となりつつある。相續税は經濟的辭爵である。我國の如く家族制度の名の下に相續税の軽い國は極めて尠ないのである。若し此の兩税制に徹底的改正を加ふるならば、經濟的民本主義は其の過半の要求を充し得るのである。

セリグマン教授は奢侈的消費の國有化を唱へてゐる。我國の如く奢侈的消費が私人の手に多く殘されてゐる國はない骨董品の高價なこと等は其の證據である。成る程帝國議會や中央官廳は今後相當立派となる見込であるが、東京市の日比谷公會堂や東京市役所を某々銀行某々會社の建物と比較するときは誠に思ひ半ばに過ぎる。經濟的民本主義は奢侈的消費が國有化されて社會的に必要又は有益なる消費となることを要求する。

頃者若槻民政黨總裁は今日の我國の財政經濟其の他一般の國情に鑑みて、目下に於て増税しないことは大なる誤謬であると力説せられた。余輩は同總裁の言に至大の共鳴を感ずると同時に財政經濟上の技術問題としてばかりでなく、既に滿洲問題の爲に多くの尊き犠牲が拂はれて居る今日、財政上意義ある而して必要な限度の増税を一般經濟原則及び租税原則を顧念しつつ行ふことは、國家的道徳上必要の所爲であつて民族をひきしむる所以なりと主張せんと欲するものである。

社會政策特に救貧政策は勿論結構であり、中産階級政策の如き古いかも知れぬが實は健全な政策である。唯注意しなくてはならぬことは社會主義と同様、社會政策も割合に早く其の妥當なる實踐上の限界に到達するものである。慈善と云ふことは之を受ける者の立場を見れば常によい事ではない。自助は常に最善の助けであり、又あらねばならぬ。社會

政策は自助は常に他助に優ると云ふ原則に従つて實行されねばならぬ。英國の失業保險は民族の經濟的敗戦主義を意味するのであることを吾人は記憶せねばならない。

六

以上は勿論經濟的民本主義の應用の全部ではない。之に依つて智識階級の失業——者社會の爆發的要素——の問題は解決されない。今日の就職難は政略的學校増設に依り誘致された適性なき者の都市集中、換言すれば智識階級の過剰生産に依り加重されて居る。併し若しも經濟的民本主義が徹底し、消費經濟の比較的平等が招徠されれば健全なる家族制度と相俟つて就職難の問題も緩和され其の危険性を失ふに至るであらう。

我國の思想國難、經濟國難と稱せられる實は一全の問題は、我國に嘗てなき名狀すべからざる精神的混亂状態を織出して居り、其の一部は五・一五事件の公判等にも現はれて居るが、之は決して對立せる階級の妥協ではなくて、共同生存意思に依りて結ばれたる有機體たる民族國家が自身を正しき道に推進する經濟的民本主義を發見し把握する過程に於て今尙暗中摸索を續けて居る爲である。國家が該主義を把握して之を實踐に移し、之と相俟つて各人が「人を守りて己を守らす」との覺者の境地に悟入するとき一切の國難は始めてよく解消するであらう。嘗て國際危局を按じて其の打開と否とが大和民族の群團本能の強靱性、帝國の國際社會に於ける生存競争能力の確保に懸ることを提唱せる余輩は經濟學の門外漢たるを顧慮するに暇あらず此の死活的國內問題にドンキホーテ的突貫を試み、農、工、商を問はず大和民族の幸福の總量と全人としての其の各分子の幸福の總量との一般的併行的増進を目指し、民族國家の共同生存意思を物質

的に保障する經濟的民本主義又は日本皇道經濟學を敢て提唱する所以である。(昭和八年十月十三日大連軌路ウスイイ丸にて草す)

第二章 全體國家主義は超剋す

一口に社會主義といつても夫には種々の傾向があつて一概に批判することを許さない、けれども社會主義の内特に思想體系として特色あるものをマルキシズム、又は共產主義、又は正統社會主義、又は僭稱科學的社會主義とするならば之に對立するものを概して社會改良主義と呼び、將又古典的社會主義と呼ぶことが出来るように思ふ。漠然たる社會主義的思想なればキリスト教理の中にも含まれてあつて、キリスト教社會主義が生れ得る、佛教でも儒教でも孟子等には特に社會主義思想の顯著なる現れを見る。之に反しマルクス主義は無産階級に組織を示唆し、闘争的精神を鼓吹する點に於て著しき特色を持つて居り、本主義だけが本當の社會主義として通る傾向であつた。過去十年乃至二十年間日本學者學生達が心酔し、四、五年前迄に此の種の本で店頭が溢れて居た。その後には轉向といふことが大手柄の様に持てはやされることになり、今日では最早轉向してさへも餘り手柄にはならなくなつた。マルキシズムの相場も下落したものである。茲で聯か露國より入つて全歐を見渡した状態を説いて、マルキシズム清算の態様如何を明にし、その國家主義に依つて克服せられたる所以を闡明して讀者の参考に供したい。

マルキシズムのマルキシズムたる所以は何處にあるかといふならば、第一にその階級闘争の精神でなければならぬ。所謂資本主義の生産組織における所謂搾取は、無産階級と有産階級とを對立せしめ、資本集中の傾向から無産階級は愈々絶對多數となり、無産階級の革命は必然的に來ると云ふので、持てる者と持たざる者との對立、其の抗敵關係の對立尖鋭化を説くものであつて、此の考はマルクス主義の中軸を爲すものである。社會民主黨の議會内に於ける政治工作に重きを置く社會主義、即ち政治的社會主義に反對して、直接行動を説き、サンチカリズムへ走つたソレル等は、階級闘争さへあれば社會主義は濼刺として生きて居るのだと説いたものである。

第二のマルキシズムの特色は、國際主義特に勞動主義特に勞動階級の國際主義といふことである。民族の對立、民族間の戰爭、それは所謂資本主義又は資本主義的帝國主義の衝突であつて、斯様な對立は無産階級の目から見れば無意義の戰爭である。眞に利害の對立するものあるは階級間の對立のみである。故に「萬國の労働者結合せよ」と説くのである。敗戦主義が茲から結果する。

第三のマルキシズムの特色は、民主主義の一層徹底することであり、社會民主黨の創設はこの事實から來て居る。それからこれに伴つて生産手段特に土地資本の共有といふことである。そしてその實際の結果として、正統社會主義者の期待する所は消費手段の均等分配、幸福の均等といふことであらう。茲において胃腑に最高の價值が認められ、一の胃腑と他の胃腑の間には序列關係はない。

唯物史觀とか、唯物辯證法とか、餘剩價值説とか、資本集中説とか、この外に種々面白い學説もあるが、之等は哲學や經濟學の根本問題、根本基礎には役立つであらうが、政治上の實際運動には聊か縁遠いと考へられる。従つて以上

の三點に照し、マルキシズムがその理論通りの結果を露國その他において得て居るかどうか、今聊か滯歐數箇月の見聞より割出して検討して見たいと思ふ。

二

先づ露國の現勢より筆を起さんに、從來露國を支配した少數の支配階級及びこれに近かつた大地主、資産家の數十萬人が國外に追はれ、或は殺戮（百七十萬人と算せられる）された。斯様なことは革命とか政變とか名のつく出来事には尋常のことであるけれども、斯様な大規模の殺戮や追放の例はない。然らばその後之に取つて變るべき無産階級といふやうな組織されたものが、産業の未發達な農業を主とする國家に存在して、夫が專制を行ふ様になつたかといふにそんなものは存在しない。受動的で假死状態の政府に不平を抱いて居る大衆に、レニン以下過激派黨員の及ぼした宣傳、特に平和と土地との約束が效を奏してあの様な成功を見た。昔からマルクスのいふ様な意味で、階級闘争はなく、今や兎に角無産階級が天下を取つたといふのだから一層それはなくなつて仕舞つた。歐亞に跨る大國の獨裁者になつた管のブルタリアトであるのに、飢渴にもだえて居る露國の饑民ほど世に救はれないものはない。トロツキーのいふ様な永久革命は、國際社會主義の拋棄から當然否定されて仕舞つた。或は共產革命後の露國が何等の競争なく凝然不動の平和な社會ならば、マルクスの見解は肯定されるかも知れぬが、露國においてマルクスの排斥する競争即ち共產青年の群に入り、大學に學び、政府の定説を受容し、*Communists* として出世しようといふ競争が實に盛んである。この人間の本性の前には、レニンも理想の顛落を嘆息したのである。階級闘争はマルクスのいふ意味ではなくなり、マルクスの否認せん

とする意味において強くなつてゐるのである。

露國に労働階級の國際主義が存在するであらうか、或る程蘇聯は無産階級專制國の聯盟を以て任じて居り、世界の労働者の爲に大建築を建て様として居るが、露國が夙に國際社會主義を拋棄し、一國社會主義特に國家社會主義、否寧ろ國家資本主義に復歸したことは何人も知る如くである。初めから過激派の下位に置かれた、第三インターナショナルは活動をやめ、只今行はれる宣傳は、軍備の充實、對日強がりの宣傳丈である。五時間労働制で漸く失業者をなくした國が、他國の失業労働者を頂戴出来る筈はない。労働階級の國際主義なんていつても、冗談にしか聞えない今の世の中で、露國もその例外ではない。

民主主義の徹底といふことに於て、露國は明瞭にマルキシズムの反對の傾向に働いて居る、*The Bolshevikman* といふ理論、即ち經濟的社會的動因が結局人間の全存在の規範になるといふ現論を推し廣めて人間の生活を全部經濟的の社會生活といふものに一致せしめ様とし、生産社會の自己満足といふ陶醉に人を追込まうとし、一切の宗教、傳統、文化感情、哲學を否認して行くのであるから自由は尠しもない、その反面は唯の專制丈ではなく、脅喝政治、探偵政治である。斯様な職能を持つ政治組織が寡頭政治、獨裁政治、官僚政治となり、結局は主義や方針やいつて居られなくなり、個人の權力維持が第一となり、最近ではスターリンとトロツキーとの排擠が見物であつたのである。露國の過激派は無産階級を欺してゐる。露國とは即ち少數過激派と同語であるのである。*Bolshevism; Theory and Practice* の著者は次の様にいうてゐる。

無産階級の專制はよしや獨裁者が從來の固有の方針を把持したとしても、無産階級に對する專制に變つて仕舞つた脅

喝政治といふものは、一度政治手段として利用されかかると留め度のないものである。勞農露國の脅喝制度は一種獨特の支配者の型を生じ、彼等は如何にその信條に忠實であるとしても、權力を何よりも大事なものと考へる。斯くて權力は民主主義的運動の場合とは、全く反對の基礎の上に築かれる様になり、個人の權勢が大事になればなる程、その權勢が社會の利益に一致するといふ保障はなくなり、權力は個人の我執殘忍性に依據するのである。

斯様な社會では偽善と腐敗は必至である。併も之を矯正する機能がない。コンソモリの青年となり、共產黨員となり出世しようとする青年等ばかりとなり、官僚主義は強化され、要人は昔の會社重役を兼ねてゐる。勞働組合に權力を持たせようといふ主張は否定され、過激派内部でも、スターリン一派の專制である。こんなに民主主義が否定されて共有もヘチマもあつたものでない。消費の均等は存在しない。特權階級は軍人官吏を始めとし、紙幣のルーブルに金ルーブルの購買力を持たす如き虚偽の方法に依り普通以上の生活をして居ることは事實である。一般の幸福水準は決して上つてゐないばかりでなく、反つて下つて居ることが實情である。

觀じ來れば、マルキシズムの約束は一つも果されて居ない。露國の實驗は人間性が變化するものでなく、政變革命は唯支配者團を取換へた丈けであり、改革は人間の徳性が惡徳よりもよく多く發揮される仕組を採用した場合にのみ有意義であり、而して露國の場合はマルキシズムの期待と全く反對に、ユトピアより最惡の國家資本主義脅喝獨裁政治に進んだものであることを語つてゐる。

一九三四年八月二十一日の倫敦タイムスは露國が第二次五年計劃の實行に入つて極東軍備、相當充實し來るに及んで急に浦鹽や沿海洲に對する日本の野心を高潮し、東支鐵道讓渡に關しても態度強硬となり、クレムリンの獨裁官達の日

本に對する敵愾心を挑發するに努めたことを指摘したる後、露國に新國家主義の高調し來れることを、雄辯に記述してゐる。

露國における最も顯著なる變化は、その國內戰線においてである。一九三四年春國內大衆に愛國熱を鼓吹する様命令が下された。爾來一種の武張つた音調が演説家や新聞紙を支配する様になつた。今でも蘇聯の宣言文や官製口號中には國際主義が標榜されてゐるけれども、併し最近始めて國際主義が行渡つた官許國家主義に依て挑戰される様になり、詩人音楽家等は祖國愛を歌ふ様命ぜられ、重要な内地消費向の政治演説や論策は祖國愛を禮讚し、愛國者になれと力説してゐる。社會主義の祖國とか、無産階級の祖國とか云ふ様な言葉は貫録を失つた。之を使ふとしても國境外への宣傳の時に限られてゐる。一九三三年來蘇聯政府即ち過激派と、コミンテルン即ち第三インターナショナルとの關係は變轉した。今迄は蘇聯政府が第三インターナショナルの機關であつたものが今や、第三インターナショナルが交つて蘇聯政府の機關となり、蘇聯の國家主義的要望を達成させる手段となつた。此の爲に蘇聯支配者の命令で、第三インターナショナルはその間隙を指蝕した。諸外國特に米國と滿洲國とに不安、罷業、騒動を惹起させ、そして右諸外國政府に壓力を加へ様としてゐる。此の關係の變轉は看取し難いが併し現實的である。

露國はマルクス主義革命の甘い所か反對に苦い夢を見たのみで、只今の貌は國家社會主義の出來損ひに過ぎぬものであり、而も最近は新國家主義で愛國熱の煽動に日も亦足らぬ。外蒙古の統治、支那の赤化強國植民地の反抗運動煽動は、帝國主義に陥つてゐる。露國においてさへ國家主義はマルキシズムを清算せずには置かないのである。

三

十二、三年前、余輩がローマに遊んだ當時まだ、ファシストの極左に對する戰鬥の最中であつた、停車場に到着しても労働者は中々荷物を扱はぬ、扱へば不親切に投げる、外に出づれば電車もタキシードも同盟罷業で動かぬ、ホテルでは行く度毎に必ず何か紛失した。何處へ行つても政府はある筈だが無政府状態であつた。今日の伊太利は全部が軍隊式である。電車の昇降、左側通行の勵行、眞に伊太利國民は生れ變つたといつてよい。併も唯一人の英雄の指導に依つてである。半分赤くなつてゐた伊太利に起つた此の出來事自身が既にムツソリニも力説して居る様に、マルキシズムの清算でなくて何であらう。

伊太利はダンテや、ヴァーヂルの歌つた民族的要望に拘はらず壞地利の爲に十全の統一を妨げられ、サヴォイ家に依る統一は辛うじて當時の共和主義者を抑へて出來たことで、北方と南方とは地方的利害を異にした。茲に輸入された議會主義は忽ちに小黨分裂の狀を呈し、そして苟合妥協に依り政府が出來たから政變常なく、伊太利統一よりムツソリニの登場迄七十四年間に、六十七回の内閣更迭を見たわけである。斯様な議會内の遊戯をこととする政府に手綱を握んで民族の生命の躍進するのを統御して行ける筈がなく、久敷伊太利を支配した自由黨の、ギョオリツチ内閣其の他の内閣の下に於て政府及官僚は唯消極的官職保有者の位地を充すに留まり、外政には全く無頓着であつた。之に憤慨して地中海アドリアチック海に發展せんとする保守的侵略的の民族主義者もあつたが勢揚らず、反對に政府の優柔不斷に乗じて獨立社會黨は議會内に於て相當の優勢を示し、労働組合は露國革命の影響を受けて頗る赤くなり、直接行動に終止し、同盟罷業はやむ時はなく、世界大戰中敗戦主義を宣傳し、倫敦協約に基き戦後充分なる代償を得る約束の下に戰爭を遂行して居る國軍を裏切つた。

社會主義者の陣營より出でたるムツソリニは「歴史的現實である民族」と、「生きたる現實である階級」との對立を調和させる方法はありさうなものと疑問を抱きながら、下士として従軍し重傷さへ負つた。一九一九年二月伊太利統一社會黨が伊太利過激派及び露國過激派と同盟して、美蘭示威運動をやり、僅に四十萬の共產黨員が四千萬人の伊太利人に強制的に號令しようとした時に政府及議會は何等之を抑壓仕様としなかつた。ムツソリニは唯一人敢然として起ち、退役軍人サンチカリスト等の内より同志二百人を糾合して、Fascist de Combattiments を組織し、共產黨、社會黨、既成政黨名稱の何たるを問はず國際主義者、巴里講和會議全權に對し戰を宣し、市街工場において政府が匙を投げてゐる共產黨員と渡り合ひ、各所で敵を傷め、一九二二年八月四十萬の黒襪衣隊を擧げて労働總同盟の仕組んだ總同盟罷業を打破し、政府以上の政府があることを天下に誇示し、十月三十日羅馬に進軍して大宰相の印綬を帯びた。

この未來の伊太利の救世主は、マルクスを抱いてスキスを流浪し、バブーフ、ニーチエ、ブランキ、ソレル、ヘーゲル、シヨベンハウエルを讀み、無政府主義者、國際社會主義者、左右兩傾向の社會黨員、共和黨員等と伴侶となり、又失地恢復論、民族主義、組合主義、君主主義等をも隈なく涉獵し、全部を自己の確信に統一して遂に彼一流の組合國家を編出した。彼の理論彼の實踐は階級闘争の否定であり、マルクス主義の抹殺である。彼は自足的唯物主義を人生の幸福に關する謬想であるとして排斥し、人間を唯の傀儡として取扱ふ唯物史觀を否定し、變容調和し得ざる階級闘争の存在を否定した。彼は労働者といふ代りに就業者といふ文字を、使用者といふ代りに、業務授與者といふ文字を用ゐる。新労働憲章の第一條に従へば伊太利國はこれを組織する個人又は個人の集團を超越したる目的あり生命あり、且つ活動主體たる有機體である。伊太利國は道德的的政治的經濟的統一體にして、ファシスト國家にその完全な體現を見るのであ

る。階級闘争の手段たる罷業及工場閉鎖は禁止されねばならぬ。勞資は組合の内協調せねばならぬし、労働裁判所の判定に従はねばならぬ。フランス國家は不勞所得者即ち寄生虫的有産階級丈けを逆遇する、フランスは戦時利得者や大銀行家を嫌ふ。この點において彼等は國際金融資本主義に反對する、彼等は第二及び第三インターナショナルと結ばれた労働組織を破壊して來た。フリーメイソンは、フランスと兩立しないとしてこれを貶した。御人好の愛他主義や他國の軌道に直ぐ乗る様な國際主義は負擔しきれぬ贅澤としてこれを排斥し、羅馬を直に倫敦巴里と同列に置いた。フランスは奮闘的生活を禮讚する、ムツソリニは危険を賭しつつ生きることを座右の銘としてゐる。彼等は平和主義を唾棄し、聯盟を無價値のものとする。恒久平和の可能性をも信用をも信じようとせぬ。戦争のみが人間の全精力と全徳性とを發揮するものとして軍國主義を謳歌する。ムツソリニが最近陸軍大演習の際爲したる演説は彼の卒直なる思想の告白と見て引用に値する。

誰も戦争を望む者はないが全歐の雰囲気は戦争熱で充滿してゐて、何時勃發するか知れない。先月國境への出兵——ナチスのドルフス殺害事變の際——は平和を確保し得た。伊太利 戦争の用意をなし、武装國家となり、軍國主義的かつ好戦的であらねばならぬ。國家の政治、經濟及び文化的的生活は、軍事的必要に基礎を置かねばならぬ。蓋し戦争は國際間の最高裁判所であつて、善意や國際會議や議定書やに拘はらず、戦争は恒久に國家の運命を決定するものであらねばならぬからである。

フランスは國家を過半数といふ數の觀念に結合した民主主義に反對し、人間社會を培養する精神力の不平等を確認し量よりも質に重きを置き、四年に一度數に相談をするといふ様な選舉制度に反對し、統治機關に階級を認め、訓練を徹底せしむる。現今下院はフランス最高會議の提案する四百人の候補者名簿を丸呑みにさせて出來上るのである。ムツソリニは宰相就任後最初の演説において、議會を敵視はしないが、その存続は彼の寛容にのみ依ることを斷言してゐる。ムツソリニは民主主義を排斥する反面において權力集中には非常の注意を拂ひ、黨の總裁、總理、七つの各省大臣の地位を充し、大宰相の權能を擴め、中央集權を實現し、政府の地方團體管轄權を強め、監察官を任命し、思想的敗戦主義を抑壓し、財政上經濟上國家の利益擁護に必要な權能を掌握した。歴史上一國一代の歴史が一人の名前に依つて代表せられること、今日の伊太利の如きものはない。

フランスの一宣言中には次の文句がある。吾人は人類の文明を救済し、これを偉大ならしむべき羅馬の使命を信ずる。吾人はダンテの豫言し、グアージュルの禮讚したる羅馬帝國の回歸すべき宿命を信ずる云々、ムツソリニは自身出征せる負傷兵であり、戦死者廢兵の心に描いた祖國を實現しようと邁進するが故に、彼は是非共帝國主義者たらざるを得ない。彼の思想體系を國家社會主義と云ふならば、其の分析たる實踐綱領の基礎を爲すものは、大統一伊太利の爲にと云ふ一念である。彼は或る機會に爲したる演説に於て、今日余輩は落着いた良心を以て斷言する。今は二十世紀であり伊太利制覇の世紀であり、個人及國家の救済の爲に、吾人の發見したる主義以外に何等頼るべきものなければ、本世紀は伊太利が三度人類文明の統裁者たるべき世紀であらねばならぬ。と述べて居る。彼の此の國家主義は國軍の重視其の充實擴張に現はれ、國家總動員法に現はれ、特に羅馬に施したる土木事業に現れて居る。併し彼の政治哲學研究家としての難行苦行の結果を語るものは完全國家主義とも名附くべき組合國家の形態である。

國家主義と社會主義民族と階級とを調和させやうと考へ詰めたムツソリニは、その運動の始めに於て既にポポロ、チ

タリテ紙上に組合國家の觀念を表明して居つた。後日彼は組合國家の觀念を次の如く指定してゐる。

個人も政黨、協會、俱樂部、労働組合、階級等の團結も國家の外に於て成立を認め得ない、故に、フアシズムは歴史開展上に於ける階級闘争に執着し、各階級を單一の道德的經濟的實在體に作り上げて國家的統一を無視する社會主義に反對する。同様の理由に依りフアシズムは、労働階級の國際聯合に反對する。併しながら調節的機能を有する國家の圈内に於て社會主義運動を起させ労働組合を結成せしめた現實の必要に關しては、フアシズムは之を承認し、之を組合國家の内に具現せしむるであらう。組合國家は統一國家の内に於て一切の利益を調和するものであらねばならぬ。

フアシストは組合國家省を設け、その立案適用に任せしめてゐる。その立案の指導精神は國民の社會、政治、經濟生活、特に生産分配の問題をも、國家生活に織込まんとする點に特色を有す。次に組合國家の形態如何といふに、各産業は工業、農業、商業、銀行業、海陸交通業、空中運輸業、學藝従事者に別たれ、一方において勞資各別に地方組合郡聯合會、縣聯合會、全國聯合會を組織し、他方において地方、郡、縣、全國の各地域毎に勞資合同して組合を組織し、勞資充分に接觸して同等の地步に立つて協調し、紛争を解決するものとする。この組合總聯合の上には、宰相と組合全國理事會とがあつて全部を統制する。その勞資協調主義の組合に出發し、ギルド・ソシアリズム等の思想を取容れて居ることはいふ迄もなく、勞資は國家といふ立場に於て一致妥協を餘儀なくせられるのである。之が社會主義を清算してその上に止揚した余輩の所謂完全國家主義であるのである。

四

巨匠ビスマルクの見事に仕上げた統一ドイツは、ウイヘルム二世の御轉婆外交に續く世界大戰から敗殘の憂目を見

た軍人は一舉に佛國を屠り、英國、露國に當り得ると打算したかも知れぬが、リエーヂユ、マルヌに阻まれて動けなくなり、或はレンネンカンブとサムソノフとの軍隊をタンネンベルグに迎撃するため、東普に兵を割かなかつたらよかつたかも知れぬが、兎に角結果は四年間一手に世界全部を引受けて惡戰苦闘し、東部戰線、西部戰線、對伊太利戰線巴爾幹戰線、小亞細亞戰線共皆敵を壓迫しながら内線作戰の悲しさ、一敗地に塗れた。ウイelsonの十四ヶ條に縋つて面目の立つ講和を仕様としたが裏切られた。アルサスローレンは人民投票に附し、ダンチツヒ、メーメル等は單なる自由港に仕様といふ要求は拒まれ、獨逸も聯盟に入り二年間に軍縮を協定し様といふ要求や、戰爭責任に關する條項削除の要求等は一蹴された。植民地は全部取上げられた上、委任統治への参加は拒まれた。活力ある國民なら必ず斯の如き苦杯を嘗めさせられたことに對し、臥薪嘗膽反動を起さずには止むものでない。従つて休戦は獨軍總司令部の要求に發して居るが、獨國內においては戰爭には勝つたが、佛國人に買収された獨逸労働者の内亂のために蹉跌したと信ぜられて居る。戰敗の際社會主義黨が出て、天下を救ふは論理であるからその通りになつて、世界一の民主的憲法が出来上つた。この左傾運動に乗じ社民黨の力をそぐスパルタクスト獨逸共產黨が擡頭し、地方には過激派政權さへ出來た。之に對する反動たるカッツ革命は總同盟罷業で倒れて仕舞つた。戰勝の夢、皇帝、軍隊、政府らしき政府、訓練を失つて獨逸は無政府状態に陥つた。レナニーは占領され、ライン橋頭の諸都市において佛國殖民地からの黒人兵がホテルを占據して壁に唾した。賠償問題は商品で取つて貰ふ外拂へるものではない。その行儀みから間もなくルールの占領となり紙幣は垂直線に落下した、芝居の切符を卵やバタで買ふ様になつた。六千磅の蓄財が半磅にさへ減じた。中産階級は消滅した。唯この期間に猶太人、大工業家、百貨店主などが政府から損害賠償を受けたり、爲替で儲けたりしたと傳へられ

た。今日でもドイツ人の九割以下は月收二百馬克以下で、獨逸人生活水準の低下は目に附く、平和條約の結果として炭坑の一割六分、鐵鑛の四割八分、鐵工業の一割九分、亞鉛工業の五割九分、鉛工業の二割四分、硫黃の一割二分、人口の一割三分、歐洲領土の一割三分と植民地全部と獨逸生産力の一割五分とを失つたことを思へば當然の結果である。斯の如き絶望状態において行李を持たぬ男女が柏林のホテルに時間で間借する様になつたのは不思議でない。かかる際人心を作興するものは、若し過激主義でないならば極右の傾向でなければならぬ。ストレーマンの履行政策が暫く續いてドース案が出来、ロカルノ條約が出来、ドイツは種々の權利を抛棄して、ダンチヒ、オートシュレージ委任統治等で癢に觸つてならない聯盟に加入したが、ストレーマンは「Joh werde es nie können」といつて自己の政策を徹底し得ないことを嘆じたといふことである。

下士として出征して毒瓦斯で負傷し、鐵十字章に叙せられた、ヒトラーは一九二〇年に彼の國家社會主義の綱領二十五ヶ條を書き、ドイツ國家社會労働黨を創設し、ミュンヘンで、ルーゼンドルフ將軍と共に革命を起し、投獄せられ、マイン・カムプを書いた。宣傳に天稟を有する彼は、ワイマー憲法が民主主義者、ウイルソンへの賄賂であることを指摘し、履行政策が何等の反對給付を齎さざりし事を説き、軍縮が獨逸の一方的軍縮に終りし事を指摘し、ドース案に従へば獨逸は一時間に二十八萬八千馬克、一秒間に八十馬克支拂はねばならぬと説き、空腹な無職業者六百萬人其他特に智識階級の青年等を自己の陣營に拉致し得た。突撃隊や保衛隊を組織して労働組合や社民黨の政府と戦つた。一九三〇年九月六百四十萬票、一九三二年七月千三百七十萬票を得て合法的の選舉に依り大宰相の位に登つた。飢渴と絶望とが彼の味方であつて、之を組織化して目的のある精神力となしたことが彼をして獨逸の救世主第三帝國の創造者たらしめたのである。

たのである。

ナチは、階級闘争を否定するものである。さればヒットラーは労働者に彼等の重要性を、農夫に彼等の必要性を説くことは毫も必要なく寧ろ必要なるは都會人に百姓の必要なることを説き、知識階級に労働者の必要なることを説くことである。労働者農民に智識階級がなければ獨逸民族の生活も空租のものとなることを説くことである、そして智力、精神力、腕力を一につに組合はすことであると述べて居る。インフレーション時代を通過した獨逸は既に國家即ち貧民階級になつて仕舞つたが、ナチは成るべく小産者特に小地主等を保護する立法を通過してゐる。生産組織においては資本家、事務員、技手、労働者の協調主義を高調し、各その私を主張することを抑へ、資本家に多くの發言權を與ふる替りに、重大なる責任を負はしめてゐる。獨逸人は權力に對し、服従することを知り、軍隊式訓練を愛好する、ナチの組織がユニフォームからして軍隊式である。その外交政策はヴェルサイユ條約の不平等な條項を撤廢せしめ、獨逸語の話される一切の地域に再び勢力を伸べ様とするに在る。加之ナチは彼の汎獨主義の相續者として獨逸民族の高遠なる使命といふ様なことを信じてゐる。従つて第三帝國は軍國主義的であつて敗戦主義では斷じてない。

國際主義といふ様な言葉は全然空虚の觀念であつて現實政治の世界には存在しない。ヒットラーは失業者の飢を救ふ爲に贖金をする所謂 *Winkelhülfe* 運動の演説を結ぶに當り、吾人は無産階級の國際連帯を打破し、其の代りに獨逸民族の生命ある全國的連帯關係を樹立せねばならぬと述べてゐる。實際敗戦して全部無産階級になり、國際的に壓迫されてゐる獨逸人には國境を越へて國際的に組織された社會主義とか金融資本主義とかいふものは無意味である。彼等に取りては唯富強なる舊敵國に對する怨恨あるのみである、平和主義の否定せられ、國際聯盟の呪咀せられ、國家主義の獨り

高調される所以である。

ナチは民主主義に反對する、獨逸における議會制度は利己主義を追求する政黨の苟合となり、之等政黨に依り賣國的ヴェルサイユ條約は調印せられ、亞米利加に媚ぶる爲の民主主義的憲法が出来てゐるからである。此のナチの政綱は現れて *Ernährungsgesetz* 四年間の獨裁政治の樹立となり、中央集權の確立に依り、*Reichstatthalter* の任命となり、*Führersprinzip* に従つて大統領と宰相の地位とをヒットラーの掌中に集中するに至つた。

以上の如く、ナチはマルキシズムを排斥し去る以外に、積極的にヴェルサイユ條約及び佛國に對する敵愾心を養ひ、軍隊式訓練を普及し、再軍備に腐心し、中央集權を確立し、人種主義を力説し、汎獨主義的思想を涵養し、アーリアン人の血液を純潔に保つを名として猶太人の排斥を敢行し、これを官僚中より追ひ、その學生數を制限し、自由職業に従事し得る割合を制限し、失業問題に腐心し、工業と競争しない土木事業等の爲に強制労働をなましめ、婦人の就職を阻止してこれを家庭に歸らしめた。宣傳大臣ゲーベルの述べる所に依れば、ナチの政權獲得後一年間に、失業者は六百萬人を減少して三百五十萬人となり、破産件數は四割六分を減じ、協議契約の申請は七割六分を減少し、工業生産額は一割二分を増し、住宅は二十萬戸の増加を見てゐる。ナチ黨部の最近の發表に依れば、その政權は罷業、工場閉鎖を廢し階級戰爭を廢し、百五十萬人の労働者に長き休暇と保養の機會を與へ、七萬人に海上旅行の機會を與へてゐる。

これ等は凡そ科學的社會主義といふ思想に縁遠く國家主義の内部的發展に外ならぬ。數千人が定住地を求めるときに大地主の土地は其の儘維持出來ぬ。九割迄が貧乏であれば一部の者の法外な富が存在しきれぬ。一般の收入が落れば少數者の高き俸給は引下げられる。一般人が不安となれば少數のみ平安をむさぼるわけにゆかない。民族的統一の爲には

民族的正義が維持されねばならぬ。社會主義に多少でも妥當するものあれば、それは皆民族主義に内在する。凡そ政綱と行爲と結果とは夫々異り得て最後のものが最も重要である。ナチが結局に於て何を意味するかは不明であり、左傾するか右傾するか人は判断に迷つて居る、併し余輩は若しナチが永續し建設的事業を達成するならば、夫が必ずムツツリニ同様の純正國家主義に歸することを疑はぬ。

五

フアツシヨ、ナチの運動は國際的に發展して居る。英國に於てモスレー卿の運動は相當の支持者があり、評判も悪くはない。唯英國は議會政治の祖國であり、政黨政治が理想的に近く行はれ、目下も聯立内閣が君臨して居り、議會政治に墮落の面影なく、數年前總同盟罷業勃發の際には、労働組合の方にも秩序があることと相待つて、政府は完全に之を克服したのである。自衛警察隊の必要は英國に於て左迄大でない。

佛國の政治はフリーメイソン左傾政黨の掌中に在る。組合労働者の力は強く、情實政治が行はれ、國家は喰ひ物とされ終り、右派は頗る壓倒され氣味である。フアツシヨ、ナチに依り南北から脅威されて、敗戦主義者のことと格別の反動を示し得なかつた。外交政策に見角煮え切らず聊か譲歩を重ねた。然るに佛國政黨政治の墮落を如實に物語るスタヴイスキー事件が起つて、右傾團體、愛國者團體、在郷軍人團が下院を襲撃するに至つて、頑強な左派内閣を遂に倒し、政黨の休戦を意味するツームルグの聯立内閣が出来上つた。當分議會政治は休業であり、その間が佛國の花である、佛國のフアツシヨは未だ無力であるが、自由主義議會主義が一時にもせよ、國家主義に依り克服せられたことは明瞭であ